

学びと交流の 場づくり

中国中高校日本語教師研修会プロジェクト 1996-2002



はじめに

(財)国際文化フォーラム(TJF)は、1996年度より2002年度まで7年度にわたって毎夏、中国で中高校の日本語教師を対象とする研修会を開催しました。参加した研修生は、523名、講師および研修会用の教材制作に関わった日本語教育専門家は、合わせて97名に上ります。研修会は、日中共同のプロジェクトとして企画、運営されましたが、中国側、日本側とも複数の機関が主催者として参加し、助成・後援・協賛の団体・機関も50を数えます。TJFにとっては、まさに一大プロジェクトだったといえます。このような本格的な中高校日本語教師研修会は、中国側にとっても初めてだったことから、開催当初は試行錯誤の連続でした。そこで研修会終了後には、毎回研修生にアンケートを実施するとともに、全講師にレポートを提出していただき、提起された課題を整理して次回に生かしていく努力を続けました。

本書は、こうした研修会に多大な協力を惜しまなかった多くの日中官民の機関・団体・個人に対する感謝をこめて、一主催者の責務としてTJFが独自の視点で研修会を総括したものです。本書を作成した第一の目的は、研修会に関する基礎資料をまとめ、記録に残しておくことにあります。第二に、研修会に実際に参加した研修生がどのように研修会を捉え、研修会を通じて何を得たと思っているかを現時点でフォローし、分析すること、第三に、TJFが研修会を通じて蓄積したノウハウや学んだことを総括し、今後開催される同様な研修会の参考資料にしてもらうこと、第四に、中国あるいは中等教育段階の日本語教育事情に広く関心を持つ方々に情報を提供することにあります。

TJFでは、本研修会を単なる日本語教育支援事業として捉えていたわけではありませんでした。中国における日本語教育の質的向上を図るために、日本から日本語教育の専門家を派遣し、中国の日本語教師に日本語や日本語教授法を教えるということは、研修会の主要目的ではあっても、唯一の目的ではありませんでした。あくまでも研修会を日中の文化交流の場として捉え、その成果を何よりも望んでいました。中国の学校教育の一端に参画する以上、当然のことながら中国側の考えを尊重し、それに沿って研修会の中身をつくっていかねばなりません。しかし、中等教育段階における日本語教育の目標設定、目標達成のための方法論、教育のあり方そのものも含め協議することが多く、研修会は日中の日本語教育関係者の対話の場であったといえます。また、研修会を運営する日中協働の事務局もまさに文化交流の場となりました。TJFは、中国の中高校の日本語教師が現場で直面している問題を踏まえながら、中国側のカウンターパートとともに研修会の運営にあたりましたが、その過程では、考え方ややり方の違いから生じる誤解や行き違いを克服しなければなりませんでした。事務局はエネルギーのいる相互理解と学びの場でもあったのです。

さらに、2002年には、日本の中国語教師との出会いの場を設定することができました。TJFは、日本国内において高校中国語教育の支援事業を進め、日中の橋渡しをすることをめざしていたので、第2回の研修会からは、毎回数人の日本の高校の中国語教師にも研修会に数日間参加してもらって日中友好クラス交流のきっかけづくりをしていました。それだけに、ハルビンで開催された第7回の研修会で、長年の念願であった同時期・同会場での日中の教師研修会を開催することができたことは何よりも嬉しいことでした。つまり、研修会は、それに参加した人々にとって、出会い、交流、そして相互の学びの場となっていたのです。本書を作成する過程で、研修会という場で育まれたこれらの人の輪が、その後もさまざまな形で広がっていったことが確認されたことは、何ものにも替えがたい収穫でした。

本書を刊行するにあたって、研修会に関わってくださったすべての方々に対して、主催者として厚く御礼を申し上げたいと思います。とりわけ、中国側のカウンターパートだった、長春外国語学校校長の劉元松先生、東北三省・内蒙古自治区の教育学院の院長およびスタッフの方々、教研員の尹勝傑・王濤・姜万錫・申成日・曾麗雲・孫浴光・張石煥・陳弘法・董英玉・朴澤龍の各氏、中国教育学会外語教学專業委員会の劉道義氏・張国強氏、課程教材研究所の魏国棟氏・唐磊氏および各地の大学関係者、日本側の総括主任講師だった加納陸人先生をはじめ、主任・副主任講師の泉文明・永保澄雄・本田弘之・谷部弘子・山口敏幸・山田泉の各先生方、特別講師・教材監修者であった江淵一公・阪田雪子・姫野昌子・水谷修の各先生方、さらに7年度にわたって一貫して研修会を財政的に支えてくださった三菱銀行国際財団、日本からの講師派遣に毎回助成して下さり後半は日本側共催者となった国際交流基金、隊員を講師として参加させてくださった国際協力機構、研修会用教材の制作に助成して下さった東京倶楽部、教材の寄贈に協力して下さった在中国日本国大使館・在瀋陽総領事館、およびアルク・講談社・文化学園文化外国語専門学校・凡人社をはじめとする各企業・機関・団体、毎回1トンに上る教材・資料の無償空輸をして下さった全日本空輸、研修生との交流に参加して下さった中国各地の日本企業(駐在員とご家族)等の各後援・協賛機関・団体に、心から感謝の意を表したいと思います。

TJFは今後も、日中の子どもたちが、互いの言語や文化を学び、手を結んでいけるよう支援を継続していきますが、それもそれぞれの教育現場で子どもたちのために日夜奮闘する先生方と力を合わせることによって初めて実現できることだと信じています。

2005年5月
財団法人国際文化フォーラム

TJF の中国初中等日本語教育支援の歩み……………6
中国中高校日本語教師研修会 (1996-2002) 実施概要一覧…8
中国地図 ……………10

I 7回の研修会をたどる

1. 研修会実施までの歩み……………12

- (1) TJF の対中事業の始まり
- (2) 中等レベルにしぼった支援へ
- (3) 学習者奨励から教師支援へ
- (4) 第1回中高校日本語教師研修会開催の準備
- (5) 中高校向け日本語教科書の編纂への協力

寄稿「中日友好協力の結晶」張国強
「教学大綱」から「課程標準へ」——中国の教育改革と日本語教育の変化——

2. 中国中高校日本語教師研修会概要……………19

- (1) 実施目的
- (2) 参加対象
- (3) 参加条件と研修生選定
- (4) 開催時期と開催期間
- (5) 運営体制と役割分担
- (6) 三省合同開催からスタート
- (7) 三省個別開催へ
- (8) 内蒙古自治区に会場新設
- (9) 最終回へ
- (10) 講師
- (11) カリキュラム
寄稿「次世代を担う人材育成の場」加納陸人
カリキュラム一覧
各講義のねらい
- (12) クラス分け
- (13) 研修会教材
教材改訂の流れ
- (14) 関連プログラム
第7回(2002年)研修会日程表
作業日程表(1998年9月~1999年9月)

II 研修会の成果をさぐる——アンケート調査を中心に——

1. アンケート調査の概要……………46

- (1) 調査の実施概要
- (2) 有効回答の回収率
- (3) 有効回答の内訳
- (4) 調査項目
- (5) 調査結果の集計

2. 研修生のニーズに変化はあったか	50
(1) 研修生の期待：圧倒的に多い「日本語力の向上」	
(2) 期待した日本語力の内訳：7割近くが「会話力」の向上を期待	
3. 研修会に参加してどうだったか	52
(1) 総体評価：全体的に好評	
(2) 参加して良かったこと：日本語や教授法だけでなく教師の姿勢も学んだ	
(3) がっかりしたこと、辛かったこと：研修期間が短かった	
4. 研修会で得たことは生かされているか	60
(1) 学んだことを授業で生かしているか：9割近くが「生かしている」	
(2) ネットワークづくりはできたか：5割近くが現在も「連絡を取り合っている」	
(3) 教材・資料を活用しているか：概ね活用	
(4) 研修生の意識は変わったか：「教師の姿勢」と「授業内容・方法」の見直しが共に5割	
(5) 研修生の心に残ったこと：7割が「日本人講師の姿勢」に感動	

III 研修会の意義を再考する

1. 研修会の成果	74
(1) 日本語力と教授力の向上	
(2) 研修生へのエール	
(3) 「文化理解」の促進	
(4) 研修生や学校間のネットワーキング	
(5) それぞれの出会いと学び	
講師から見た研修会	
教員から見た研修会	
TJFスタッフが経験したこと・考えたこと	
2. 研修会後の状況と展望	93
(1) 初中等日本語教育への支援の強化	
(2) 中等教育レベルにおける日本語教育の状況変化	
(3) 研修会に代わる支援事業	
(4) 研修会後の各省の動向	

IV 資料

講師一覧	104
研修生一覧	106
カリキュラム	117
研修会申請書	128
アンケート調査票	130
「漢語話者のためのわかりやすいシリーズ」制作メンバー	134
日本側関係機関負担経費一覧	135

TJFの中国初中等日本語教育支援の歩み

年	中国の初中等日本語教育の動き	TJFの支援事業	関連機関の動き*
1949	中華人民共和国成立		
1950	人民教育出版社創立 初級・高級中学で外国語教育開始(ロシア語)		
1952	全国統一大学入試開始		
1958	全国統一大学入試中止		
1959	ロシア語と英語が主要外国語に指定される		
1960	全国統一大学入試再開		
1963	全国の主要都市に11の外国語学校設立		
1964	普通中学の外国語教育の強化へ		
1966	文化大革命開始、外国語教育冬の時代に		
1972	日中国交正常化、東北地域を中心に日本語教育実施校急増		国際交流基金設立
1974			国際協力事業団(JICA)設立
1976	文化大革命終息		
1977	全国統一大学入試再開(外国語は参考科目として試験科目に)		
1978	日中平和友好条約締結		
1979	全国統一大学入試の正式科目として外国語が加わり、外国語教育の強化へ		JICAが中国に技術協力を開始
1981	中国教育学会外語教学研究会設立		
1982	「中学日語教学綱要」制定、第二次日本語ブーム 教科書『日語』出版(初級中学用6冊、高級中学用3冊、人民教育出版社、1986年完成)		
1983	課程教材研究所設立		
1985	国家教育委員会設置(1998年「国家教育部」に名称変更)		
1986	「中華人民共和国義務教育法」制定 「全日制中学日語教学大綱」制定		JICAが中国に青年海外協力隊の派遣を開始
1987		財団設立	
1988	「九年制義務教育全日制初級中学日語教学大綱」(初審稿)制定	北京市青少年日本語コンテストを後援(1989～1996年は北京青年連合会と共催) 中国放送大学日本語講座の教材制作に協力(1991年まで継続)	
1989	大連市小学試用教材『日語』制作・出版(全4冊、大連市教育学院、1994年完成) 「普通高等学校招生全国統一考試」開始	全中国大学生日本語弁論大会を後援(1990～1992年は北京外国語大学と共催)	
1990	「全日制中学日語教学大綱」(修訂本)制定		
1991			JICAが中等教育機関に日本語教師の派遣を開始(年間1～5名)
1992	「九年制義務教育全日制初級中学日語教学大綱」(試用)制定 九年制義務教育三年制初級中学教科書『日語』制作・出版(全3冊、人民教育出版社、1995年完成)	第1回全中国外国語学校中高生日本語弁論大会を開催(長春外国語学校と共催)	
1993		第2回全中国外国語学校中高生日本語弁論大会を開催(武漢外国語学校と共催)	国際交流基金が日本語教育機関調査を実施

*中国中高校日本語教師研修会に関連する国際交流基金とJICAの主な動きを取り上げた。

年	中国の初等日本語教育の動き	TJFの支援事業	関連機関の動き*
1994		第3回全中国外国語学校中高生日本語弁論大会を開催(南京外国語学校と共催)	
1995		中国中高校日本語教師研修会開催のための予備調査を実施 第4回全中国中高生日本語弁論大会を開催(上海外国語学校と共催)	
1996	「全日制普通高級中学日語教学大綱」(供試験用)制定 全日制普通高級中学教科書『日語』(試験本)制作・出版(全3冊、人民教育出版社、1998年完成)	第1回中国中高校日本語教師研修会を開催(会場:長春、47名参加) 全日制普通高級中学教科書『日語』(試験本)の制作に協力(1998年まで継続)	国際交流基金が第1回中国中高校日本語教師研修会開催に協力
1997		中国中等日本語教育事情調査を実施(張国強、各省教研員) 第2回中国中高校日本語教師研修会を開催(会場:大連、48名参加) 研修会用教材の制作を開始	中国の外国語学校日本語教師が国際交流基金の日本招聘プログラムに参加 国際交流基金が第2回中国中高校日本語教師研修会開催に協力 JICAが青年海外協力隊シニア隊員を延辺教育学院に派遣
1998		第3回中国中高校日本語教師研修会を開催(会場:ハルビン、50名参加)	国際交流基金が第3回中国中高校日本語教師研修会開催に協力 国際交流基金が日本語教育機関調査を実施
1999		第4回中国中高校日本語教師研修会を開催(3会場:延吉、30名/ハルビン、31名/瀋陽、30名/計91名参加) 中国中高校日本語教師向け情報誌『ひだまり』創刊	国際交流基金が第4回中国中高校日本語教師研修会開催を助成 国際交流基金が北京事務所に日本語教育アドバイザーの派遣を開始 国際交流基金が中国の中等教育教師を対象とする短期招聘プログラムを開始(日本語国際センターにて2ヵ月間研修)
2000	「全日制普通高級中学日語教学大綱」(試用修訂版)制定 2001年度教育工作会議で小学校3年から英語導入を決定	第5回中国中高校日本語教師研修会を開催(4会場:フフホト、19名/長春、32名/ハルビン、31名/大連、33名/計115名参加)	国際交流基金がTJFと第5回中国中高校日本語教師研修会を共催、小中学校日本語教師セミナーを開始 JICAが青年海外協力隊シニア隊員を遼寧省と新疆に派遣。以降、中等教育機関への日本語教師隊員派遣が倍増
2001	「全日制義務教育日語課程標準」(実験稿)制定 義務教育課程標準実験教科書『日語』制作・出版(全6冊、人民教育出版社、2003年完成) 遼寧省『小学日語教材』制作・出版(全4冊、遼寧少年兒童出版社、2003年完成)	第6回中国中高校日本語教師研修会を開催(4会場:通遼、27名/長春、31名/ハルビン、32名/瀋陽、30名/計120名参加) 義務教育課程標準実験教科書『日語』の制作に協力	国際交流基金がTJFと第6回中国中高校日本語教師研修会を共催 国際交流基金が青年日本語教師の派遣を開始(黒龍江省教育学院、吉林省教育学院に各1名)
2002		遼寧省『小学日語教材』出版を助成(2003年まで継続) 第7回中国中高校日本語教師研修会を開催(会場:ハルビン、79名参加) 研修会用教材「漢語話者のためのわかりやすい日本語シリーズ」完成・寄贈	国際交流基金が遼寧教育学院に青年日本語教師1名を派遣 国際交流基金がTJFと第7回中国中高校日本語教師研修会を共催 JICAが日本語教師隊員5名を研修会講師として公費派遣
2003	「普通高中日語課程標準」(実験稿)制定	中国中高校日本語教育活動に協力・助成を開始	国際交流基金が日本語教育機関調査を実施
2004	「普通高中日語課程標準」準拠の高校用教科書の制作を開始	第1回全中国小学校日本語教師研修会を開催(会場:瀋陽、50名参加)	

中国中高校日本語教師研修会(1996-2002)実施概要一覧

開催年	開催形式	会場・期間	研修生数 550名 ^{※1}	講師数 159 (111) ^{※2} 名	主催
1996	合同	吉林省(長春:長春外国語学校) 8/5~8/16	47名	13(7)名	長春外国語学校、中国教育学会外語教学研究会、吉林省教育学院、(財)国際文化フォーラム
1997	合同	遼寧省(大連:大連市教育学院) 7/20~8/1	48名	16(11)名	大連市教育学院、中国教育学会外語教学研究会、遼寧省教育委員会、大連市教育委員会、吉林省教育委員会、黒龍江省教育委員会、内蒙古自治区教育厅、(財)国際文化フォーラム
1998	合同	黒龍江省(ハルビン:黒龍江省教育学院) 8/2~8/14	50名	19(11)名	黒龍江省教育学院、中国教育学会外語教学研究会、黒龍江省教育委員会、(財)国際文化フォーラム
1999	省別	吉林省(延吉:延辺教育学院) 7/25~8/6	30名	9(6)名	延辺教育学院、吉林省教育厅、中国教育学会外語教学研究会、(財)国際文化フォーラム
		黒龍江省(ハルビン:中国共産党ハルビン市委党校) 7/25~8/6	31名	9(6)名	黒龍江省教育学院、黒龍江省教育厅、中国教育学会外語教学研究会、(財)国際文化フォーラム
		遼寧省(瀋陽:遼寧教育学院) 7/25~8/6	30名	9(6)名	遼寧教育学院、遼寧省教育厅、中国教育学会外語教学研究会、(財)国際文化フォーラム
2000	省別	内蒙古自治区(フフホト:内蒙古教育基金会中日友好日語研修センター)8/18~8/28	19名	5(4)名	内蒙古自治区教育厅、中国教育学会外語教学研究会、国際交流基金、(財)国際文化フォーラム
		吉林省(長春:吉林省教育学院) 8/4~8/16	32名	9(5)名	吉林省教育学院、吉林省教育厅、中国教育学会外語教学研究会、国際交流基金、(財)国際文化フォーラム
		黒龍江省(ハルビン:黒龍江省教育学院) 8/4~8/16	31名	7(5)名	黒龍江省教育学院、黒龍江省教育厅、中国教育学会外語教学研究会、国際交流基金、(財)国際文化フォーラム
		遼寧省(大連:大連市教育学院) 8/4~8/16	33名	8(6)名	大連市教育学院、遼寧省教育厅、中国教育学会外語教学研究会、国際交流基金、(財)国際文化フォーラム
2001	省別	内蒙古自治区(通遼:カンチカ第二中学) 7/26~8/7	27名	7(6)名	内蒙古教育学会外語教学研究会、中国教育学会外語教学研究会、国際交流基金、(財)国際文化フォーラム
		吉林省(長春:吉林省教育学院) 8/5~8/17	31名	10(7)名	吉林省教育学院、中国教育学会外語教学研究会、国際交流基金、(財)国際文化フォーラム
		黒龍江省(ハルビン:黒龍江省教育学院) 8/8~8/20	32名	9(7)名	黒龍江省教育学院、中国教育学会外語教学研究会、国際交流基金、(財)国際文化フォーラム
		遼寧省(瀋陽:遼寧教育学院) 8/2~8/14	30名	10(7)名	遼寧教育学院、中国教育学会外語教学研究会、国際交流基金、(財)国際文化フォーラム
2002	合同	黒龍江省(ハルビン:中国共産党ハルビン市委党校) 8/4~8/15	79名	19(17)名	黒龍江省教育学院、国際交流基金、(財)国際文化フォーラム

※1: 550名は延べ数。実数は523名。
 ※2: ()内は、通常講義の担当講師数。

後援	助成／協力	協賛
<p>中国国家教育委員会基礎教育司、課程教材研究所、吉林省教育委員会、長春市教育委員会、吉林大学外国語学院、遼寧教育學院、内蒙古自治区教育厅、大連市教育學院、ハルビン市教育學院、在中国日本国大使館、在瀋陽日本国総領事館</p>	<p>(財)三菱銀行国際財団／国際交流基金</p>	<p>(株)アスク講談社、荒竹出版(株)、(株)アルク、(財)NHKインターナショナル、(株)おうふう、(株)キングレコード、(株)講談社、学校法人産能短期大学、(株)スリーエーネットワーク、全日本空輸(株)、(株)専門教育出版、大映(株)、(株)徳間書店、日本通運(株)、学校法人文化学園文化外国語専門学校、(株)凡人社</p>
<p>中国国家教育委員会基礎教育司、課程教材研究所、遼寧教育學院、吉林省教育學院、延辺教育學院、黒龍江省教育學院、ハルビン市教育學院、大連外国語學院、在中国日本国大使館、在瀋陽日本国総領事館、国際協力事業団</p>	<p>(財)三菱銀行国際財団／国際交流基金</p>	<p>(株)アスク講談社、荒竹出版(株)、(株)アルク、(財)NHKインターナショナル、(株)キングレコード、(株)講談社、学校法人産能短期大学、(株)ジャパントイズ、(株)スリーエーネットワーク、全日本空輸(株)、(株)専門教育出版、(株)創拓社、(株)大修館書店、大連日本商工クラブ、日本通運(株)、(株)バベル、学校法人文化学園文化外国語専門学校、(株)凡人社</p>
<p>中国国家教育委員会基礎教育司、課程教材研究所、ハルビン市教育委員会、遼寧省教育委員会、吉林省教育委員会、内蒙古自治区教育厅、遼寧教育學院、吉林省教育學院、大連市教育學院、延辺教育學院、黒龍江大学、在中国日本国大使館、在瀋陽日本国総領事館、国際協力事業団</p>	<p>(財)三菱銀行国際財団／国際交流基金</p>	<p>荒竹出版(株)、(株)アルク、(株)キングレコード、(株)講談社、(株)小学館、全日本空輸(株)、(株)専門教育出版、(財)日本語教育振興協会、日本通運(株)、(株)バベル、学校法人文化学園文化外国語専門学校、(株)凡人社</p>
<p>中国国家教育部基礎教育司、課程教材研究所、吉林省教育學院、延辺朝鮮族自治州教育委員会、内蒙古自治区教育厅、在中国日本国大使館、在瀋陽日本国総領事館、国際協力事業団</p>	<p>(財)三菱銀行国際財団、国際交流基金</p>	<p>(株)アルク、(株)講談社、(株)小学館、全日本空輸(株)、学校法人文化学園文化外国語専門学校、(株)凡人社</p>
<p>中国国家教育部基礎教育司、中国人民教育出版社・課程教材研究所、延辺朝鮮族自治州教育委員会、延辺教育學院、大連市教育委員会、遼寧教育學院、在中国日本国大使館、在瀋陽日本国総領事館、国際協力事業団</p>	<p>(財)三菱銀行国際財団</p>	<p>(株)アルク、(株)くろしお出版、(株)講談社、全日本空輸(株)、学校法人文化学園文化外国語専門学校、(株)凡人社</p>
<p>中国人民教育出版社・課程教材研究所、内蒙古自治区教育厅、遼寧省教育厅、吉林省教育厅、黒龍江省教育厅、在中国日本国大使館、在瀋陽日本国総領事館、国際協力事業団</p>	<p>(財)三菱銀行国際財団／国際交流基金(講談社よりの寄付金を原資とした国際交流基金特定助成)</p>	<p>(株)アルク、(株)くろしお出版、(株)講談社、学校法人文化学園文化外国語専門学校、(株)凡人社</p>
<p>中国教育学会外語教学研究会、課程教材研究所、内蒙古教育学会外語教学研究会、吉林省教育學院、遼寧教育學院、内蒙古自治区教育厅、吉林省教育厅、黒龍江省教育厅、遼寧省教育厅、在中国日本国大使館、在瀋陽日本国総領事館、国際協力事業団</p>	<p>(財)三菱銀行国際財団／国際交流基金(講談社よりの寄付金を原資とした国際交流基金特定助成)</p>	<p>(株)キングレコード、(株)講談社、全日本空輸(株)、学校法人文化学園文化外国語専門学校、(株)凡人社</p>

機関名は開催当時のもの。2005年5月現在、中国国家教育委員会は中国国家教育部、省教育委員会は省教育厅、市教育委員会は市教育局、遼寧教育學院は遼寧省基礎教育研究教師研修センター、国際協力事業団は国際協力機構。

中国地図



第 I 章

7回の研修会をたどる



1. 研修会実施までの歩み

(財)国際文化フォーラム(TJF)は、1987年に海外における日本語および日本文化に対する理解を促進することを目的として設立され、財団の主要な事業の一つとして、中国の日本語教育に対する支援に一貫して取り組んできた。支援事業を始めた当初5年間は、子どもから大人までの幅広い層を支援の対象としていたが、6年目から中等教育レベルに対象を定め支援を行ってきた。また、事業の内容も学習者奨励から教師支援へとシフトさせてきた。その歩みを概観する。

(1) TJFの対中事業の始まり

1972年の日中国交正常化以降、中国政府による改革開放政策もあって、空前の大衆レベルの日本語学習ブームがまき起こった。大学には日本語科が次々と設置され、1978年の日中平和友好条約の調印以後、中高校にも急速に日本語教育が導入されていった。

民間の語学学校で受講したり、ラジオやテレビなどの放送メディアを通じて日本語を学ぶ人が急増したが、1980年代後半になるとブームも下火になり、日本語教育は安定成長期に入っていた。TJFは、これらのニーズに応えるために、実用日本語能力を測定する日本語実力試験・日本語弁論大会・カラオケ大会などからなる「北京市青少年日本語コンテスト」^{*1}の開催(1988～1996年)、中国放送大学日本語講座の教材制作への協力(1988～1991年)、大学生を対象とした「全中国大学生日本語弁論大会」(1989～1992年)^{*2}などの事業を行った。

(2) 中等レベルにしぼった支援へ

1993年度前後よりTJFは、国際文化交流の推進を使命とする財団として、異文化間の相互理解を図るために、海外の日本語教育を支援するかたわら、日本国内のアジア言語教育(主に中国語教育と韓国朝鮮語教育)を促進する事業を新たに開始することを決定した。同時に、それらの言語教育支援事業の対象を初中等教育に絞ることを決めた。これは、海外における外国語学習者の低年齢化が進むなかで、小中高校生を対象とする外国語教育と異文化理解教育の促進が相互理解を図る上できわめて重要であるという認識に立ったからであった。その流れのなかで対中事業も見直し、「全中国大学生日本語弁論大会」に一区切りをつけるとともに、中国の中等教育における日本語教育支援に取り組んでいくことになった。

高まる中国の日本語教育のニーズに対して、日本政府は、1979年北京に大平学校を設立し(正式名称は、日本語研修センター。1985年に北京日本学術センターに改組)、全中国の大学の日本語教師の研修を開始し、本格的な支援を行ってきた。その結果、1990年時点で中国の高等教育における日本語教育および研究は、日本語教育実施機関数、教師数、学習者数のどれをとっても世界の国々のなかで群を抜く成長を遂げていた。一



第6回北京市青少年日本語コンテスト

※1：北京市青年連合会(会員約70万の大組織)主催のコンテスト。北京市在住の青少年の日本語学習を奨励することを目的とした。TJFは第2回大会(1988年)を後援し、第3回大会(1989年)から第10回大会(1996年)まで共催した。このコンテストには6歳から39歳までの北京市民が延べ10万人参加した。国際交流基金の日本語能力検定試験が1993年に始まるまでは、このコンテストの日本語実力試験が日本語学習者の能力を測定する唯一の試験だった。日中共同で作成した日本語実力試験の過去9年間の試験問題は、『北京市青少年日本語コンテスト10周年記念日本語実力試験問題集1987～1995年』にまとめ、1996年5月に刊行した。

※2：1989年から北京で開催された中国初の全国的な大学生の日本語弁論大会。1989年は後援。

※3：1960年代、周恩来の意向に従って、外国語に堪能な人材を養成することを目的に設立された国立の中等教育機関。六年制の中高一貫校。1992年に全国18校のなかで日本語科があったのは、上海、深圳、太原、長春、鄭州、天津、武漢、南京の8校。

※4：北京を中心に事業を展開していたため、北京以外の都市での開催を企画し、第1回大会は日本語教育が盛んな東北地域の中心である長春市で開催することに決定した。長春外国語学校は外国語学校の中核を担う名門校で、TJFの事業に長い間協力してくださった劉元松氏が校長を務めていた。第2回以降は、武漢、南京、上海の各外国語学校で順次開催した。第1回大会から延辺第一中学、長春第一外国語中学、北京月壇中学など普通中学も参加していたが、第4回上海大会にはさらにハルビン市第十三中学、上海市甘泉中学が参加したため、名称を「全中国中高生日本語弁論大会」に変えた。

※5：普通初級中学と普通高級中学をあわせて「普通中学」と呼ぶ。普通初級中学(初中)は日本の中学校、普通高級中学(高中)は高校にあたる。なお、本文中の中高校は普通中学をさす。

※6：1983年に設立された国家教育部の直属機関。初等中等教育の各教科に関する調査・研究や教材開発を行ったり、シンポジウムや学術会議を開催したりしている。

※7：全国的な外国語教師会のような組織。現在の教育学会外語教学専門委員会。

方、中等教育は、1970年代後半から1980年代にかけて実施機関数、学習者数は韓国に次いで第2位、教師数は第1位というように急成長を遂げていたものの、支援の面では遅れていた。TJFはまず、1992年に、大学生日本語弁論大会の経験を生かして、中国各地の外国語学校^{※3}を主たる対象として「第1回全中国外国語学校中高生日本語弁論大会」^{※4}を開催した。参加したのは、外国語のエリート養成の拠点である外国語学校のうち日本語教育を導入していた学校と日本語教育のレベルの高いいくつかの普通中学^{※5}だった。この弁論大会は、中高校生の日本語学習を奨励するとともに、中等教育における全国的な拠点ネットワークづくりと日本語教育への関心を喚起するという広報効果をねらった事業であった。弁論大会の開催にあたっては、TJFが知己を得ていた各地の拠点大学の日本語教育専門家から、審査や指導に関して惜しみない協力を得ることができた。

(3) 学習者奨励から教師支援へ

第2回大会からは、大会終了後2日間、引率教師を対象に小規模な日本語研修を実施するようになったが、引率教師と日本語教育関係者から「もっと本格的な研修会を実施してほしい」という声が年々高まっていった。TJFも、現場の声に耳を傾けながら日本語教育の実態を把握するにしたがって、中高校向けの教材提供と教師研修という基盤整備が日本語教育の質的向上のために急務であることを認識し、教師こそが日本語教育の質を決める存在であり、中国の初中等教育における日本語教育を支援するには、弁論大会よりも教師研修のほうが、その波及効果は大きいと考えようになった。また、中等教育の日本語教育を支援するのであれば、エリート教育を実施する国立の外国語学校ばかりでなく、東北地域の各省の中高校に対する支援も考える必要があると認識するようになった。

中高校の日本語教育事情調査

第3回大会終了後、本格的な日本語教師研修会を開催する可能性を探るために、中国の中高校における日本語教育の調査に着手した。各種のデータや過去の研究資料を入手するとともに、日本語教育が盛んな東北地域(吉林省、黒龍江省、遼寧省)や内蒙古自治区の日本語教育の実態を把握するためにインタビュー調査を行った。その結果、中高校の日本語教育実施校の約8割が東北地域に集中していることや、日本語はそれらの中高校で第一外国語として学ばれていること、しかし、中高校の教師は研修を受ける機会もなく、教材も教科書しかない状況におかれていることが判明した。

調査の過程では、後の教師研修会開催や中国での事業展開にあたって、なくてはならない人々との出会いがあった。中国の国家教育委員会(現在の教育部)で、中高校の日本語教育の研究や教材開発を統括していた課程教材研究所^{※6}の日本語室主任の唐磊氏など関係者や、中国教育学会外語教学研究会^{※7}理事長の劉道義氏、同研究会日語専門委員会会長の張国強

1. 7回の研修会をたどる

※8：初中等教育の教育研究や現職教師の研修を行っている機関。

※9：教員は、教材の研究や作成、期末試験や入学試験などの問題作成、巡回指導や研修会開催など教師研修のための業務、弁論大会や作文コンテストなどの学習者奨励業務などを行っている。



上海で行われた第4回弁論大会でスピーチをする高校生



研修会場に掲げられた歓迎の看板(第1回研修会)



開講式の壇上には、日中の主催者や来賓、主任講師が並ぶ(第2回研修会)

氏との親交はそのときに始まった。また、東北地域の各省教育委員会(現在の教育庁)の傘下で日本語教育の研究および現職教師の研修を担当していた各省の教育学院^{※8}の日本語担当教員^{※9}とも初めて面会した。日本語教育関係者は日本側の支援を強く望む一方、日本から調査団が何度もやってくるが、何ひとつ具体的な支援が得られないと不満を表明した。この時、中国側の熱意に応えるために、どんなに小規模なものでもいいから何らかの支援策を講じなければならないと強く決意したのだった。

1995年10月、上海外国語学校で第4回大会を開催し、閉会後関係者が一堂に集まった席で、TJFとしては弁論大会と教師研修を同時に開催するのは難しい旨を説明し、中国側の意向をたずねた。また、教師研修を実施するのであれば、外国語学校だけでなく、東北地域の中高校の教師も対象にすることを提案した。会議の結果、弁論大会を発展的に解消することが決まった。一方、引き続き中高校生の日本語学習を奨励する手立てとして、日本の民間団体である世田谷クラブが主催していた世界の高校生を対象とする東京での日本語弁論大会への参加枠を、中国の外国語学校の高校生に広げてもらうよう働きかけ、両者の橋渡しをした。また、外国語学校日本語教師の、国際交流基金主催の成績優秀者招聘プログラムへの応募にも側面から協力した。

(4) 第1回中高校日本語教師研修会開催の準備

第1回中高校日本語教師研修会(1996年)は、第1回全中国外国語学校中高校生日本語弁論大会の開催地、長春で開くことになった。全国の外国語学校の中心校であり、東北地域における日本語教育の拠点の一つである長春外国語学校は研修会場として最適だった。各省の教育学院との関係がまだ脆弱だった時期だけに、第1回弁論大会以来の劉元松校長との人間的つながりは大変心強いものだった。

第1回研修会を開催するにあたっては、カリキュラムや教材の作成、クラスの設定、講師の編成と依頼、事務局の立ち上げなど多くの準備が必要だった。また、外国語学校と中高校から参加する教師の割合をどうするのか、研修生をどう選抜するのかなど、解決しなければならない問題が山積していた。しかし、かつての弁論大会で、われわれに感動を与えてくれた、中国の中高校生が日本語を学ぶひたむきな姿を思い浮かべながら、彼らの教育にあたる教師のために研修会を開きたいという思いで一つひとつハードルを越えていった。

大型のプロジェクトであるだけに、資金と資材の調達は大きな課題だった。後述するように中国の高校教科書編集プロジェクトを共同で支援してきた国際交流基金に協力を要請し、助成金を受けることができた。また、理事長が中国大連で幼少期を過ごしたこともあって、中国の日本語教育に関心を持ち支援の手を差し伸べていた三菱銀行国際財団のことを知り、協力を要請、同財団からも助成金を受けることができた。同財団には、今日にいたるまで、TJFの対中国日本語教育事業を助成していただいている。国際交流

※10：日本の指導要領にあたるもの（18頁コラム参照）。

※11：受験に偏った教育ではなく、創造性の育成を重視し、徳・知・体のすべてにわたって資質を伸ばすための教育。

※12：高校『日語』は、本文、会話文、解説、練習問題、コラムによって構成され、従来の文法中心を改め、コミュニケーション能力の養成や異文化理解を深めていくことに重点を置いている。日本や中国に関する題材だけでなく、普遍的なテーマも取り上げることによって、生徒が本文の読解を通じて読解力や理解力を養うとともに、グローバルな視野を養い、国際性、平和共存、異文化理解、道徳、環境問題、人類共通の課題にも目を向けるよう配慮している。また、文化コラムでは、日本の伝統文化だけでなく、日本の高校生の生活も紹介している。TJFは、このコラム作成に対し素材提供や内容の面で協力した。

※13：日中共同教科書編集制作プロジェクトチームは、高校向け教科書が15名、中学向け教科書が17名で構成された。

基金および同財団の助成なくしては7回にわたる研修会は実現しなかった。

また、教材については各出版社をまわり、寄贈もしくは割引価格での提供をお願いした。全日空には1トンに上る教材の無償空輸をお願いし快諾を得た。外務省にも在中国日本公館の後援をお願いした。こうして官民を問わず多くの関係者の協力を得て初めて研修会開催の目処がたっていった。各機関には、その後7年にわたってご協力いただいた。

(5) 中高校向け日本語教科書の編纂への協力

1990年代に入ると、中国の日本語教育も転換期を迎えた。1996年、国家教育委員会（現在の国家教育部）の指導で、中高校の日本語教育に関する『全日制普通高級中学日語教学大綱』（以下、「教学大綱」）※10が改訂された。この改訂では、対外交流を促進するための道具としての外国語の重要性を強調するとともに、「素質教育」※11についても触れられた。また、言語と文化の関係についても新たに言及し、自他の言語や文化を尊重し、その異同を理解することを日本語教育の目標の一つとした。新たな教育理念の浸透を図るために教師研修の必要性が高まっていた時期であった。

一方、「教学大綱」の改訂に伴い、国家教育委員会の直属機関である課程教材研究所は新しい日本語の教科書、全日制普通高級中学『日語』（以下、高校『日語』※12）の編纂に着手した。1996年、国際交流基金とTJFは、同研究所からの強い要請を受けて、高校『日語』の日中共同編集制作プロジェクト※13に参画した。国際交流基金は助成・協力を行い、TJFは日本側事務局として日中の編集会議の橋渡しや写真等の著作権交渉を担当するなどの協力を行った。1996～1998年は高校向け3冊、2001～2003年は中学向けの義務教育課程標準実験教科書『日語』（以下、中学『日語』）6冊の制作が行われ、2004年度までに人民教育出版社より刊行された。

こうして、TJFは教科書の編集協力と教師研修会の開催を、中国の中等教育における日本語教育支援事業の両輪として行うことになったのである。

編集制作プロジェクトチーム 所属は教科書完成時（高校向け：1998年、中学向け：2003年）のもの。

●高校向け●

【中国側編集委員会】

委員長：魏国棟（課程教材研究所）
委員：唐磊、張国強、張敏（課程教材研究所）、趙華敏（北京大学）、翟東娜（北京師範大学）、林洪（北京師範大学）
事務局：課程教材研究所

【日本側編集委員会】

委員長：水谷修（元国立国語研究所）
委員：加納陸人（文教大学）、藤井真三（日中学院）、青木惣一（アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター）、横山朝子（日中学院）
監修：佐治圭三（京都外国語大学）、玉村文郎（同志社大学）、山田泉（大阪大学留学生センター）
事務局：TJF

●中学向け●

【中国側編集委員会】

委員：唐磊、張国強、張敏、劉粉麗、李家祥（課程教材研究所）、趙華敏（北京大学助）、彭廣陸（北京大学）、朱京偉、続三義（北京外国語大学）、何琳（首都師範大学）
監修：顧海根（北京大学）、嚴安生（元北京外国語大学日本研究センター）
事務局：課程教材研究所

【日本側編集委員会】

編集：加納陸人（文教大学）、大船ちさと（国際学友会日本語学校）、鈴木今日子（東京城北日本語学院）、松本朝子（日中学院）
監修：水谷修（元国立国語研究所）
事務局：TJF

中日友好協力の結晶

中国教育学会外語教学專業委員会
事務局長・日語部部长 張国強

●国際文化フォーラムとの出会い

1995年4月、国際文化フォーラムの牛島通彦氏(当時事務局長)と中野佳代子氏(当時事務局次長)が北京の劉道義氏(当時教育学会外語教学研究會理事)と私のもとを訪れた。牛島氏は、国際文化フォーラムは設立以来、中国の日本語教育を支援してきたが、次世代を担う中高校生のために中高校の日本語教師の研修が非常に重要であると考えており、そのために中高校の日本語教師研修會を中国の機関と共催したい意向をもっていると言われた。

私たちの学会もかねてより日本語教師に対する研修が必要だと考えていた。学会で、中高校日本語教師の置かれている状況(教師数・学歴・日本語教育歴・4技能および教授法のレベル・困っていること・現場の教師の希望など)を調べてきた結果、次のようなことが判明していたからである。

- (1) 日本語教師の中には中等教育程度の学歴しかない者、教師になってから一度も研修を受けたことのない者がかなりいる。彼らは日本語レベルを向上させることが難しく、特に聴解力において下降傾向がみられる。
- (2) 大学卒業の学歴はあるものの、大学で日本語を専門に学んだのではなく、第二外国語として学んだことしかない日本語教師がいる。これは、その教師が学校に配属された際、本人の専門教科の教員数が定員に達していたため、日本語を教えざるを得なかったという事情によるものである。
- (3) ほとんどの日本語教師は日本語教育の新しい動向を理解しておらず、所属地域内においてすら教師間の交流がなく情報も不足している。

(4) 経済状況が相対的に厳しい地域では、大学入試に失敗した者が、中高校での日本語の成績が良かったという理由だけで、学校に留まり教員を務めている場合がある。

(5) 「聞く」「話す」「読む」「書く」という四つの能力でバランスがとれていない日本語教師が多い。

しかし、教師研修に協力してくれる民間団体もみつからず、資金の工面もできずにいた。また、各省の日本語教師を養成・研修する機関である教育学院も資金不足のため、「小語種」*1である日本語の教師研修に積極的に力を入れることはできない状況だった。

●教師研修會開催を決定

国際文化フォーラムの申し入れに対し、学会では早速、研修會共催について検討した。私たちは、日本語教師研修會を日本の民間団体と協力して実施することは、国家教育部(当時教育委員會)が学会に望んでいる活動であり、中国の日本語教育の発展に有益だと考えた。また、中国側の諸事情について十分な理解を示してくれたことから、国際文化フォーラムと協力して中高校日本語教師研修會を開催することを決定し、劉氏と私の所属機関である人民教育出版社*2からも、この研修會を共催することについて同意を得た。そして、正確な歴史認識と現体制への理解を確認した上で、研修會の講義では「教学大綱」に従い、教科書と関連したものを扱うこと、中国の日本語教育事情に通じている人を講師として選ぶこと、研修會の運営にあたって中日両事務局が協力するとともに、講師と研修生はお互いに尊重しあうことなどを確認しあった。



張国強(ちょう・こっきょう)

課程教材研究所において、中学用と高校用の日本語教科書、『中日交流標準日本語』の編集に関わる。また、学会の立場から、中国の中高校日本語教育現場の調査と指導を行うかたわら、中国中高校日本語教師研修会の日中共催に尽力した。中国の中高校日本語教師向け情報誌『ひだまり』(TJF 発行)のコーナー「豆知識」を創刊号から執筆。

●研修会の成果

本研修会で日本での短期研修と同じような成果を得たというのが研修生の一致した見解である。研修生が共通して挙げる成果は次のとおりである。

1. 日本語レベルが各技能において向上した。
2. 日本語教育に関する理念が変わった。教授法を学び、教授法のレベルに大きな進歩があった。学校に戻ってすぐに現場に生かすことができた。
3. 仕事に対して熱心に取り組む姿勢を日本人講師から学んだ。
4. 各地の日本語教育の情報を得ることができ、視野が広がった。
5. 言語教育と文化理解の関係について学んだ。
6. 中日双方の教師が中日友好のために努力した。中国の日本語教師がその地域で働く日本人と頻繁に連絡を取ったり、大学の日本語教師と交流したりする機会を得た。また、日本の高校で中国語を教えている日本人教師と友好を深め、友好クラス交流を始めた。
7. 各教育学院の研修設備も改善された。一部の省、市の日本語教員は日本での2ヵ月から半年にわたる短期研修に参加する機会を得ることができた。

●感謝の言葉に代えて

今日は多言語多文化の時代であり、情報化の時代でもある。新しい世紀を担う若い人々が互いの言語を学びながら、その言語の背景にある文化、とりわけその言語を話す人々の生き方や考え方、生活についての理解を深めることは、極めて重要なこと

である。そのためにも、生徒の日本語のレベルを高めると同時に国際的視野を広げることが必要であり、そのような生徒を情熱をもって指導する教師を養成することは何よりも大事なことである。教師研修会を共に開催することができたことに心から感謝する。中国の中等教育における日本語教育の歴史にすばらしい一頁を残すことができるだろう。

また、7回にわたる研修会は、吉林省、黒龍江省、遼寧省、内蒙古自治区の各教育委員会あるいは教育庁、そして教育学院の全面的な協力を得て行われた。特に、教育学院には、研修施設の提供だけでなく、中日の講師陣と研修生の生活や活動についても配慮し、研修会を成功させるためにさまざまな努力をしていただいた。

各省、自治区の政府幹部も本研修会を高く評価しており、開講式に参加し、研修生に温かい励ましの言葉を贈ってくださった。

本稿を結ぶにあたり、私は外語教学專業委員会を代表し、国際文化フォーラムをはじめ中国中高校日本語教師研修会開催に貢献し努力してくれた三菱銀行国際財団ならびに国際交流基金、日本側の講師、企業、友好団体などに対して、心から感謝の意を表したい。それとともに、今後中日双方が協力関係を維持しながら、中国中等教育における日本語教育発展のためにさらに努力していくことを強く祈念する。

*

※1: 履修者の多い英語を「大語種」と呼ぶのに対し、履修者が相対的に少ない日本語やロシア語を「小語種」と呼ぶ。

※2: 国家教育部直属の出版社。小中高校で使う各教科教科書の研究・開発・編集・発行を行っている。

(TJFで翻訳、編集しました)

「教学大綱」から「課程標準」へ ――中国の教育改革と日本語教育の変化――

2000年代に入って、中国の日本語教育は、国家教育部が1990年代を通じて推進してきた教育改革の流れの中で大きく転換しようとしている。日本語教育の指針である「日語教学大綱」の改訂の経緯を追うことで、どのような転換が図られているのかを見る。

■ 1980年代・90年代の「教学大綱」

1982年に日本語科目が中等教育のカリキュラムに正式に組み込まれ、1986年、1988年、1990年にそれぞれ「教学大綱」が改訂された。この間、外国語教育の目標は、「先進諸国の優れた科学技術の知識を獲得し、国家建設に役立つ人材の育成」にあるとされてきた。1992年に改訂された「教学大綱」で初めて、外国語は他国から学ぶための道具であることに加え、「世界各国と交流するための道具」として位置づけられた。1996年の「教学大綱」では、さらに「言語運用能力を伸ばすこと」が日本語教育の目標として強調され、その目標を達成するために、「文化」を扱う必要性が次のとおり打ち出された。

「言語と文化は密接に関係しており、文化に関する知識を得ることは、言語の運用能力を高めるのに役立つ。日本語教育において、生徒に日本の社会や文化と日本人の生活習慣について適度に理解させることは、生徒の日本語学習の助けになるだけでなく、生徒の視野を広げ、自民族の文化に対する理解を深めることにもつながる」

■ 2000年の「教学大綱」

2000年の「教学大綱」は、その前文で外国語教育の目的は「他国の言語を学び、他国の文化に対する認識と理解を深めることで、他国の言語と文化を尊重し、自国の文化をよりよく認識し、自民族の言語と文化を愛することを学び、生徒の人格と資質を伸ばす」ことにあると述べている。

中等教育における日本語教育の目標は、言語知識(1980年代)から言語運用能力(1990年代)を経て、「異文化理解」へとその力点を移してきたといえるだろう。これは、「応試教育」から「素質教育」へ転換しようとしている中国の教育改革の動きを反映している。「応試教育」は受験勉強に代表される知識偏重教育を意味し、「素質教育」は知識偏重を脱して、資質や能力と人間性を伸ばすことを重視する教育を意味する。

■ 2001年の「課程標準」

2001年には、それまでの「教学大綱」に代わる「全日制義務教育日語課程標準」(実験稿)(以下、「課程標準」)が制定された。「課程標準」では、改革の目標を次のように定めている。

「……ゆったり、生き生きとした、実際に近い言語学習環境を整え、テーマ中心のコミュニケーション課題を遂行する活動を展開することにより、初歩的な日本語の知識

と技能を獲得させるばかりでなく、自主的に学ぶ能力を伸ばし、資質を向上させ、総合的言語運用能力を形成させる」

そして、日本語教育の目標として、「総合的言語運用能力」を伸ばすことを中心に据え、それを達成する要素として「言語知識」「言語技能」「文化素養」「情感態度」「学習ストラテジー」の5項目を掲げている。大きく転換した日本語教育が新たにめざしているのは、生徒と教師間、生徒同士の共同作業を通じて生徒に日本語の知識と技能を身につけさせることであり、日本語によるコミュニケーションを学ぶことを通じて、生徒の意志力・思考力・情操・視野・生活体験・個性を伸ばす「素質教育」である。

● 教師の役割が重要

したがって、教師が一方向的に知識を注入するのではなく、生徒自身による学びのプロセスを重視した自立的な学習方法の獲得が重んじられ、資質や能力そして人間性育成のための「文化素養」「情感態度」が重要なカギを握っている。「情感態度」では、「祖国意識」として「日本語学習を通して、祖国の言語や文化に対する理解を深め、自民族の誇りを高める」こと、「国際的視野」として「日本語学習を通して、視野を広げ、他人の気持ちに関心をもって理解に努め、異文化間理解の意識と国際感覚を育成する」ことをめざしており、「異文化理解」が重要なキーワードとなっている。

また、「課程標準」では、「文化素養の教育は、文化の背景知識、言語行動の特徴、非言語行動の特徴という三つの側面を持っている」とした上で、その「三つの側面」に関連して、「多くのチャンネルを通して背景知識を獲得できるように導く」教師の積極的な指導を求めると同時に、教師たちの言語や文化に対する態度が生徒に多大な影響を与えたとし、特に生徒の「情感態度」を伸ばす教師の役割を重視している。

1982	「中学日語教学綱要」制定
1986	「全日制中学日語教学大綱」制定
1988	「九年制義務教育全日制初級中学日語教学大綱」(初審稿)制定
1990	「全日制中学日語教学大綱」(修訂本)制定
1992	「九年制義務教育全日制初級中学日語教学大綱」(試用)制定
1996	「全日制普通高級中学日語教学大綱」(供試験用)制定
2000	「全日制普通高級中学日語教学大綱」(試用修訂版)制定
2001	「全日制義務教育日語課程標準」(実験稿)制定
2003	「普通高中日語課程標準」(実験稿)制定

異文化間教育学会(2002年6月)における長江春子の発表原稿を編集した。

2. 中国中高校日本語教師研修会概要

(1) 実施目的

中国側との協議の結果、研修会の目的の大きな柱を研修生の「日本語力向上」「教授力の向上」「ネットワークの構築・情報交流」「相互理解」とし、以下の趣旨で実施することになった。

- ① 中高校日本語教師の日本語力および教授法の向上を図るとともに、各地域のマスターティーチャーを養成し、研修会で習得した知識・技術を広く普及させる。
- ② 教師一人ひとりの課題を明確にし、その課題を改善する方法、情報、資料、ネットワークを提供する。
- ③ 参加教師間、教師と講師間および関係者間の情報交換、交流を促進し、ネットワークを構築する。
- ④ 中国の中等教育における日本語教育の現場に対する理解を深め、今後の「教学大綱」、教科書の編集作業と連携させる。
- ⑤ 中国の中等教育における日本語教育全体のレベルアップをめざすとともに、日中間の相互理解の増進に寄与する。

これらの目標を掲げた背景には、研修会を単に、主催者側から参加教師に対して一方的に知識や情報を提供する場にするのではなく、研修会関係者すべてが交流し学び合う場にしたい、という主催者側の強い思いがあった。これら①～⑤の基本方針は、第7回(2002年)研修会まで受け継がれた。

(2) 参加対象

第1回(1996年)は、中高校生弁論大会の参加校だった外国語学校の教師を主な対象とし、加えて東北地域の中高校の教師もその対象とした。

しかし、実際に研修会を開いてみると、外国語学校と中高校とのレベル差は予想以上に大きかった。外国語学校は、都会にあるため、日本語に関する資料なども手に入れやすく、また国立であることから財政的にも恵まれていた。一方、東北地域の中高校は、都会から離れた地域にある学校が多く、資料もなければ、日本人と交流する機会もほとんどなく、また財政的にも恵まれていなかった。すでに高いレベルの日本語力がある外



徐々に「学生」に戻った研修生は真剣そのもの(第6回研修会、遼寧)



真夏の合宿生活。学ぶ楽しさと辛さをかみしめて(第4回研修会、遼寧)



開講式で、国際交流基金から図書寄贈が行われる(第6回研修会、遼寧)

日本語の差は歴然

第1回研修会では主催者側の経験が足りなかったことに加え、研修生は中高校、外国語学校から参加しており、またレベルも異なっていて、研修会に期待する内容も同じではなかった。研修会期間中は、日本語力の低い研修生は大変辛い思いをしたが、逆に高い研修生は充足感を味わうことができなかった。

結局、進度の速いクラスと遅いクラスを設置することでこの問題を解決したのだが、教員は日本語力の低い研修生を気遣い、すべての研修課題を遂行できるよう彼らを励まさなければならなかった。

曾麗雲(遼寧省基礎教育研究教師研修センター日本語教員)



発音教材を手に熱心に練習（第6回研修会、黒龍江）



日本語の授業にジェスチャーを取り入れて（第1回研修会）

国語学校の教師は、日本語力向上の研修よりも教授法の研修が必要であり、また日本での研修のほうがよりニーズに合い、効果的だと考えた。

そこで、東北地域の中高校における日本語教育の状況と教師についての詳細な調査を再度行い、調査の結果にもとづいて、2回目以降は、東北地域の中高校の教師のみを研修会の対象とすることにした。また、外国語学校の教師については、日本国内で研修が受けられるように国際交流基金に働きかけた。その結果、外国語学校の教師は、1997年度から、国際交流基金による日本での研修プログラムへの参加が認められた。

(3) 参加条件と研修生選定

まず「日本語教育の歴史があり、将来的に継続して日本語教育を実施する見込みのある学校で、安定した学習者数と教師が確保できる学校」、すなわち各地域の拠点校に勤務していることを研修会への参加条件とした。

というのも、この時期の日本語教育は、すでに英語教育におされ、科目の開設が不安定になりつつある状況だったからである。教師研修の成果を確実なものにするためには、上述のような拠点校という条件を設けることが必要だった。拠点校の選定は、各省・市・自治区の教育学院の日本語教研員が中心に行った。

さらに、拠点校に勤務していることのほかに、日本語教師歴も参加条件の一つとした。これには中堅以上の講師に優先的に研修の機会を与えるねらいがあった。第1回(1996年)と第2回(1997年)の研修会は、日本語教師歴が10年以上の教師、第3回(1998年)から第5回(2000年)は日本語教師歴が5年以上あるいはそれに相当する実力のある教師、第6回(2001年)と第7回(2002年)は日本語教師歴が3年以上あるいはそれに相当する実力のある教師、とした。当初、日本語教師歴が長いことを条件としたのは、「マスターティーチャーを育てる」という構想があったから

運営上の苦労と喜び

教研員として、研修生の選抜のほか、研修会の運営・実施、研修期間中の研修生の面倒を見るなど、多くの苦労と喜びがあった。

まず難しかったのは、研修生の推薦と選定である。その難しさは予想もできないことであった。当教育学院と学校とは、業務上の関係であって、管理・指導したりされたりする行政上の関係ではない。したがって研修生の選定については、各学校の校長に委託し、責任をもってもらうしかなかった。そのため、私たちは、推薦、選定されてきた研修生に対して弱い拘束力しかもつことがなかった。加えて、ちょうど夏休み中でもあり、旅行等を計画する学校も多く、学歴を取得するための研修にしか興味をもたない教師も少なからずいた。そのため、決められた集合時に一部の教師が無断で欠席し、研修会の業務に支障をきたすこともあった。このことは非常に頭を悩

ませることであった。

次に、研修会実施の過程において、私は時々「日本語教育は私一人の仕事なのか」と思ったことがある。もちろんこれは正しい考えではない。しかし、私は常に教育学院と日本側関係者の間に挟まれ、どちらも満足させなければならず、時々本当に無力感を覚えることがあった。その苦しさは他の人にはなかなか理解できないであろう。

最後に、研修会はすべて夏休み中に行われ、私は6回参加した。つまり私は6年続けて夏休みをとることができなかったことになる。正直、辛いと思ったこともある。でも、研修会の成功を見る度にいつもある種の喜びを感じることができた。

尹勝傑(吉林省教育学院日本語教研員)



自分よりも長い教師歴の研修生を相手に気合十分の若手講師（第5回研修会、吉林）



前に出て課題に取り組む研修生（第7回研修会）



課外の時間に手話付きの歌「切手のないおくりもの」を習う研修生（第7回研修会）

である。ただし、この構想は成功したとはいえない。第Ⅱ章のアンケートからも分かるように、日本語教師歴が長いことと、新しい教授法を受け入れることとは必ずしも一致しなかったからである。しかし、結果として、必要教師歴を徐々に短くしたことで、中堅教師から若手教師へと裾野を広げていくことができた。もっとも、新しい教授法や言語運用を不得手とするベテラン教師に少しでも自信を持ってもらうことは、別な意味で有意義なことだった。

研修生の選定

上記の条件を踏まえて、研修生の選定は、拠点校の選定同様、各教育学院の日本語教員が中心になって行った。まず、日本語教員が拠点校の校長に参加資格のある教師の推薦を依頼し、提出された推薦書つまり参加申請書（128、129頁参照）を取りまとめ、主任講師を含む日中関係者が参加条件を満たしていると判断した申請者に対しては、参加決定通知を出すという方法をとった。

しかしながら、研修会を行ってみると、どの研修生も校長の推薦を受けていたにもかかわらず、日本語力、特に聴解力・会話力にかなりの差があった。全講義を日本語で行ったため、講義を受けることにも支障のケースがままあった。また、何らかの事情による突然の不参加や中退も回ごとそして会場ごとに数名ずつあった。それらを防ぐために、「日本人講師の日本語による講義を理解する聴解力をもつ教師」「研修会の全日程にわたって参加できる教師」も途中から参加条件に加えた。それでも、上記の問題を完全に解決できず、毎回その対応に追われた。

(4) 開催時期と開催期間

研修会への参加によって学校の授業に影響が出ないようにするために

日中のやり方の違い

研修会の準備段階ではやり方や考え方の違いから、摩擦がいろいろと起きた。日本側は事の大小に関係なく計画や準備作業を早めに進めるが、中国側は1ヵ月あるいは2週間前から集中して作業を進めるというやり方だった。中国側は、事前に決めたことは安易に変更できない、早めに作業すればそれだけ変更の可能性が高くなると考えるからだ。担当者は、一方で日本側の要求に沿って作業し、一方で変更後の状況に対処しなければならず、やるべき仕事が多くなった。

また、日本側は経費予算をきめ細かく算出したが、私たち教員からすれば、運用するときは他人にわからない苦労があった。中国では世間的に日本語科は重視されておらず、経済的利益が望める科目でもないの、研修活動を行うと費用はかかるばかりで収益を得たためしなかった。しかし、日本語教員として、当然やるべき

ことだと考えていた。それでも、毎回の研修会は日本語教員一人でやりおせるものではなく、関係者の努力と協力を必要とした。現在の経済至上の時代においては、いかなる行為に対しても必ず報酬が伴うものである。しかし、日本側から提供された開催資金では、このようなニーズに応えられないこともあった。一度の依頼だけなら日頃の関係から協力を得られるが、二度、三度と重なると申し訳がたなくなる。これは私たちにとって最も苦しいことであった。さらに、利益がないばかりでなく、自ら支出しなければならないことも多かった。例えば、昼間教師に電話をかけても授業中で連絡がとれず、自宅の電話を使って連絡するしかなかった。自宅の電話に対する補助はなく当然費用も自己負担となった。

曾麗雲（遼寧基礎教育研究教師研修センター日本語教員）

は、学校の長期休暇に合わせて開催時期を設定する必要があった。しかし、中国の東北地域の冬は氷点下二桁の極寒となることが知られている。また、中国の冬休みはもっとも大事な年中行事である春節を挟むため、日本の師走以上に落ち着かない。さらに、日本の冬休みとも春休みとも時期がずれているため、日本から講師を派遣しにくい。そこで、日本と中国の長期休暇が重なる夏休みに合わせて開催することにした。

開催期間については、講師と研修生の心身の負担、開催費用などを総合的に検討した結果、会期を2週間とした。開催時期は回によって若干前後したが、大体7月末から8月中旬までの間に実施した。

(5) 運営体制と役割分担

日本側の事務局はTJFが、中国側の事務局は第1回を長春外国語学校が、第2回以降は各地域の教育学院が担当し、研修会の運営にあたった。中国側は、各省レベルの教育学院だけでなく、大連市や延辺朝鮮族自治州など日本語教育が盛んな地域レベルの教育学院も会場運営を担当した。

TJFの役割は、中国側との協議にもとづく実施計画の策定、開催資金の調達（講師派遣費用の一部を国際交流基金、現地運営費の大部分を三菱銀行国際財団が助成）、講師の依頼や派遣に関わる諸業務（主任・副主任などを日本から派遣し、その他の講師は青年海外協力隊員および中国在住の日本人教師などに依頼）、カリキュラム案の作成、教材の作成と運搬、実施報告書の作成などであった。

教育学院側は、各管轄地域内の日本語教師の指導に当たる日本語教員が、前述の参加条件に沿って研修生を各学校に推薦してもらい、運営実務を執り行った。また、TJFは担当スタッフを会場に派遣して、これに協力した。

当初は、TJFが主体となって運営にあたらざるを得なかった。しかし、研修会の現地化をめざしているからには、中国側を信頼して、「中国的感覚」に歩み寄ることが求められた。一方、回を重ねるうちに、中国側も運営経験を蓄積し、「日本的感覚」に歩み寄ったこともあり、運営上、現地の日本語教員の主体性が強まり、最終的には、TJFスタッフが運営協力者に徹するという理想的な運営体制となった。



吉林省教育テレビの取材をうける研修生（第5回研修会、吉林）

(6) 三省合同開催からスタート

第1回（1996年）から第3回（1998年）までは三省合同で実施した。開催地は、第1回は吉林省、第2回は遼寧省、第3回は黒龍江省であった。毎年、開催地を変えたのは、研修会開催を機に各省政府や教育行政者、マスコミに働きかけ、初中等教育における日本語教育に対する関心を高めるといふねらいがあつたことだった。

合同開催にしたのは、吉林省、黒龍江省、遼寧省の三省間でのネットワークづくりを図り、共同作業を通じて連帯感を育むといふねらいがあつたからである。また、日本側としては、一カ所で行うほうが状況を把握しや



日中交流会。初めて日本人に会う研修生も多かった（第1回研修会）

すく、講師にかかる費用を抑えられるというメリットがあった。しかし、中国の教育学院側からすれば、他省の日本語教研員と連携したり、会期中、客でもある他省の教師に満足いくサービスを提供したりするのは大変であったし、関与の仕方も難しかったようである。

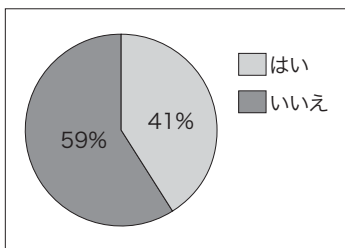
しかしながら、会期中、講義を聴講した各省の教研員たちが研修生の意見や要望を吸い上げ、講師やTJFスタッフにフィードバックしてくれたことが、カリキュラムや講義内容の改善と充実につながっていった。このような関係を通じて、研修内容、研修技法、運営についてのノウハウや経験を、教研員とTJFスタッフとで共有することができ、その結果、研修会の企画・運営の主導権を徐々に教育学院に移譲し、最終的には教研員を中心に各教育学院で研修会を企画・運営できるような体制、いわば「研修会の現地化」の布石となっていった。

(7) 三省個別開催へ

研修会を3回実施したところで、教師研修の必要性はますます明確になった。研修会に参加するまで日本人と会ったことも、話したこともない教師が多く(表参照)、大学で日本語を専攻した人も少数で、全体的に「聞く・話す」能力が不足していることが判明した。また、授業は、読み書き、文法中心の翻訳法で行っているのが当時の状況であった。

しかし、一回ごとの参加者が45名(実際には第1回は教師43名+教研員4名=47名、第2回は教師42名+教研員6名=48名、第3回は教師44名+教研員6名=50名)というペースでは、この地域内に1000人以上いる日本語教師全員に研修の機会を与えるには、20年以上、半数でも10年以上かかってしまう計算になる。したがって、一回の参加人数を増やす必要があった。しかし、合同開催では、会場の許容量を超える、移動費などの諸経費が高む、運営事務が煩雑になるなどの問題があった。また、日

表：「研修会に参加して初めて、日本人と話したり、教わったりしましたか」(アンケートQ1より。アンケート概要は第II章参照)



接待はつきもの

研修会を準備する過程で、いろいろな問題にぶつかった。例えば、ハルビン市内にある別機関から会場を借りる話がまとまり、そのことを日本側に報告した。日本側の担当者はわざわざ会場の下見に来て気に入ってくれたので、そこを会場にすることが決まった。ところが、その機関の別の責任者がほかの会議に会場を貸してしまった。研修会の開催期日が迫っており、新しい会場を探してもとても間に合わない。しかも夏休み中で上司と連絡が取れず、担当者としては夜も眠れないほど焦った。その後先方と困難な交渉を重ねた結果、何とか最低限の開催条件を確保することができた。

また、中国でこのような研修会を開くのは、多くの機関や関係者との調整を行わなければならない。当然上層部の接待は避けられないことである。頻繁な設宴にかかる費用は驚くほどの額に上る。しかし、日本側から提供

された運営費にこの費目を含めることができない。この穴はどこも埋めてはくれず、最後は私の所属部署がかぶるしかない。私の部署は関われば関わるほど「損」をする図式となる。

これは私個人にもいえることだった。省内の日本語教師が一堂に会するのは、大変うれしいことである。ホストとして積極的に教師たちにご馳走したり、遊びに連れ出したりすることもしばしばあった。その費用は運営費で賄っているのだろうと教師たちは思っている。しかし、実際は私たちホスト役の個人負担である。もちろん、このような出費は自発的なもので、出した金額に見合うだけの価値はあると思っていたが、なかなか頭の痛い問題だった。

張石煥(黒龍江省教育学院日本語教研員)

1. 7回の研修会をたどる

※1：吉林省と黒龍江省では朝鮮族が多く、特に黒龍江省の研修会参加者は1999年からそのほとんどが朝鮮族であった。吉林省でも朝鮮族が過半数を占めている。一方、遼寧省では、朝鮮族よりも若干漢族のほうが多く、蒙古族も少数ながらいるし、内蒙古自治区では、半数が蒙古族であった。民族構成の違いによって、使用する教科書も異なる。また、母語がその日本語教師の日本語力のレベルに影響を与えているケースが多い。



閉講式で研修会実行委員会の印章が、第2回研修会の運営担当者から第3回研修会担当者へ引き継がれた(第2回研修会)

本語教育の実施校の数や日本語教師の人数が省によって異なり、その民族構成※1も一様ではないため、三省の間で参加者枠の取り合いが起こったり、研修内容に対するニーズ、研修会運営に対する考え方や体制も多少異なったりしていた。

個別開催で参加人数が倍増

そこで、日中の主催者間で話し合った結果、第4回(1999年)からは各省で別々に開催することにした。省ごとに一回の参加人数を30名(第4回研修会には、遼寧省30名、吉林省30名、黒龍江省31名〔うち内蒙古自治区2名〕が参加)とすることにした。その結果、全体的に参加人数を倍増させることができた。また、一つの会場の参加者数が45名から30名に減ったこと、参加者全員が省内の教師となったことで、規模と構成の両面で運営しやすくなった。さらには、教研員をはじめとする各教育学院の主体性が発揮され、研修会の現地化の基盤固めがいつそう進んだ。この省別研修会は第4回(1999年)から第6回(2001年)まで3回行った。第5回(2000年)の研修会には、遼寧省で33名(うち内蒙古自治区2名)、吉林省で32名(うち内蒙古自治区3名)、黒龍江省で31名が参加した。第6回(2001年)の研修会には、遼寧省で30名、吉林省で31名、黒龍江省で32名の教師が参加した。

一方で一回ごとの参加人数の倍増と会場の3倍増による開催経費の増加を抑える必要があった。これは、大掛かりな宣伝活動を控え、研修生の交通、宿泊、食事の条件をできるだけ現地の状況に合わせ、格式よりも研修内容の質を重視することで、中国側主催者の了承を得た。これにより、研修会の規模拡大は実現したが、運営実務を担当した教研員は、少ない運営資金をやりくりしなければならなかった。本プロジェクトの成功は、教研員のそうした懸命な努力に負うところが大きかったのである。

(8) 内蒙古自治区に会場新設

内蒙古自治区の中高校における日本語学習者数と教師数は、東北三省に次いで多い。しかし、中国の自治区レベルでは日本語教研員は配置さ

共に働き、学び合う

1999年冬、国際文化フォーラムのスタッフが初めて内蒙古自治区を訪れ、通遼市、赤峰市の学校現場の調査にあたった。極寒の中、苦勞を厭わない姿に深く感動を覚えた。その後、高崎孝事務局長(当時)とともに再度教育庁を訪れ、2000年に内蒙古で中高校日本語教師研修会を開催することについて協議した。それ以来、国際文化フォーラムが行ってきた支援に対して、私たちは、今もそして将来も忘れることなく、感謝の念を持ち続けることだろう。内蒙古の日本語教育が今日まで一定の規模を保ちながら、質的にも時代とともに進歩を遂げられたの

は、国際文化フォーラムをはじめ日本側の関係機関による支援なしには考えられない。

国際文化フォーラムのスタッフとともに働き、付き合うなかで、隔たりや違いを感じたことはない。それどころか、緻密に計画し、その計画をきちんと実行し、実施後はきちんと反省や総括を行うというスタッフの仕事振りに学ぶことが多かった。還暦を過ぎた身であっても、吸収すべきものが多く大変参考になるものだった。

陳弘法(元内蒙古自治区教育庁外国語教研員)



真冬の校庭は格好のスケート場
(1999年事前調査、内蒙古)



大人数の生徒が日本語の授業を受ける
(1999年事前調査、内蒙古)



内蒙古で初めて行われた研修会の
開講式

れていないため、内蒙古には日本語教員はいない。自治区教育厅に外国語教員はいるものの、専門はロシア語であることから、ほかの東北三省と同じように日本語教師研修会を独自に主催することや、合同開催の会場担当となることは難しかった。そのため、合同開催から省別開催に切り替えたあとは、三省それぞれの会場に数名ずつ参加させてもらうしかなかった。

しかし、同自治区内で教師研修を行ってほしいという要望が関係者から出されていたこともあり、内蒙古自治区における日本語教育の現状や教師研修のニーズと可能性を正確に把握するため、TJFは1999年末初めて現地にスタッフを派遣した。教育厅関係者をはじめ、日本語教育の二大拠点である赤峰市と通遼市の教育局関係者に面会するとともに、中高校数校の日本語の授業を見学し、教師や生徒と懇談したスタッフは教師と教育行政者の双方から、同自治区でも日本語教師研修会が開催できるように支援してほしい旨強く要望された。新たな開催経費を捻出することは困難であったため、自治区教育厅に経費の一部を特別に負担してもらう、初回の参加者を20名(実際の参加者は19名)とする、さらに、講師派遣の経費を抑えるために開催時期を三省の研修会終了後に設定し、三省の研修会の講師にそのまま内蒙古自治区会場も担当してもらうなどいろいろ工夫をこらして、2000年に初めて内蒙古自治区で研修会を開くことができた。長期にわたっての研修会参加で、講師陣の負担は大きかったに違いない。しかし、内蒙古自治区の日本語教育関係者の熱意が私たちを動かしたのである。開催費用は全額日本側が負担することになったものの、2001年も引き続き内蒙古自治区で研修会を開くことができた。

第1回(1996年)から第4回(1999年)までは毎年2名、第5回(2000年)は内蒙古会場の19名に加えほかの会場に5名、第6回(2001年)は27名が参加した。内蒙古自治区に会場を設けたことで、参加者数が大幅に増え、内蒙古自治区内の中高校日本語教師全員が研修を受けることができたのである。

日本語教育の原点を見た内蒙古会場

私は、第3回(1998年)から第7回(2002年)まで5回にわたって講師を務めた。地域でいえば、黒龍江省ハルビン市、吉林省延吉市、吉林省長春市、内蒙古自治区フフホト市の4ヵ所を経験した。どの年度、どの会場にも多くの思い出があるが、中でも強く印象に残っているのは、2000年に開催されたフフホトでの研修会だろうか。フフホトで研修会を開くのは初めてということで、日中双方に試行錯誤的などころがあった。他省と異なり、ノウハウをもたないという弱点があったのだ。しかし、楊曼元教育庁長、陳弘法教員をはじめとする中国側関係者の純粋なひたむきさは、運営上の不利な点を補って余りあるものがあつた。中国側関係者の心意気に感動した

スタッフは私だけではないだろう。また、会場運営の難しさのほかに、研修生の日本語レベルの差が大きいという問題もあつた。授業方法をいろいろと工夫するなどどこよりも気を遣つた。しかし、どの研修生も自分の日本語力を少しでも伸ばそうと必死だつた。

フフホトは、研修生の日本語レベル上の課題と、情熱や純粋さが混在、共存する地だといえるだろう。それだけに苦労も多いし、こちらの力量もひときわ要求されるわけだが、私はここに日本語教育の原点を見た思いがする。

泉文明(龍谷大学助教授)

(9) 最終回へ

研修会を重ねるうちに、日本語教研員を中心とする中国側主催者は運営経験を蓄積し、主体性が強まっていった。一方、日本側のサポート体制にも進展が見られた。



国際交流基金の寄贈教材「写真パネルバンク」に見入る研修生（第5回研修会、吉林）

国際交流基金の支援体制

国際交流基金は、第1回(1996年)から第3回(1998年)は「協力」、第4回(1999年)は「助成」、第5回(2000年)から第7回(2002年)は「共催」というように関与の度合いを強め、日本から派遣する講師に要する費用の大部分または全額を負担した。1999年には、国際交流基金北京事務所に日本語教育アドバイザーを派遣し、中高校の日本語教師支援に乗り出した。また、共催初年の研修会には、日本語課長が会場を視察し、それが中国への初の青年日本語教師(現在のジュニア専門家)派遣につながった。青年日本語教師は青年海外協力隊日本語教師隊員経験者の中から選ばれ、2001年には吉林省教育学院と黒龍江省教育学院に1名ずつ、2002年の夏には遼寧省教育学院に1名が派遣された。青年日本語教師は、通常業務の一環として中高校日本語教師研修会の講師を務め、それぞれの教育学院が日常的に主催する地域の研修会や勉強会などでも中心的な役割を果たした。

JICAの支援体制

また、中国に赴任中の青年海外協力隊日本語教師隊員数名に、毎回講師として参加してもらうことができたが、これは、青年海外協力隊の東京本部と中国事務所の協力によるところが大きかった。TJFは中国事務所に講師の派遣を依頼し、中国事務所は隊員の意思を確認したうえで、参加を承認するという段取りをとった。交通・宿泊・食事にかかる実費はTJFが負担したが、隊員は謝礼を受け取らないボランティアとしての参加であった。そして第7回研修会(2002年)には、5名の日本語教師隊員を公費で派遣した。

研修会への隊員の参加が強化されていったことに象徴されているように、この間、JICAは中国の中高校への日本語教師隊員の派遣人数を増やした。それを受けて、TJFは第4回(1999年)の研修会から、中国事務所のボランティア調整員または講師を務める日本語教師隊員に、研修生の所属校が日本語教師隊員の派遣を希望する場合、その申請方法について説明してもらうことにした。これがきっかけとなって中高校から隊員派遣の要請があり、派遣につながるケースが増えた。また、JICAは、一つの地域に複数の隊員を派遣する一方、隊員の活動範囲を配属機関に限定せず、その地域にまで広げた。これにより、青年海外協力隊員経験者である青年日本語教師と現役の日本語教師隊員が連携して、日本語教研員の活動に協力するようになった。例えば、吉林省教育学院では、青年日本語教師と日本語教研員が中心となり、日本語教師隊員と連携し、1～2日間のミニ研修会を開催したり、2001年から『吉林省中高校日本語教育通信』を発行し



チームティーチングをする青年日本語教師と青年海外協力隊員(第7回研修会)



最終回の研修会開講式



最終回研修会の閉講式で、三菱銀行国際財団に中国側主催者から感謝の旗が贈られた



研修修了証書を手にする研修生
(第4回研修会、遼寧)

たり、日本語に関する質問に答える日本語相談室を開設したり、日本語関連の書籍やテープ、ビデオ、教材などをそろえた日本語資料室を設け、貸し出しを行ったりするなどさまざまな活動を行っている。

教師研修の「現地化」

こうして、中高校の日本語教育への支援が政府レベルにおいて制度的に位置づけられるようになり、国際交流基金および JICA の関与は深まっていった。そして、日本語教研員、青年日本語教師、青年海外協力隊日本語教師隊員の連携によって、研修会実施当初から一貫して TJF がめざしてきた教師研修の「現地化」が可能になってきたのである。また、TJF が 1997 年より制作に着手した研修会用教材が、研修会ごとに研修生のフィードバックを受けて改訂を重ね、ついに 2002 年の夏、5 分冊からなる「漢語話者のためのわかりやすい日本語シリーズ」(36 頁参照)として完成したことも、教師研修の「現地化」の助けとなった。開催資金の問題は依然として残っていたが、これも青年日本語教師の活動資金である程度賄い、残りは、引き続き TJF からの助成金(実際には三菱銀行国際財団からの助成金を充当)で解決できそうであった。

こうした状況を踏まえて、TJF は、中高校日本語教師研修会が本来の目的をある程度達成したと判断し、関係者の合意を得て、第 7 回(2002 年)の研修会をもって本事業を終了させることにした。最終回の実施にあたっては、関係者が一堂に会して本事業を総括し、その後の協力体制について話し合えるように、再び合同開催の形をとった。ハルビンに会場を設け、黒龍江省教育学院が運営を引き受けてくれた。最終回には 79 名の教師が参加した。7 回の研修会で、延べ 550 名の教師が研修を受けたが、この数字は、研修会が対象とする中高校日本語教師総数の約半数をカバーしたことを意味している。

講師内訳

開催年	1996	1997	1998	1999			2000				2001				2002	延べ数 (名)
開催形式	合同	合同	合同	吉林	黒龍江	遼寧	内モンゴ	吉林	黒龍江	遼寧	内モンゴ	吉林	黒龍江	遼寧	合同	
研修生数	47	48	50	30	31	30	19	32	31	33	27	31	32	30	79	550
講師数 ()内は、通常講義の担当講師数	13 (7)	16 (11)	19 (11)	9 (6)	9 (6)	9 (6)	5 (4)	9 (5)	7 (5)	8 (6)	7 (6)	10 (7)	9 (7)	10 (7)	19 (17)	159 (111)
①日本派遣講師	2	3	10	1	1	1	3	2	3	2	2	2	4	5	7	48
②中国在住日本人講師	4	5	3	3	2	3	1	4	2	4	3	5	2	1	1	43
③青年海外協力隊講師	1	5	1	2	3	2	1	2	1	2	1	1	1	3	6	32
④青年日本語教師講師												1	1		3	5
⑤中国人講師	6	4	7	3	3	3		1	1		1	1	1	1	2	34

注 1：青年海外協力隊員は JICA からの派遣である。2005 年 2 月現在、中国に派遣されている日本語教師隊員は 37 名余、そのうち中等教育機関派遣は半数近くを占める。任期 2 年。

注 2：青年日本語教師は国際交流基金からの派遣である。2001 年から吉林省教育学院、黒龍江省教育学院に各 1 名、2002 年からさらに 1 名が遼寧教育学院に派遣されている。任期 2 年。

注 3：中国人講師は、1997 年以降、客員講師として参加し、特別講義を担当した。



巡回指導で戻ってきた全体主任講師を交えての講師打ち合わせ(第6回研修会、吉林)



日本語教育アドバイザーによる寄贈教材の使い方の講義(第4回研修会、遼寧)

(10) 講師

各会場には主任講師、副主任講師を設け、原則的に日本から派遣した。主任講師は講師のとりまとめにあたり、副主任講師は主任講師を補佐するとともにクラス担当をお願いした。講師の方々はそのほとんどが、中国で日本語を教えた経験をもっていたり、中国語や中国文化、そして何よりも中国事情を熟知していたりするなど、中国の日本語教育のために惜しみなく情熱を注いできた方々ばかりである。講師の方々には、夏休み期間中であるにもかかわらず、いとわず参加していただいたわけであるが、とりわけ、第1回(1996年)から第7回(2002年)まで主任講師をお願いした加納陸人氏の存在なしには研修会を語ることはできない。カリキュラムの作成を中心に関わっていただいたばかりでなく、中国の日本語教育のために7年にわたりTJFと志をともにして歩んでいただいた。第4回(1999年)から第6回(2001年)までの各省で個別に開催した研修会では、全体主任として各会場を巡回していただくなど、かなり無理な負担をお掛けした。また、泉文明、永保澄雄、本田弘之、谷部弘子、山口敏幸、山田泉などの各氏には長年にわたって会場主任講師あるいは副主任講師として研修会を支えていただいた。また、多くの講師の方々に、高校『日語』、中学『日語』の編集委員や「漢語話者のためのわかりやすい日本語シリーズ」の制作メンバーになっていただいた。こうした継続的な作業や、この間蓄積された経験が、カリキュラムの改善や講義の充実化、研修会教材の完成を可能にしたのである。

また、国際交流基金の日本語教育アドバイザーをはじめとする派遣日本語教育専門家およびJICA派遣の青年海外協力隊日本語教師隊員を含む中国在住日本人教師の方々にも協力をお願いした。これは現地の日本人教師という人的資源の有効活用と、これら日本人教師と中高校日本語教師との交流やネットワーク形成の促進を図るというねらいがあった。また、

講師の声：柔軟な対応を心がけて

■一人ひとりの研修生に合わせて

授業中は、教授経験の長い研修生や学歴の高い研修生に対しては、間違いを指摘しにくいと感じたこともあったが、各人の課題を一つずつ取り上げるという方法で練習してもらったり、「学生がよくする間違い」だと言って練習してもらったりして授業を進めた。また、個別指導では、面子を気にする研修生も率直に質問できたようだ。

(2000、黒龍江省会場講師)

■臨機応変な授業を心がけて

• あいさつすらできない研修生が3分の1もいるところで、会話練習やロールプレイをするのはかなり難しかった。そこで、急遽、授業時間の半分以上を講義にあて、漢字をたくさん用いて板書し、聞き取れない研修生にも意味が分かるようにした。(2000、内蒙古自治区会場講師)

• 「コミュニケーション表現」の2時間目で、ロールカードを使ったが、研修生は頭では分かっているにもかかわらず初めての経験で動けず、難しいという印象を与えてしまった。そこで、3時間目には、「段階を追った練習からロールプレイに移行する」という形式を模擬授業として行ったところ、研修生に非常に好評だった。模擬授業をする前は、「ロールプレイは生徒たちには難しすぎます」と言っていた研修生たちが「これなら生徒たちにもできます」と言ってくれた。講師はいつも、研修会のテキストと教科書ができるだけ結び付けること、つまり現場を想定して講義をすること」を頭に入れておかなければならないと改めて感じた。

(2002、合同会場講師)

(研修会後のレポートから抜粋、編集しました)



講師を交えた茶話会。講師と研修生の距離は一気に近づく(第6回研修会、遼寧)



吉林会場講師陣(第5回研修会)



黒龍江会場講師陣(第5回研修会)



遼寧会場講師陣(第5回研修会)

ベテランと若手を組み合わせることで日本語教育専門家による次世代日本語教師の育成というねらいもあった。

「日本人講師」を望む研修生

第1回研修会では、日本人講師と、現地の大学で教鞭をとる中国人日本語教育専門家との混合チームを編成したが、2回目以降は、中国人日本語教育専門家には客員講師として関わってもらった。大学の日本語教育関係者に中高校の日本語教育にもっと関心をもってもらうとともに、教師研修の「現地化」の協力者になってもらいたいというねらいがあったからである。しかし、研修会終了後には、毎回のごとく研修生と教員から「次回の研修会には全員日本人講師にしてほしい」という強い要望が出された。中国人講師の講義は受けようと思えばいつでも受けられるが、研修会は日本人講師から直接学べる貴重な機会であり、そこで自然な日本語をシャワーのように浴びたい、一人でも多くの日本人講師と交流したい、というのが理由であった。また、中国の大学講師の教え方は中高校のレベルに合わない、中高校の日本語教育に関して理解を深め協力したいと言っているが、実際には日本語既習者の大学入学を拒んでいるのではないかという心情的な反発も日本人講師を望む理由の一つであった。最終的にその要望に応じて、第4回から中国人教育専門家の人数とコマ数を減らし、第5回以降は、高校『日語』や「課程標準」(その前身は「教学大綱」)に関する特別講義に限定して、それらの中国側編集委員や制作メンバーに講師を依頼した。

(11) カリキュラム

カリキュラムは、第1回(1996年)の研修会開始前に中国側関係者から聞き取り調査などを行ってニーズを把握した上で作成した。そして、毎回研修会終了後に研修生や教員にアンケートやインタビューを行うとともに、講師のレポートを踏まえて反省会を行い、当初の大枠を守りながら、次回に向けてさまざまな改善を図った。これは、中国の初中等教育における日本語教育の状況、教育現場のニーズ、関係者の意識の変化を捉え、それらに柔軟に対応するためであった。

「受験日本語」に対する研修生たちの要望は強かったが、目前の利益だけを追うのではなく、日本語教師として本当に必要なものは何か、また多くの日本人講師が授業を担当するというこの研修会ならではのカリキュラムは何かを考えた。そこで、教師自身の素養の向上と彼らにもっとも不足している発音、聴解力、運用力の向上に力をいれるために、講義を、「文法・語彙」「発音」「コミュニケーション表現」「聴解・口頭」「作文指導」「読解」というように、「技能別」に設定し、それらを通常講義として位置づけた。そのほかに、運用力の育成をめざす授業、学習者主体の授業、文化理解を図る授業などに関する教授法のように時代を先取りした内容もカリキュラムに組み込んでいった。



発音クラスの授業。一人ひとりの課題に合わせて個別指導(第6回研修会、遼寧)



ロールプレイを楽しむ研修生(第6回研修会、吉林)



模擬授業を行う現地教師(第5回研修会、吉林)



添削された作文に見入る研修生(第6回研修会、遼寧)

文法中心からコミュニケーション志向へ

研修会が始まった1996年は、「教学大綱」が改訂され、これに準拠する普通高級中学用の教科書、高校『日語』(15頁参照)の制作が始まった年でもある。現場の教師の声を聞くために、高校『日語』の編集委員の多くの方々に研修会に講師として参加していただき、会期中、研修生の教科書に対する要望調査の時間も設けた。1996年改訂の「教学大綱」や高校『日語』はコミュニケーション志向のものであったが、研修生たちからは「大学受験は焦眉の課題であり、読み書き・文法の学習が要求される。コミュニケーション志向の必要性は分かっている、現実に取り入れるのは難しい」という強い指摘があった。第3回(1998年)の研修会まではこうした空気が強く、カリキュラムにおいても文法、読解の占める割合が大きかった。その後も研修会の中でこの教科書の編集方針を説明したり、具体的な教え方の例を示す時間を設けたりするなど、1996年改訂の「教学大綱」の理念を少しでも浸透させられるよう努めた。高校『日語』の3分冊が完成し、1999年頃になると、コミュニケーション志向の理念も少しずつ浸透し、教師のオーラル面での日本語能力を強化するカリキュラムが歓迎されるようになった。

作文指導と聴解・口頭表現への関心の高まり

1998年から大学入試に作文問題が出題されるようになると、にわかに作文指導に関する要望が高まった。そうした声に応え、1999年の研修会では、遼寧会場のカリキュラムに「作文指導」を取り入れ、2000年には会期の短い内蒙古会場を除いた3会場に、2001年には4会場すべてに「作文指導」の時間を設けた。2002年には、講師の本田弘之氏に、それまでの研修会で実践してきた作文指導講義を「作文指導のマニュアル」としてまとめていただき、研修生に配付した。

聴解問題が2000年から大学入試に試験的に採用され、2001年から本格的に採用されることになり、聴解に対する関心がかつてないほどまでに高まったことから、2000年、2001年のカリキュラムで「聴解・口頭」の時間を可能な限り増やした。聴解指導のやり方を体験的に学んだ研修生から、「聴解指導はただ聞かせればよいと思っていたが、事前に単語や重要な文型を確認したり、関連の情報を与えたりしてから聞かせたほうが効果的だと分かった」といった感想が聞かれた。研修生自身の聴解力アップのみならず、生徒への効果的な聴解指導にも関心が高まり、「聴解能力を強化する講義を削って、聴解の指導法を増やしてほしい」という声がかかるようになった。このことから明らかなように大学入試が現場教師に与える影響は非常に大きかった。実際、現場の教師は大学入試のことを「我々の指揮棒」と呼んでいるほどである。

「文化理解」の啓発

一方、1996年改訂の「教学大綱」では言語と文化の関係が明記され



写真教材を使った「文化理解」の授業(第6回研修会、遼寧)



日本から持ち込んだ新聞折り込みチラシも文化理解の素材として活用された(第5回研修会、吉林)



研修生一人ひとりの朗読を録音して行った発音クリニック(第7回研修会)



課外で行った個人面談。研修生一人ひとりの悩みを聞いた(第3回研修会)

※2：講師が研修生の所属する学校の日本語科目の状況や悩みなどについてカウンセリングを課外で行った。

※3：研修生一人につき30分間、個別に発音指導を課外で行った。

(18頁参照)、高校『日語』にも課ごとに「文化コラム」が設けられた。2000年改訂の「教学大綱」では「文化理解」を重視する視点がさらに明確になった。TJFが一貫して唱えてきた「文化理解」という理念が、中国の日本語教育のめざす方向と一致したわけである。当初の研修会カリキュラムには、技能別講義の合間を縫って「文化理解」を啓発するための講義やワークショップを取り入れていたが、研修生の間には生徒に試験でいい点数を取らせることが教師の最大目標であり、「文化」を扱う余裕などない、という雰囲気があった。しかし、「文化の概念について目からうろこが落ちたような気がした」「文化理解の重要性に気づいた」などと感想を述べる研修生が現れ始めていた。そして、新しい教科書の普及により、もっと「文化」について学び、それを生徒に伝えたい、という声が高まっていった。教科書は大学入試に次ぐ「指揮棒」であったのである。

教授法研修の強化

第6回(2001年)の研修会までは、「教授法」と銘打った講義は少なく、教科書と連動させたり、特別講義として設けたりする程度であった。これは、研修生からの要望も強かった日本語能力を向上させることに重きを置いたためである。教授法は「技能別講義での講師の教え方から学ぶ」というねらいをもたせるにとどまっていた。しかし、2001年に「課程標準」が制定され、中国の教育全体が知識伝達から運用能力重視へ、さらには「素質教育」重視へと変わる中、現場の教師は新しい時代が求める日本語教育能力、日本語教師にふさわしい資質の獲得に目を向けるようになった。

そうした流れのなか、第7回(2002年)の研修会では、教師と教研員の要望を踏まえて、カリキュラムを調整し、講義方針を大きく転換した。形式化のきらいがあった「模擬授業」と、「教材(漢語話者のためのわかりやすい日本語シリーズ③『類義表現の使い分け』、36頁参照)があるから自分で勉強できる」という声が聞かれるようになった「類義表現」のコマをなくし、「教授法」の講義を増やすと同時に、研修生が自主的に参加できるようにグループワーク、発表などの形式を多く取り入れた。また、「聴解・口頭」の講義では、研修生がさまざまな聞かせ方を体験できるように心がけるとともに、聞いた内容を表現する割合を大きく増やした。他の講義でも、教材の内容を消化することに重きをおかず、研修生が講師の講義から教授法のヒントをより多く得られるよう工夫した。このような最終回における方向転換はおおむね受け入れられ、研修会の集大成として、確かな手ごたえを得ることができた。

このように、研修会カリキュラムは、現場のニーズに対応しつつ、常に半歩先をめぐして、プラスアルファの要素を取り入れてきた。また、課外授業として、研修生が日頃抱えている問題を少しでも解決できるようにし、また一人ひとりの今後の努力目標を明らかにするために、個人面談^{※2}(第1回から第4回の研修会まで実施)や発音クリニック^{※3}(第5回の研修会から実施)の時間を設けたりするなど、きめ細かな対応を心がけた。

次世代を担う人材育成の場

文教大学教授
加納陸人

研修会が行われた1996年から2002年までの7年というのは、中国の中等課程での日本語教育が大きく変化した時期である。中等教育における日本語学習者の減少化傾向がみられ、その中で日本語教師の意識の変化、また、高校では新しい「教学大綱」に基づいて新しい教科書が作成され、それに対応する教授法の確立が求められていた。また、現場の教師は、日々の授業を変えていくことが要求され、そのためにも日本語力をつけることが急務であった。そこで、この研修会の柱を、研修生の日本語力と教授技能の向上においた。

●研修会のカリキュラムを組むにあたって

研修生から要望が強かったのは、発音、交際用語（のちにコミュニケーション表現に改める）、文法（特に類義語の使い分け）、聴解・口頭表現などであり、これらを通常講義として位置づけた。教授法は、文化理解の視点を取り入れたものや教室活動など、すぐに現場で使えるものをカリキュラムに組み込んだ。また、中学教師と高校教師ではニーズ差があり、これも考慮に入れる必要があった。高校においては大学受験への関心が高い。受験対策が研修会の目的ではないが、研修生をある程度満足させることが必要であった。

さらに、毎年、研修生や教員から感想や意見を聞き、教育現場で何が必要かを考え、研修会のあり方を模索しつつ、カリキュラムにいくつかの変更を加えた。例えば、1998年から作文が大学入試に取り入れられるようになると、高校教師の要望に応じて、作文指導に関する講義を加えた。また、実際に研修会を行ってみて、研修生が現場で自信を持って発話できていないことが分かった、「発音」指導の仕

方も工夫した。研修会が始まる前に研修生の朗読を一人ずつ録音し、問題点を把握した上で、個別に発音指導を行い、最後の授業で同じものを朗読するという方法をとった。これは、研修生が自分の問題点を自覚し、上達のコツを習得していけるようにするためだった。また、要望の強かった類義語の使い分けに関しては、研修会用教材「漢語話者のためのわかりやすい日本語」シリーズが完成したことで、基本的に自分で解決できるようになったと思われたので、どのように類義語を捉えていくかというアプローチの仕方や生徒にどう説明すればいいかという方法に重点を置くようにした。また、模擬授業は、意義はあったが、形式的な面が目立ってくるようになったので、実際に使っている中高校の教科書を使って教案を作成し、グループで話し合い、発表していくワークショップ型授業に変えていった。

●変わった研修生の意識

このように、その時々状況を見ながらカリキュラムや授業の内容を変えていった。これは、中国の日本語教育が変わったことはもちろん、研修生の意識が大きく変化したことと大きく関連している。研修会の授業形式が知識伝達型から研修生参加型へと移っていったこともその表れのひとつである。

忘れられない光景がある。1996年の長春で開催された第1回研修会でのことである。新しい高校向け教科書の一課分のサンプルを配り、作成方針などを説明した。そのとき、ある教員に「教科書に会話はいらぬ。大学受験と関係ないから」と、痛烈に批判された。高校の教師にとっては大学入試が最も重要であり、その当時の大学入試に会話の問題などなかったからである。この教員の発言は、当時



加納陸人(かのう・みちひと)

1970年代から中国の日本語教育に携わる。TJFが1995年に実施した「第4回全中国中高生日本語弁論大会」の審査員、中国中高校日本語教師研修会の主任講師を初回から最終回まで務める。TJF発行の研修会用教材の作成に中心メンバーとして加わる。中国の中高校日本語教師向け情報誌『ひだまり』(TJF発行)のコーナー「日本語問答」を執筆(1999～2004年)。1996～2004年は中国の中高校日本語教科書の日本側主任編集委員を務める。

の現場の意識や状況を如実に反映していた。

しかし、研修を始めたころ「ロールプレイ」という言葉にも説明を要したが、今の教室では当たり前のように行われるようになり、会話やコミュニケーションの大切さが強調されるようになった。上記で紹介した教員も会話の大切さを説くようになった。

● 講義を行うにあたって大切にしたこと

研修生を取り巻く環境は実にさまざまだった。個人面談では多くの研修生から、いちばん困るのは、教科書と辞書以外の教材や参考書、テープなどを入手できないことだと言われた。また、研修会で初めて日本人と話す研修生や、初めてでなくてもふだん日本人と話す機会がほとんどない研修生が多く、みんな自分の日本語が通じるだろうかと心配しながら参加していた。研修会でほかの研修生と出会うことによって自分の日本語力に気づき、日本語がうまく話せないもどかしさからか、面談時に中国語で話したとたん、大粒の涙をこぼす研修生もいたし、研修会に参加するために置いてきた小さい子どものことを気にしている研修生や、給料が何ヵ月も未払いだという研修生、日本語教育が英語教育におされ日本語教師の職を失うのではないかという研修生もいた。また、日本語のレベルには差があり、特に「聞く」「話す」の能力の差は大きかった。都市の学校から来た研修生と農村の学校から来た研修生が置かれている環境の差もあった。このように研修生が置かれている状況は一人ひとり異なっていた。しかし、どの研修生も、研修会でできるだけ多くのことを学び、成果を現場の教室で何とか生かしたいと考えていた。

講師はこういったことに配慮し、常に現場のこと

を考えながら、授業を進めていくことが必要であった。また、研修会に参加したことで、どの研修生にとっても自信と励みにつながるものが何よりも望まれた。したがって、講義を行う際に、講師にお願いしたことは、次のようなことである。①研修生の立場(皆、教師である)を尊重し、同じ目線での協働意識を大切にすること。②「聞く」ことを苦手とする研修生もいるので、説明の言葉は簡潔明瞭に、曖昧な言い方は避けること。③早い段階で研修生が抱えている問題点を見つけ、すぐに現場で役立つものを優先させること。④研修生が主体的に取り組むことによって、問題解決する方法や能力を養う場にしていくこと。

講師が把握した研修生の状況や講義の様子を講師間で共有するために、講師間で情報交換が不可欠であった。毎日、その日の授業を終えた後、授業内容や方法、問題点などを出し合った。研修会をうまく運営していくには、何よりもチームワークが必要だった。

研修会でお世話になった水谷修先生が、ある時「言葉の教師には優れて人間的なものが、そして、相手の立場に立って考えることが要求される」と話されたことがある。一般的にこのようなプロジェクトは、同化主義的な傾向や押しつけ的な運営に陥りやすい。しかし、この研修会では、国際文化フォーラムのスタッフや現地の教員が相手のやり方を理解しあい、柔軟に対応しながら協働作業を行った。もちろん、この研修会に関わった多くの熱意ある講師の力を忘れてはならない。人材育成の伴わないプロジェクトはインパクトがないといわれるが、この研修会では日中双方が次世代を担う人材を育成したのではないだろうか。

I. 7回の研修会をたどる

カリキュラム一覧

開催年	1996	1997	1998	1999			2000				2001				2002
開催形式	合同	合同	合同	省別			省別				省別				合同
会場				吉林	黒龍江	遼寧 ^{※3}	内蒙古	吉林 ^{※4}	黒龍江 ^{※5}	遼寧 ^{※5}	内蒙古	吉林	黒龍江	遼寧	
①言語知識を高める															
文法・語彙	16	10	12	10	8	8	12	10	10	12	8	8	8	8	0
読解	6	6	6	0	0	6	0	0	0	0	0	0	0	0	0
対照言語	0	0	8	5	4	4	0	0	2	0	0	0	0	0	0
小計	22	16	26	15	12	18	12	10	12	12	8	8	8	8	0
②「聞く」「話す」能力を伸ばす															
聴解・口頭	20 ^{※1}	8	6	8	7	9	11	8	8	10	11	11	11	11	7
発音	4	12	5	8	7	6	9	10	10	10	11	11	11	11	13
コミュニケーション表現	0	7	5	11	8	6	12	10	12	12	10	10	10	10	10
小計	24	27	16	27	22	21	32	28	30	32	32	32	32	32	30
③教え方を学ぶ															
教授法(教材・教具、教室活動)	6	9	4	8	10	8	8	14	10	10	10	8	8	6	18
作文指導	4	0	0	0	4	6	0	6	4	4	4	4	4	4	6
模擬授業	0	2	4	4	4	4	0	4	4	4	4	4	4	4	0
小計	10	11	8	12	18	18	8	24	18	18	18	16	16	14	24
④日本語教育の考え方や理念、関連情報を知る															
文化理解	4	2	8	2	6	2	0	2	2	0	0	2	2	4	2
教学大綱/課程標準	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
大学入試	2	2	0	2	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0
意見交換	4	2	2	2	2	3	2	2	2	2	2	2	2	2	2
小計	12	6	10	6	8	7	2	4	4	2	2	4	4	6	6
⑤その他(課外)															
個人面談	○	○	○	○	○	○									
発音クリニック							○	○	○	○	○	○	○	○	○
課外活動	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
交流	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
文化体験	○		○								○				
合計	68 ^{※2}	60	60	60	60	64	54	66	64	64	60	60	60	60	60

※1 日本事情を含む。

※2 1996年は1日8コマあったため68コマで、ほかの回より多い。発行前の高校『日語』についての説明と意見交換を行った。

※3 1999年遼寧:高校=作文指導4、中学=聴解4

※4 2000年吉林:高校=作文指導6、中学=聴解6

※5 2000年黒龍江・遼寧:高校=作文指導4、中学=聴解4

表の項目①～⑤は、研修会の授業を分類したものである。①～⑤に含まれる授業名と実際に行われた授業名が異なるものは、次のとおりである。

- 文法・語彙:「文字・語彙」(1996)、「助詞の使い方と教え方」(1998)、「類義表現」(1999)など
- 対照言語:「日本語の文法を支える考え方」(1998)、「日中言語文化比較—翻訳を事例として」(1998)など
- 発音:「日本語の音声と音声指導」(1997)、「音声表現実習」(1997)、「日本語音声の特色とその指導の方法について」(1997)など
- コミュニケーション表現:「日本語の丁寧な表現」(1997)、「交際用語」(1997、1998)など
- 教授法(教材・教具、教室活動):「視覚表現実習」「直接教授法における視覚的技法」(1997)、「話し方の授業のポイント」(1998)、「視覚教材と文化理解」「教案について」(2001)など
- 文化理解:「異文化理解講座」(1996)、「日本語教育と文化理解」(1997)、「文化を理解するとは?」「文化理解ワークショップ」(1998)、「文化を取り入れた日本語の授業」(1997、1998、1999、2000)、「教科書と文化理解」「視覚教材と文化理解」(2001)など
- 課外活動:ピアノ鑑賞、歌、茶話会など
- 交流:日本の高校中国語教師との交流や在中日本人との交流

各講義のねらい

開催年によって若干異なるが、主な講義のねらいは次のとおりである。2002年の講師マニュアルから抜粋した（「類義表現」「模擬授業」は2002年には実施されなかったため、2001年の講師マニュアルから抜粋）。

■類義表現

使用教材：漢語話者のためのわかりやすい日本語シリーズ③『類義表現の使い分け』

この講義では、研修生が日頃抱えている問題で、自分で解決するのが困難な点にしぼって解説したり、練習したりしていくことが重要である。説明は、簡潔に単純化し、曖昧な説明は避ける。クラスの状況に応じて、分かりやすい例文にしたり、練習問題も増やしたりすることも必要である。

■聴解・口頭

使用教材：『楽しく聞こう』I・II、『聞き取り50日』上

この講義は「聞く」「話す」力を伸ばしていくことを目的とするが、中でも聞くことが主で、話すことを従とする。聴解レベルを高めるための適当なテープ教材が不足しており、日本語を話す機会が少ない研修生が多いので、この講義を受けることで、研修生が少しでも自信をもてるようになることをめざす。また、研修生が教材を教室で生かせるよう、講師は教材を使っているいろいろな聞かせ方を体験させることが必要である。

■発音

使用教材：漢語話者のためのわかりやすい日本語シリーズ①『発音』

少人数クラスで、一人ひとりの発音を矯正し、日本語らしい発音を身につけてもらうことを目的とする。それには、担当講師が研修生の問題点を的確につかみ、本人の発音の問題点を認識させることが必要である。最初の講義で、一人ひとり朗読したものを録音し、各研修生の課題を明らかにして講義にのぞみ、最後に再び朗読させ、成果を見る。

■コミュニケーション表現

使用教材：漢語話者のためのわかりやすい日本語シリーズ②『コミュニケーション表現』

この授業を受けることを通じて、研修生にコミュニケーション表現をどのように教えるのかを学びとってもらうことを目的とする。そのためには、研修生が受け身にならないように、できるだけ多くの発話を促し、研修生の積極性を引き出していくことが大切である。

■教授法(教材・教具、教室活動)

使用教材：中高校の教科書

教科書の使い方、教案の書き方について指導し、その発展としてグループで教案を実際に作成してもらう。また、普段の授業で工夫していることも発表してもらう。この過程を通じて、研修生が自分で考え、研修生同士が学び合い、刺激を受け合って、研修生自身の問題意識や創意工夫が共有され、それらが教室で生かされるようになることを目的とする。

多人数クラス(40～60名)において、生徒の発話機会を増やし、生徒全員が参加できる楽しい教室活動や、身近なものを教材や教具として活用するアイデアなどを紹介する。

■作文指導

使用教材：作文指導マニュアル

中学教師クラスと高校教師クラスに分ける。

高校教師クラスでは、過去の大学入試の作文問題を参考にして、入試に対応できるような指導をめざす。原稿用紙の使い方などの基本から、段落の立て方、文のつなげ方など、指導のポイントを示す。また、実際に課題も与える。研修生がふだん作文指導で困っていることを聞き、その解決策を検討する。

中学教師クラスでは、生徒に日本語で、手紙や日記、感想文など自分の気持ちを、少しまとまった長さの作文に書かせるための指導ができるようになることをめざす。

■模擬授業

中学教師と高校教師に一コマずつ模擬授業をしてもらい、それをもとに討論を行う。模擬授業を題材にして、研修生に自分自身の授業を振り返ってもらい、経験交流を行うことを目的とする。研修生が意見を出しやすいように、小グループで討論を行い、講師は各グループに入って、研修生をサポートする。

■文化理解

文化知識の伝達ではなく、文化理解のための授業をめざす。文化理解とは、日本文化・日本事情を知識として学ぶことではなく、中国の文化と日本の文化との比較を通じて自己を再認識することや、文化そのものについて考えること、そして最終的には生徒の世界観や視野を広げ、異文化に対する感性を育てることにつながるのだという考えを知ってもらうことを目的とする。

■意見交換

次のテーマについて、グループで意見交換を行い、最後に全員の前で発表して共有化することをめざす。

- ① 研修会に対する意見、感想
- ② 研修生自身の反省
- ③ 研修会で学んだことと今後の実践に生かせること



クラス分けテストの採点を行う講師陣(第5回研修会、内モン)

(12) クラス分け

研修会では、授業内容によってクラスを分けた。客員講師による特別講義は合同クラスで行ったが、技能別授業については、発音の授業を除いて、第1回(1996年)では、外国語学校と普通中学別にクラスを編成した。第2回(1997年)以降は、講義を聞く鍵となる聴解力を測るためのテスト(日本語能力検定試験の3級から2級の間程度)を初日に行い、その結果によってクラスを分けた。第4回(1999年)以降は、聴解テストにインタビューを加えた。合同開催時は3~4クラス、地域別開催時では2クラスを基本とし、一クラスは大体15~20人であった。また、教授法、作文指導などの授業は、必要に応じて、中学校と高校の教師を分けて行うようにした。

発音の授業は、基本的に一クラス10人以内に行った。当初は朗読による発音チェックを行い、共通の間違いを起こす研修生同士を同じクラスにした。しかし、発音の間違いは、母語干渉によることが大きいことから、漢語話者と朝鮮語話者それぞれを対象にした研修会用教材ができた第3回以降は、研修生の母語を考慮に入れてクラス分けを行うようにした。



6年かけて完成した研修会教材

(13) 研修会教材

第1回(1996年)研修会では、市販の教材を選び、発音・アクセント、文字・語彙、読解の素材を簡単なハンドアウトにまとめて使用した。しかし、研修会を終えたあと、講師をはじめとする関係者から、研修生が抱える課題を解決し、そのニーズに応える独自の教材開発が必要だという意見が多く出された。そこで、第1回の研修生の間でもっとも要望の強かった「類義表現」、高校『日語』で重視されている「交際用語」、「助詞の使い方」の三つの分野に絞って、『類義表現の使いわけ』『交際用語(のちの『コミュニケーション表現』)』/動詞の整理(のちの『助詞の使い分け文例集』)の2冊の教材を作成し、第2回(1997年)で使用した。

その後、講師や研修生、日中の日本語教育関係者の声を取り入れながら毎年改訂を重ね、2001年夏には、①『発音』、②『コミュニケーション表現』、③『類義表現の使い分け』、④『助詞の使い分け文例集』という4分冊からなる「漢語話者のためのわかりやすい日本語シリーズ」試作版を刊行した。さらに⑤『発音指導の手引き』を追加して、5分冊からなる完成版を2002年夏に刊行した。また、シリーズ①②⑤には音声テープも付けた。これによりシリーズ全体が自習教材、日常的に使える参考書としての利便性を高めることができた。

7回の研修会の蓄積をもとに完成されたこのシリーズは、3000部作成し、第1回から第7回の研修生をはじめ、把握できうる限りの中国の中高校日本語教師に寄贈した。同シリーズは本事業終了後も、各地域で開かれている研修会やセミナーなどで活用されている。

また、研修会では、日本で市販されている聴解教材を毎回研修会予算で買い上げ、授業で使ったあと研修生に寄贈した。これらの聴解教材は研修生の聴解力向上に寄与しただけでなく、各学校の聴解の授業でも活

教材改訂の流れ

作業期間	発行形態	教材名称および内容構成	作成・改訂のポイント
1996.9～ 1997.6	2分冊+1別冊 (A4/計230頁)	中国中高校日本語教師研修会テキスト 『類義表現の使いわけ』(本冊126頁、練習問題回答別冊12頁) 『交際用語/動詞の整理』(92頁)	第1回研修会に参加した研修生からもっとも要望の強かった『類義表現の使いわけ』、新しい教科書で重視されている「交際用語」、助詞との組み合わせが難しい「動詞の整理」を作成。
1997.9～ 1998.6	3分冊 (A4/計366頁)	中国中高校日本語教師研修会テキスト 『発音/交際用語』(112頁) 『類義表現の使いわけ』(164頁) 『読解/動詞の整理』(90頁)	「交際用語」と『類義表現の使いわけ』を改訂 「交際用語」では、表現別に解説していたものを「あいさつ」「誘い」「勧め」「申し出」「依頼」「許可」といった機能別に整理し直し、機能ごとに「ロールプレイ」の課題を付した。 『類義表現の使いわけ』では、名詞類、形容詞類、副詞類、助詞類、助動詞類、接続詞類に整理し直し、語彙や表現の数を46組から69組に増やした。 「発音」「読解」を作成 「発音」では、漢語を母語とする日本語教師に次いで多い朝鮮族出身の教師のニーズに応じて、漢語話者対象と朝鮮語話者対象のものをそれぞれ作成した。 「読解」では、書き下ろしの文章を中心にした「読解問題」と、他の書籍から引用した「読み物」で構成した。テーマ、文体、形態のバランスを考慮した。
1998.9～ 1999.6	合冊 (A4/256頁)	『1999年中国中高校日本語教師研修会教材』 第1部「発音」(56頁)/第2部「コミュニケーション表現」(104頁)/第3部「類義表現の使いわけ」(85頁)	「発音」では、練習問題に全面的にアクセント記号を付け、自主学習にも使いやすくした。 「交際用語」を「コミュニケーション表現」に改め、日常のコミュニケーションに必要な日本語表現の解説にとどまらず、その背景にある文化や対人関係のルーツをコラムやイラストを取り入れながら掘り下げた。また、「分かる日本語」から「使える日本語」にするために、教室でどのような指導と練習が必要か、具体的に解説し、研修成果が日々の授業に生かせるよう工夫した。 『類義表現の使いわけ』では、研修会で取り上げる語彙・表現を中心に25組を選び、その用法の基本から応用までをステップ別に解説し、研修生の日本語のレベルに合わせて使えるようにした。
1999.9～ 2000.6	合冊 (A4/272頁)	『2000年中国中高校日本語教師研修会教材』 第1部「発音」(72頁)/第2部「コミュニケーション表現」(104頁)/第3部「類義表現の使いわけ」(85頁)	「発音」を中心に改訂。全体的に構成を見直し、漢語話者・朝鮮語話者の共通項目と対象別項目に整理して解説し、練習問題の分量を調整した。また、説明文では学習者になじみのない専門用語や音声記号を避け、具体例をあげながら解説した。
2000.9～ 2001.6	4分冊 (B5/計820頁)	漢語話者のためのわかりやすい日本語シリーズ ①『発音』(106頁) ②『コミュニケーション表現』(202頁) ③『類義表現の使いわけ』(356頁) ④『助詞の使いわけ文例集』(156頁)	『コミュニケーション表現』では、冒頭の「日本語におけるコミュニケーションのルール」の解説部分に中国語訳を併記した。また、機能ごとに「会話例」、「考えてみましょう」、「会話をしましょう」の練習、「関連表現の解説」、「会話をしましょう」の会話例という順に提示することで、学習の方向付けを行った。 『類義表現の使いわけ』では、1999年版から取り入れたステップ別解説の方式で、1998年版で取り上げた全項目を網羅し、比較する語彙・表現の組み合わせを見直した上で最終的に65項目を取り上げた。また、すべての解説に中国語訳を併記し、例文を増やすなど、理解しやすいよう工夫した。 『助詞の使いわけ文例集』は、1997年版の「動詞の整理」の名称を改め、文例を通して基本動詞と助詞の関係を提示し、学習者の助詞の使い方に関する悩みを解決するための教材であるという「ねらい」を明確にしたうえで、文例ならびに文例に関する注釈の中国語訳を併記した。なお、文例は97年版のものを全面的に見直し、自然で発話状況や発話意図の分かりやすさを心がけ、必要に応じて修正または新たに作成するなどした。
2001.9～ 2002.6	5分冊 (B5/計916頁)	①『発音』(106頁、テープ2本) ②『コミュニケーション表現』(202頁、テープ1本) ③『類義表現の使いわけ』(356頁) ④『助詞の使いわけ文例集』(156頁) ⑤『発音指導の手引き』(96頁、テープ1本)	『発音指導の手引き』を作成。母語干渉の問題を中心に、漢語話者が日本語の音声进行学习する時、またそういう学習者を指導する時の問題点と解決法を具体的に解説し、巻末に練習素材を提示した。解説には、音声学の素養が不十分でも分かるように平易な表現を心がけるとともに、すべて中国語訳を併記した。 本シリーズは「中国中高校日本語教師研修のための教材」の完成版として、研修会や研究会で活用されることを想定しつつ、教師の日ごろの自主学習の参考書としても機能するように、①②⑤に音声テープを付けた。

教材制作にあたっては多くの方々に長年にわたってご協力いただいた(134頁参照)。



閉講式にて研修生代表に教材を寄贈(第7回研修会)



教材の説明をする講師(第5回研修会、黒龍江)



三菱銀行国際財団から学院へ寄贈されたコピー機を囲んで(第2回研修会)



中国在住日本人との交流会の受付(第1回研修会)



日中交流会は日中の歌と踊りで盛り上がる(第2回研修会)

用され、この分野で深刻な教材不足を補うことができたという声が多数寄せられている。

(14) 関連プログラム

研修会と連動させて実施したのは、日本語教材等の寄贈と交流プログラムであった。また、課外の時間を利用し、さまざまな活動を行った。

①日本語教材等の寄贈

中国の中高校日本語教育の現場では、日本語の教科書以外の関連教材や資料、参考書などが著しく不足している状況が長く続いた。近年になって、日本で作られた教材が都市部の外文書店に並べられるようになり、その中国語版が一般の書店で見られるようになったが、研修会開催当初は現地の書店にはなかったし、また価格の面からも入手不可能だった。現在でさえ、日本語を開設する多くの中高校は都市部から離れた地方にあるため、教材不足の問題が完全に解決されているわけではない。

こうした現状を少しでも改善するために、第1回(1996年)研修会から、研修生の日常的な自己研鑽や授業に役立つ教材・参考書を提供できないものかと模索した。その結果、研修会の趣旨に賛同し、中国の中高校の日本語教育支援に理解と関心を示してくれた日本の各出版社、書店、日本語教育実施機関から多くの教材を無料、あるいは割引価格で提供してもらうことができた。こうして集まった教材は1トンを超えた。さらに、この膨大な教材を全日空が無償で空輸してくれたことにより、この日本語教材寄贈プロジェクトは実現した。

こうして、多くの関係者の厚意、協力により、研修生への教材寄贈を毎年行うことができた。また、研修会の運営主体である各教育学院には、その地域のリソースセンターとして機能するよう、数回にわたって教材を寄贈した。さらに、これらの教材を地域全体の日本語教師が活用できるように、三菱銀行国際財団の協力を得て、各学院にコピー機を寄贈した。

②交流プログラム

研修期間中、中国在住日本人と研修生の交流プログラム、講師と研修生の交流プログラム、日本の高校中国語教師と研修生との交流プログラムも実施した。できるだけ多くの日本人と親しく接する機会をつくりたいと考えたからである。

中国在住日本人と研修生との交流

7回の研修会を通じて、規模の大小はあるものの、大連の日本人会をはじめハルビン森永乳業の駐在員、瀋陽全日空支店の駐在員など多くの方々がこの交流プログラムに協力してくれた。「研修会で会った日本人が、私にとって生まれて初めて会った日本人です」「生まれて初めて日本人と言葉を交わしました」と実に多くの研修生が感慨深げに話していた。「何十年



昼食時も講師と研修生の交流タイム(第3回研修会)



朝鮮族とモンゴル族の歌と踊りは
歓送宴の名物(第6回研修会、黒龍江)



研修生の友好クラス体験を紹介する日本の高校中国語教師(第5回研修会、吉林)



閉講式のあとの歓送宴。研修が終わってほっとした表情で乾杯する日中の研修生(第7回研修会)



スイカを食べながら交流する日中の研修生(第7回研修会)

も日本語を教えてきても、自分の日本語が本当に日本人に通じるかどうか不安だった」という研修生も多くいた。さまざまな日本人と直に交流したことが忘れがたい経験となったようだ。

講師と研修生との交流

第3回(1998年)の研修会で「講師と親しくなる会」と称して、講師と研修生の交流会を初めて実施した。第4回(1999年)研修会では、延吉会場において会期中「茶話会」という形で3回実施して効果を確かめたあと、第5回(2000年)以降各会場で積極的に取り入れた。一日の授業を終えたあと、大教室に小さな机を寄せて大きなテーブルをいくつかつくり、その上にスイカ、ひまわりの種、キャンディなどを載せ、研修生はグループに分かれてそれぞれのテーブルに座る。講師(日本人スタッフも参加して)はそれぞれのテーブルに1~2名ずつつき、ひとしきり話を交わしたあと、テーブル間を移動して、すべての研修生と接するようにした。こうした茶話会は、授業中話せないことや聞けないこと、日本語を教える上での悩み、自分たちの普段の生活などを自由に話す場となった。授業中は発言を控えていた研修生もリラックスした雰囲気の中で自然に話に加わった。こうした場では、講師と研修生が「教える人・教えられる人」という関係ではなく、対等に交流できた。また、授業や茶話会を通じて交流を重ねるうちに、講師と研修生、スタッフと研修生の距離はどんどん縮まっていった。そして、最終日の夜に行われる送別宴では、出会えたことの喜びや2週間の苦楽を酒や歌、踊りに託して、毎回涙をこぼし別れを惜しんだ。

日本の高校中国語教師と研修生との交流

第1回(1996年)の研修会の終了時に、日本の高校との交流を望むかどうか研修生にアンケートをとったところ、多くの研修生が希望した。一方、日本の高校中国語教師を対象に中国の高校との交流を望む教師を募ったところ、21名の教師が手を挙げた。そこで、第2回(1997年)の研修会から、日本の高校中国語教師数名を会場に招いて、研修生と交流する場を設けた。第3回(1998年)の研修会に参加した日本の高校中国語教師が研修生の中からそれぞれの交流相手を見つけ、「日中友好クラス交流」が始まった。この友好クラス交流は、学校同士の交流とは違い、教師同士の交流だったので、気軽に始められるというメリットがあった。友好クラス交流のための橋渡しはその後も続けられ、日本の高校中国語教師が生徒を連れて交流相手の学校を訪問するケースもあった。多いときは、30組が交流していた。お互いの言葉を教える教師同士、学ぶ生徒同士の交流は、言葉はコミュニケーションのためにある、ということを実感するいい機会となった。

第7回(2002年)の研修会では、第6回までの集大成として、念願だった日本の中国語教師を対象とする「高等学校中国語教師研修会」(高等学校中国語教育研究会主催、TJF企画・協力)を、同時期に同会場で開催することができた。中国語教師研修会のほうが期間が短かったために、日本

語教師研修会の後半と日程が重なるように設定した。中国の日本語教師79名と日本の高校中国語教師21名は8日間寝食を共にし、昼休みや夜の自由時間を利用して、お互いの発音を直したり、宿題を手伝ったりした。また、作文の合同授業を受けたりして学び合った。また、食事をしたり酒を飲んだりしながら、家族のこと、教師という仕事、社会や歴史について話し合い、相互理解を深めた。日中の研修生から「1年間に話す日本語よりも多く日本語を話しました。日本人の先生と一緒に泊まったことは本当に貴重な経験です」「教育に携わる者同士相通じるものがありました。授業以外の何気ない会話の中に多くのことを学ぶことができたと思っています」という声が寄せられた。また、研修会後に開かれたTJF主催の合同セミナー「日中の高校生に隣国のことばと文化を教えることの意味」にも、日中の研修生が参加し、高校生が日本語や中国語を学ぶことの意義や、言葉の学習と交流を連携させることの意味について討議した。

日中教師セミナー「日中の高校生に隣国のことばと文化を教えることの意味」

TJFは、研修会で中国の中高校日本語教師と日本の高校中国語教師との交流会を設けたり、『小溪』(日本の中国語教師向け情報誌)と『ひだまり』(中国の中高校日本語教師向け情報誌)の誌面を通じて情報交流を促進してきた。しかし、意見交換する十分な時間はなかった。

第7回(2002年)の研修会終了後に開かれた日中教師セミナーでは、中国の中高校日本語教師79名と日本の中国語教師21名が、10グループに分かれて「日本語/中国語を教えることの意味」「自分たちにできる交流とは」について2日間にわたって話し合った。その結果をグループごとに発表し、参加者間で以下のことが確認された。

●中日の高校生に日本語/中国語を教えることの意味

- 中国と日本は、隣の国同士なのだから、相手のことをよく知る必要がある。またお互いの国のことについて理解を深めることは、ひいては世界のことを知ることにつながり、生徒たちの視野を広げることができる。
- それぞれのことばの背景にある気持ち(相違点・共通点)を知ることによって、相手に対する思いやりを持つことができる。
- 日本語/中国語教育を通じて、隣国さらには世界の人々との共生が課題となる新しい時代に対応する人材育成ができる。

●ことばの学習と交流を連携させる意味と交流のあり方

- 外国語学習の最も大切な目的であるコミュニケーションのための言語運用能力を身につけるには、相手を知る必要がある。その手段として交流はとても効果的である。
- 個人レベルの交流を通じて、「中国(人)は～」 「日本

(人)は～」という、ステレオタイプの見方を修正することができる。

- 修学旅行などによる直接交流が理想だが、経済的な面から困難。近い将来、E-mailの交流も可能だろうが、現段階で現実的なのは文通。まずできるところから始めよう。
- 手紙のやりとりは半年に1回でもいいくらいの気持ちでゆったりと構え、決して急がない。続けることが大事。
- 交流を持続するために、教師が生徒たちに声をかけていく。
- 語学力の問題ではない。お互いに母語を使ってもいい。大事なものは自分たちのことを表現することである。

研修会最終日に行われた作文の合同授業。講師も参加して、話題はどんどん広がった



2日目に開かれた交流会。「他己紹介」で一気に親しくなった

▲
教育について熱く語り合う



『国際文化フォーラム通信』第56号の記事を転載しました。

交流は言語の学習にも役立つ

1998年の研修会で、内蒙古のカンチカ第二中学の劉海峰先生と出会い、劉先生のクラスと交流を始めることになった。私は生徒に、マスコミが伝えるようなステレオタイプの中国文化ではなく、等身大の中国文化を学んでほしいと常々思っていた。そのためには、中国の同年代の生徒と交流するのがいちばんと考えていたからだ。それに私自身、中国の最新情報を教えてくれる友人がほしいと思っていた。

友好クラス交流は、まず文通から始まった。文通を始める前は、続くのかどうか不安だった。文通に対する中国の高校生の熱意と期待に対し、私の生徒たちはさほど積極的でなかったからだ。しかし、実際に中国の生徒たちから返事が届くと、当初あまり乗り気でなかった生徒も次第に興味を示した。毎年卒業時に、中国語の授業の感想を書いてもらっているが、文通に取り組んだ生徒たちのほとんどが「楽しかった」という感想を残した。また、何人かの生徒は卒業後も個人的に文通を続けてい

ることを、学校に遊びにきた時に話してくれた。

交流を始めてから、私は2回カンチカを訪れた。交流している生徒に私の生徒から預かったアルバムや教科書、CDを渡して話をした。日本の高校生の話を始めると、カンチカ第二中学の生徒の目が輝いた。日本の生徒も中国の生徒も、文通を通じて、自分が学んでいる言語を話す同世代の高校生に興味・関心を持ち、それが言語の学習にも役に立つ、ということを実感した。

その後、カンチカ第二中学の劉先生は広東省中山市の中学へ移り、私も異動し、今は中国語を教えていない。そのため、友好クラス交流はしばらく休んでいる。しかし、友好クラス交流のいいところは、教師同士にやる気さえあれば、いつでも始められるところだ。もう少し落ち着いたら、劉先生やカンチカ第二中学のほかの先生たちに手紙を書き、友好クラス交流を再開しようと思う。

内山修一(東海大学甲府高等学校)

相手を知ることの大切さを学んだ

1998年に国際文化フォーラムが紹介してくれた山梨県立塩山高校(当時)の内山修一先生と友好クラス交流を始めた。その翌年、内山先生がカンチカを訪ねてくれた。学校も地方政府も心をこめて内山先生をもてなした。日本からのお客さまを迎えるのは初めてのことで、どう振る舞ったらいいのかよく分からず、モンゴル族のやり方でお酒を勧めた。飲み干しては勧め、また盃を空けて勧めているうちに、とうとう内山先生は酔いっふれてしまった。このこと自体は些細なことだったが、私に大事なことを教えてくれた。日本人たちと交流することによって、相手の習慣を知り、心と心の理解を図ることが重要であると痛感したのだ。それ以来、日本人と交流をするときは、できるだけ相手の習慣を理解し、尊重するよう心がけるようになった。

内山先生は、2000年に中国語を学習している生徒たちと一緒に、再びカンチカ第二中学を訪れてくれた。生徒同士の交流の目的は、お互いの文化の共通点と相違点を体験させることだった。日本の生徒はカンチカに滞在した3日間のうちの一晩、学校の宿舎に泊まった。教師がいるときは、優等生的な交流をした生徒たちだったが、あとで聞くと、教師がいなくなっから大いに盛り上がったようだ。日本の生徒も中国の生徒も同じなのと思

った。

文通についての感想の中で「日本の生徒と中国の生徒は、同じところもあれば違うところもある。でも、同じところが多いと思う」と書いた生徒が多くいた。先進国である日本の高校生は高飛車で、発展途上国である中国の高校生を軽蔑しているのではないかという生徒たちの疑いは、交流によって消えていった。こうした気持ちの変化が、ますます日本の生徒との交流を促進させていった。筆不精な日本人の生徒は、交流を続けるために帰国後コンピュータを買ってメール交換を始めたと、メールで私に教えてくれた。インターネットカフェを利用することで、手紙からメールに切り替える中国の生徒も増えている。メールだとやりとりの回数が多い分、効果が大きく、「さらに日本語に興味を持つようになった」という生徒もいる。

友好クラスの目的は「交流を促進し、誤解や偏見をなくし、本音で付き合えるように、心を通わせられるように、確かな友情で結ばれるようにする」ことだが、私が取り組んできた交流もその目的に近づいたように思う。

劉海峰(小欖実験高級中学)
(『国際文化フォーラム通信』第56号の記事を抜粋、編集しました)

第7回(2002年)研修会日程表

日時	午前	昼食	午後	夕食	備考	
8/1 (木)	講師・スタッフ会場入り				日本派遣講師と 中国在住講師の 初顔合わせ	
8/2 (金)	10:00~12:00 講師オリエンテーション1 (研修日程・運営方針・施設確認)		14:00~16:00 講師オリエンテーション2 (研修生のレベル・講義方針確認)			
8/3 (土)	10:00~12:00 講師オリエンテーション3: 講義方針確認 事務局: 研修生対応		14:00~16:00 講義準備: 講義別グループ作業 事務局: 研修生対応		研修生会場入り	
8/4 (日)	8:30~9:30 クラス分けテスト	9:40~12:00 インタビュー/朗読録音	14:00~14:45 採点・クラス分け	15:00~15:45 研修生説明会	16:00~17:00 開講式・記念撮影	17:30~19:30 交流宴
8/5 (月)	8:30~12:00 授 業	12:00 13:00 食 堂	14:00~15:40 授 業	16:00~17:00 発音クリニック	17:30 18:30 食 堂	交流宴には、講師、 スタッフ、研修生、 関係者参加
8/6 (火)	8:30~12:00 授 業		14:00~15:40 授 業	16:00~17:00 発音クリニック		発音クリニックは、 講師10名が研修生 を2名ずつ担当
8/7 (水)	8:30~12:00 授 業		14:00~15:40 授 業	16:00~17:00 発音クリニック		発音クリニックは、 講師10名が研修生 を2名ずつ担当
8/8 (木)	8:30~12:00 授 業		14:00~15:40 授 業	16:00~17:00 発音クリニック		発音クリニックは、 講師10名が研修生 を2名ずつ担当
8/9 (金)	8:30~12:00 授 業		14:00~15:40 授 業	16:00~17:00 総合活動(日本の歌)		
8/10 (土)	休息日(終日自由行動) (日本の「高等学校中国語教師研修会」の研修生・講師会場入り)					
8/11 (日)	8:30~12:00 授 業	12:00 13:00 食 堂	14:00~15:40 授 業	16:00~17:00 日中研修生交流	17:30 18:30 食 堂	日中研修生交流で、 日中研修生のペアが 「他己紹介」を行う
8/12 (月)	8:30~12:00 授 業		14:00~15:40 授 業	16:00~17:00 総合活動(ビデオ鑑賞)		
8/13 (火)	8:30~12:00 授 業		14:00~15:40 授 業	16:00~17:00 総合活動(情報交流)		
8/14 (水)	8:30~12:00 授 業		14:00~15:40 授 業	16:00~17:00 茶話会		茶話会には日中 研修生、講師、 スタッフ参加
8/15 (木)	8:30~12:00 授 業		14:00~15:40 授 業	16:00~17:00 日中研修生合同閉会式		17:30~19:30 慰労宴
8/16 (金)	日中研修生、日本語教師研修会主任・ 副主任講師、日中関係者休息、その他 講師解散		日中教師セミナー 日中研修生、日本語教師研修会主任・副主任講師、日中関係者参加			
8/17 (土)	終日: 日中教師セミナー 日中研修生、日本語教師研修会主任・副主任講師、日中関係者など参加					
8/18 (日)	終日: 日中関係者会合(研修生解散) 日本語教師研修会主任・副主任講師、日中関係者参加					
8/19 (月)	関係者全員解散					

注1: 研修中の昼食は、講師と研修生が同じ食堂でテーブルを共にしながら、自由に歓談したり、交流したりする大切な時間。
注2: 開催年によって朝の開始時間、昼休みの長さが若干異なる。研修生の要望により、朝の開始時間を早め、昼休みを長くするように調整した。



一日観光で中日友誼園遊覧（第4回研修会、黒龍江）



一日観光で松花江を船で遊覧。デッキの上がにわかダンス会場に（第3回研修会）



課外活動でビデオを観る研修生（第3回研修会）

③課外の過ごし方

課外の時間は、個人面談や発音クリニック、交流会、茶話会などに利用したほか、研修生の要望に応じて、ビデオを鑑賞したり、日本の歌を歌ったりした。ビデオでは「日本人のライフスタイル」シリーズや、『しこふんじやった』『釣りバカ日誌』『ラジオ』などの映画、『となりのトトロ』や『魔女の宅急便』などのアニメを上映し、必要に応じて解説した。また、中国語でカバーされ、研修生によく知られている歌や中高校の教科書に掲載されている歌などをいっしょに歌ったりした。特に手話付きの「切手のない贈りもの」は、最初の歓迎宴で講師が披露し、最後の送別宴で研修生と講師が共に歌って心をつなげる定番の歌であった。

午後5時以降は自由時間で、研修生は誘い合って町に繰り出し、買い物をしたり、飲みに行ったり、カラオケに行ったりしたようである。同じ省内であっても普段行き来のない研修生たちにとって、研修会はまたとない交流の場であったようだ。また、自分の住んでいる地域では手に入れない日本語の教材や辞書、日本語関連のビデオやCDを探しに書店に行く熱心な研修生もいた。

一方、講師たちにとって、課外の時間はミーティングや授業準備に追われる時間であった。そうした中で研修生から誘いを受けたり、中国側関係者から接待されたりすると、心身ともに負担を感じるが多かったようである。接待は、日中の文化の違い（というより都会と地方の違いというべきかもしれないが）から、調整が難しい問題でもあった。最終的には、講師の負担を考慮し、主任講師に出席していただき、若手講師には授業の準備に専念してもらうようにした。

研修会中盤には、休息日を1日設けた。開催年または会場によっては、市内一日観光のプログラムを実施することもあった。講師を含めた日本側関係者に当地の名所を見せたい、地方から参加した教師たちに都会のスポットを体験してもらいたいという中国側主催者の配慮によるプログラムであった。この日は、講師、研修生、スタッフ共に、前半の疲れを癒し、後半に向けて充電する大切な日であったし、交流できる楽しい日であった。この交流が強く印象に残ったという研修生も多い。

2週間足らずの研修会を1年間かけて準備

研修会の実施に不可欠な要素としては、企画運営主体、資金、講師、カリキュラム、教材の五つが挙げられる。日中双方の企画運営主体は、研修会実施の意義目的を共有し、綿密な協力体制が求められるため、調整には手間と時間がかかる。資金は複数団体から調達する必要上、しかるべき交渉と手続きを行わなければならない。講師チームは研修会の成否を決める核であるため、専門性だけでなく、意欲や人柄はもちろんのこと、チームメンバー間のバランスや相性も考慮する必要がある。カリキュラムは、中国の教育制度の枠組みや現場教師の実情やニーズに沿ったもの

であることが大前提であるが、日中共催者間において互いの事業理念のすり合わせも必要になってくる。教材は最大の時間と労力を必要とする要素であろう。第1回研修会後に着手した教材制作は、毎年改訂や新規作成を繰り返し、研修会とともに成長し、最終回を前によく完成した。また、研修生に寄贈するために、優れた市販教材を収集し、無事会場に届ける必要があった。それも、お金をかけずに、である。2週間足らずの研修会は、毎回このような長い準備の過程を辿り、多くの方や機関に支えられて実現したのである(44頁参照)。(TJF)

作業日程表(1998年9月～1999年9月)

		1998年						1999年							
作業項目	分担	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	
企画・実施・報告	TJF		TJF・学院会		実施要綱案	覚書案作成	覚書署名		実施要綱確定			7月	礼状送付	事業・会計報告書作成	
	学院・教職員		TJF・学院会(中国)		実施要綱案確認・修正	覚書案確認・修正									助成金会計報告書作成
協力機関対応	TJF		事業・会計報告書提出	共催依頼	基金助成申請書提出	協賛・後援依頼	三菱助成申請書提出	教育庁後援依頼							
	学院・教職員										開・閉講式来賓依頼				
研修生選定	TJF				選抜基準作成	申請書作成	参加候補確認								
	学院・教職員				拠点校リスト作成	候補校決定/申請書配布	参加者決定/決定通知送付								
講師コーディネート	TJF		講師検討	主任講師依頼	主任講師決定	日本人講師依頼			各講師に講義資料送付		主任講師事前合		講師報告まとめ		
	学院・教職員					中国人講師依頼									
カリキュラム・講義資料作成	TJF				カリキュラム案作成	カリキュラム決定	素材・資料手配	講義資料作成	講義資料完成			7/25～			
	学院・教職員					カリキュラム案確認・修正						8/6			
教材制作	TJF	改訂方針検討	執筆者・監修者依頼	執筆者・監修者決定	原稿執筆	寄贈教材リスト作成	決定稿/監修者チェック	原稿修正作業	完成稿/編集作業	レイアウト/印刷	納品、空輸	7月 8/6 第4回 研修会 実施		2000年度改訂方針検討	
	学院・教職員						寄贈依頼	寄贈教材収集	通関書類作成/梱包	空輸	教材受取・保管				
交流コーディネート	TJF						在中団体協力打診		交流会企画案作成	案内状発送	出席者確定				
	学院・教職員														
友好クラスコーディネート	TJF					日本側希望教師募集	日本側候補者決定			日中学校資料収集・情報交換	マッチングセッション				
	学院・教職員								研修生への打診						
その他手配	TJF						航空券仮予約		航空券仮予約	航空券手配	ビザ・保険申請/講義謝金等振込み				
	学院・教職員								プレスリリース	講師・関係者宿泊手配	講師・関係者研修生送迎手配				

※協力機関の詳細は8、9頁参照。

第II章

研修会の成果をさぐる

—アンケート調査を中心に—



1. アンケート調査の概要

第1～7回の研修会最終日には毎年度、研修生からアンケートをとり、研修会への満足度や不満点などを把握してきた。それらの結果を、次年度の研修会カリキュラムやプログラム編成に反映させるためであった。今回の調査は以下のことを調べるために実施した。

- ・ 研修会が行われた期間に現場のニーズに変化はあったのか。
- ・ 研修生のニーズを前提として設定された研修目標は、どの程度達成されたのか。
- ・ 研修生は、研修会に対してどのような総体的な評価をしているか。
- ・ 研修生は、研修会で得たことを研修会後に生かしているか。

さらに、この調査から収集された研修生の生の声を踏まえて、教師研修のあり方について改めて考えたい。

(1) 調査の実施概要

調査期間：2003年8～12月

調査対象：中国中高校日本語教師研修会(1996～2002年)に参加した研修生523名のうち、連絡先が確認できる者

調査方法：郵送による調査票(130～133頁参照)の配付と回収

調査票数：447

回収数：302

調査票の送付数および回収数

	参加者数	送付数	回収数
普通中学教師	465	397	274
外国語学校教師	18	12	8
小学校教師	11	11	7
教研員	29	27	13
合計	523	447	302

(2) 有効回答の回収率

回収した全回答(302)のうち、外国語学校教師(8)、小学校教師(7)、教研員(13)の計28を除いた274を有効回答とした。これは、研修会の対象が普通中学の教師であったことから、より正確な調査結果を得るためである。

さらに、開催年別と教師歴別集計では、重複参加者による回答14を除いた260を有効回答とした。これは、重複参加の場合、どの年度の研修会についての回答なのかが明確でないためである。

有効回答の回収率は次頁のとおりである。なお、教師歴の年数は、研修会参加時のものである。

①全体集計の有効回答(274)

	送付数	回収数	回収率(%)
内蒙古自治区	41	29	70.7
吉林省	123	83	67.5
黒龍江省	104	57	54.8
遼寧省	128	104	81.3
山東省	1	1	100.0
合計	397	274	69.0

②開催年別集計の有効回答(260)

	送付数	回収数	回収率(%)
1996	15	9	60.0
1997	31	25	80.6
1998	24	11	45.8
1999	70	49	70.0
2000	86	60	69.8
2001	86	58	67.4
2002	68	48	70.6
合計	380	260	68.4

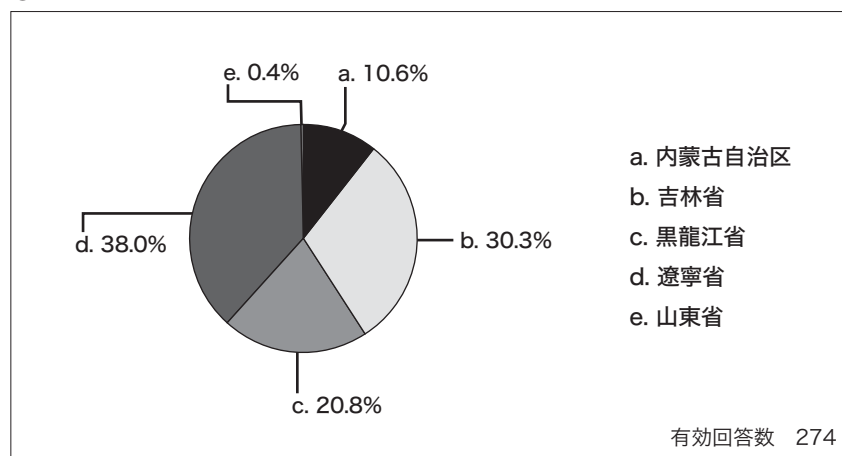
(3) 有効回答の内訳

有効回答の地域別、開催年別、教師歴別の内訳は以下のとおりである。

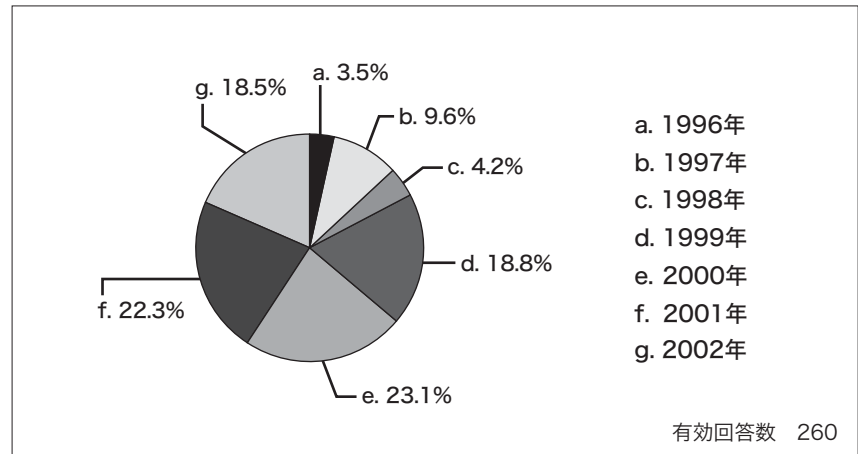
地域は、内蒙古自治区、吉林省、黒龍江省、遼寧省、山東省に分けた。教師歴は、1～5年、6～10年、11～15年、16～20年、21年以上に分けた。

なお、地域別は、重複参加を含め、274を有効回答とした。開催年別、教師歴別は、前述のとおり、重複参加者の回答を除いた260を有効回答とした。

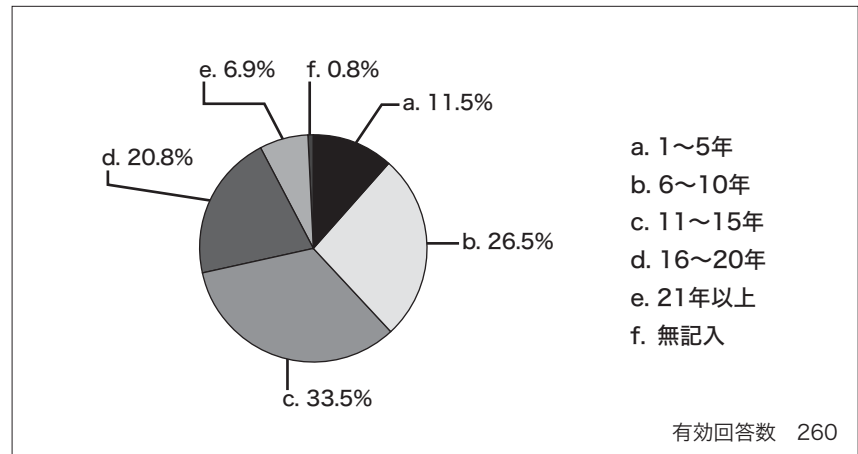
①地域別



②開催年別



③教師歴別



(4) 調査項目

調査票は15の質問から構成されており、回答方式としてQ2、Q8～10、Q13、Q15は自由記述式、その他は選択式(一部記述式)をとった。

本調査で質問した各項目の内容は次のとおりである(詳細は130～133頁参照)。

- ① 研修会に参加した当時、どの程度日本人との接触があったか(Q1)
- ② 研修会に何を期待していたか(Q2)
- ③ 研修会全体の評価(Q3)ならびに良かったことと良くなかったこと(Q4、Q5)
- ④ 研修会で得たことをその後の授業に生かしているか、生かしていないか。生かしている場合は何を生かしているか、生かしていない場合はその理由は何か(Q6～10)
- ⑤ 研修会で得た教材は活用しているか(Q11)
- ⑥ 研修会で知り合った他校の教師とのネットワークづくりはできたか(Q12)、今後ネットワークを望むか(Q14)
- ⑦ 研修会で意識は変わったか(Q13、Q15)

⑧ 「課程標準」を読んだことがあるか(Q16)

なお、調査票を作成するにあたって、2001年2～3月に国際交流基金の中等日本語教師招聘プログラムで来日中だった、本研修会の研修生14名に事前に予備調査を実施し、質問内容や構成、形式を調整した。

(5) 調査結果の集計

① Q2「研修会に何を期待していましたか」という質問に対する回答は記述式としたが、その回答内容を次のように分類、集計した。

日本語力、教授法、交流、日本文化事情、その他

② Q4「研修会に参加して良かったことは何ですか」の回答はa～kの選択式としたが、a～cの内容については次のような記述式とした。

- a 「日本語力が向上した。具体的に教えてください」
- b 「いろいろな教授法を学ぶことができた。例えばどんなことか、具体的に書いてください」
- c 「日本人講師の教え方や姿勢から学ぶことがあった。例えばどんなことか、具体的に書いてください」

これらの記述回答については、それぞれ次のように分類、集計した。

- a：音声、会話力、聴解力、作文力、読解力、文法、その他
- b：音声、会話、聴解、作文、文法、授業の組み立て、読解、ロールプレイ・ゲームなどの教室活動、写真・カードなどの教具の使い方
- c：授業中の態度(授業中にやさしい口調で言ったり、ユーモアを交えたりするなどして教室のムードをよくし、生徒をほめるような教師の態度)、授業の形態(一方的な講義ではなく、生徒の参加を促し、多様な教室活動を取り入れるなど)、教師の意識(教師としての責任感をもつなど)

次節では、本調査の結果を踏まえて主に、「研修生のニーズに変化はあったか」「研修会に参加してどうだったか」「研修会で得たことは活かされているか」の3点から研修成果を検証したい。

なお、分析にあたっては、全体集計のほか、開催年別集計と教師歴別集計を必要に応じて使った。

「研修生のニーズに変化はあったか」「研修会に参加してどうだったか」については、全体集計のほかに開催年別集計を使った。これは、研修生のニーズの変化を捉えると同時に、成果とカリキュラムの関連を見るためである。

「研修会で得たことは活かされているか」については、全体集計のほかに教師歴別集計を使った。これは、研修会で得たことを授業で活かしているかどうかは、日本語教師としての経歴や経験の差が関係していると考えたからである。

2. 研修生のニーズに変化はあったか

研修会が行われた7年で、中国の中等教育レベルの日本語教育は大きく変わった。1996年の「教学大綱」改訂とそれに準拠した新しい教科書の完成、大学入試の内容の変化など、文法中心からコミュニケーション志向、そして素質教育へと日本語教育のめざすものは移行してきた。研修会でも、そのような変化をカリキュラムに反映させてきた。

では、日本語教育のこうした流れは研修生の意識、ひいては研修生のニーズに影響をもたらしたのだろうか。そのことをさぐるため、研修会に期待していたことを改めて聞いた。

(1) 研修生の期待：圧倒的に多い「日本語力の向上」

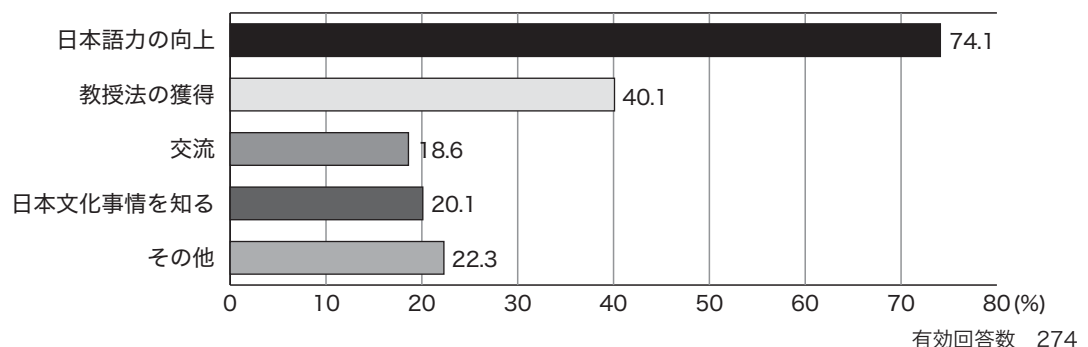
■全体集計

本調査では、「研修会に何を期待したか」(Q2)について自由記述で回答してもらった。その回答を「日本語力の向上」「教授法の獲得」「交流」「日本文化事情を知る」「その他」に分類したのが表1である。

その結果、「日本語力の向上」を期待した研修生が74.1%と圧倒的に多く、その次が「教授法の獲得」で、40.1%となっている。次いで、「日本文化事情を知る」「交流」が続く。「日本語力の向上」の割合が次の「教授法の獲得」を大きく引き離していることが、研修生のニーズを端的に表している。

その他には、「教材を得る」「日ごろの疑問を解決する」「自分の日本語力を検証する」などが含まれている。これらの回答からは、適切な教材があまりない、身近に情報交換できる相手がない、日本人と交流する機会がないなどの状況の一端が窺える。

表1：Q2「研修会に何を期待していましたか」(全体)



■開催年別集計

これを開催年別に上位3位を見ると(表2)、どの年も「日本語力の向上」を期待した研修生が多いことと、「教授法の獲得」を期待した研修生が年々増えていることが分かる。

表2：Q2「研修会に何を期待していましたか」（開催年別上位3位）

開催年	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002
第1位	日本語力 (77.8)	日本語力 (56.0)	日本語力 (72.7)	日本語力 (77.6)	日本語力 (73.3)	日本語力 (82.5)	日本語力 (66.7)
第2位	教授法 (33.3)	教授法 (24.0)	日本文化事情 (54.5)	教授法 (36.7)	教授法 (45.0)	教授法 (40.4)	教授法 (50.0)
第3位	交流 (11.1) 日本文化事情 (11.1)	交流 (16.0)	教授法 (36.7)	日本文化事情 (26.5)	交流 (23.3)	交流 (19.3) 日本文化事情 (19.3)	交流 (16.7) 日本文化事情 (16.7)

()内は、各項目の全体に対する割合(%)

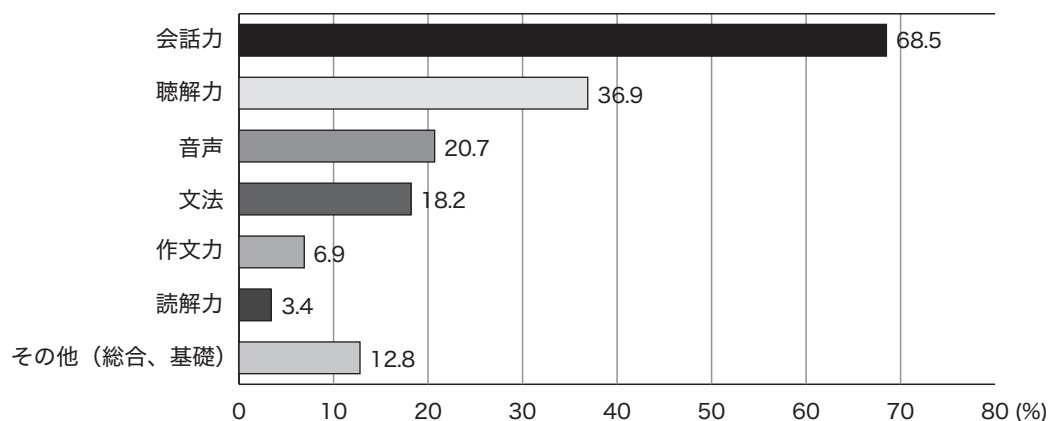
有効回答数 1996年：9、1997年：25、1998年：11、1999年：49、2000年：60、2001年：58、2002年：48

(2) 期待した日本語力の内訳：7割近くが「会話力」の向上を期待

■全体集計

研修生たちがそのレベルアップに高い期待を寄せていた日本語力とは具体的にどんなものであったか。Q2で「日本語力の向上」に分類した回答内容をさらに技能別に分類してみた(表3)。「会話力」「聴解力」「音声」「文法」の順に回答が多く、特に「会話力」の向上を期待する研修生が圧倒的で7割近い。文法では、特に「類義表現の使い分けについて知りたい」と答えた人が多い。なお、どの技能を高めたいかを具体的に書かず、ただ「日本語力の向上」と書いた回答は「その他」に分類した。

表3：研修生が期待した日本語力の内訳(全体)



有効回答数 203

■開催年別集計

これを開催年別に上位3位に限ってまとめたのが表4である。どの年度も「会話力」の向上を望む研修生が圧倒的に多いことが分かる。その次に期待する人が多かったのは「聴解力」で、これも年々増加傾向を示し、大学入試に聴解問題が導入される2000年がピークになっている。研修

II. 研修会の成果をさぐる

会当初より「会話力」「聴解力」などへの期待が大きかったが、年を追うにつれその度合いがより強くなったといえるだろう。文法は初回は2位であったが、その後3位に落ち、2001年以降は4位以下に転落している。逆に音声は2000年から浮上してきている。

表4：期待した日本語力の内訳（開催年別上位3位）

開催年	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002
第1位	会話力 (57.1)	会話力 (71.4)	会話力 (75.0)	会話力 (68.4)	会話力 (68.4)	会話力 (64.6)	会話力 (68.8)
第2位	文法 (28.6)	聴解力 (35.7)	聴解力 (25.0)	聴解力 (39.5)	聴解力 (45.5)	聴解力 (37.5)	聴解力 (28.1)
第3位	聴解力 (14.3)	文法 (28.6) 音声 (28.6)	文法 (25.0)	文法 (13.2)	文法 (20.5) 音声 (20.5)	音声 (27.1)	音声 (25.0)

()内は、Q2で「日本語力の向上」と回答した人の全体に占める割合(%)
有効回答数 1996年：7、1997年：14、1998年：8、1999年：38、2000年：44、2001年：48、2002年：32

3. 研修会に参加してどうだったか

研修生が研修会で得たことは何なのか、得られなかったことは何なのかを聞くことで、日本語力の向上、教授法の獲得、ネットワークの形成という研修会の大きな目的は達成されたのかについて検証した。また、それら以外の成果はあったのかどうかについてもさぐってみた。

(1) 総体評価：全体的に好評

「研修会に参加してどうだったか」(Q3)という質問に対する回答結果を見てみよう。「どちらともいえない」「良くなかった」と回答した研修生はおらず、「まあまあ良かった」「大変良かった」に回答が集中した(表5)。「大変良かった」が全体で7割を超えており、開催年別(表6)に見ても、全体的に好評だったことが分かる。

表5：Q3「研修会に参加してどうでしたか」(全体)

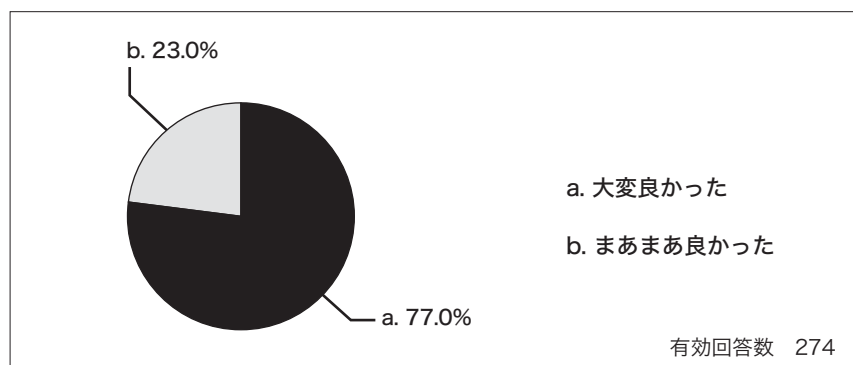
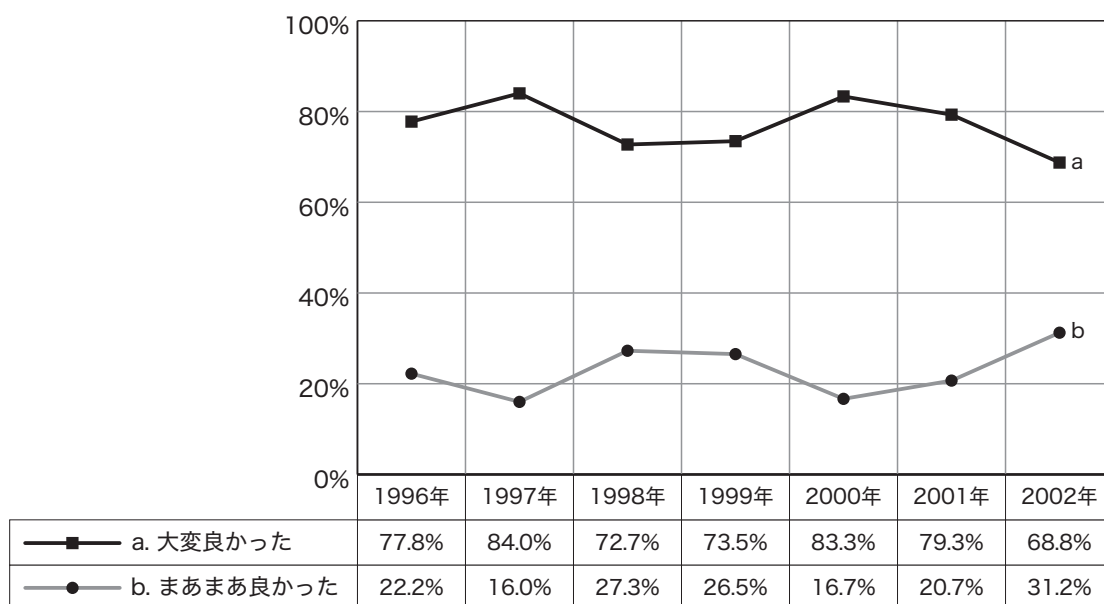


表6：Q3「研修会に参加してどうでしたか」（開催年別）



有効回答数 260

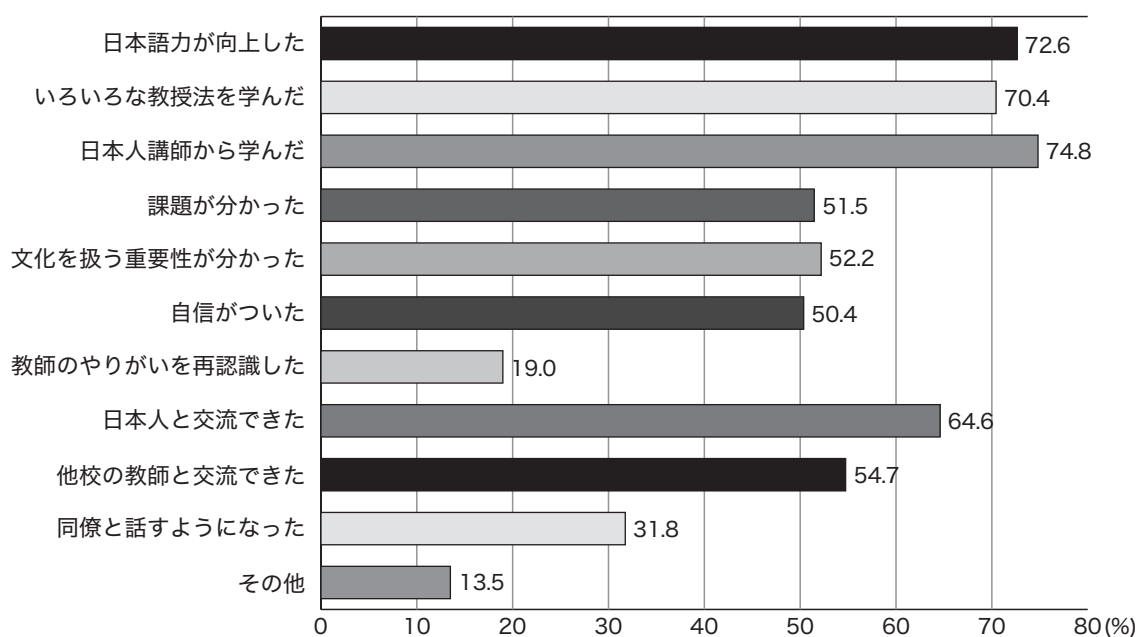
(2) 参加して良かったこと：日本語や教授法だけでなく教師の姿勢も学んだ

次に、「研修会に参加して良かったことは何ですか」（Q4）という質問について選択と自由記述で回答してもらった結果（表7）を見てみよう。

■全体集計

良かった点としては「日本人講師の教え方や姿勢から学ぶことがあった」

表7：Q4「研修会に参加して良かったことは何ですか」（全体）



有効回答数 274

II. 研修会の成果をさぐる

がもっとも多く、次に「日本語力が向上した」「いろいろな教授法を学ぶことができた」が並ぶ。このように、教師としての資質や能力に関する回答が上位3位を占め、いずれも7割を超えている。

次に多いのは、「日本人と交流できた」「他校の教師と交流できた」という回答であった。さらに「日本語教育のなかで、文化を扱う重要性が分かった」「日本語力、または日本語教師としての課題が分かった」「日本語を話す自信がついた」などの項目を選択した研修生が約半数いた。

また、約3割の人が「研修会后、日本語の教え方について研究したり、同僚と意見を交換したりするようになった」という項目を選択していることは注目に値する。「その他」では「貴重な教材をもらったこと」「疑問が解決したこと」「日本文化事情について知ったこと」などを良かった点として挙げている。

■開催年別集計

開催年別の上位5位(表8)を見ると、「いろいろな教授法を学ぶことができた」は、年を追うごとに数が増え、順位も上げている。それに対して「日本語力が向上した」は、どの年度も6割以上だが、順位は落ちている。研修会前の期待を見ると(表2、51頁参照)、どの年も「日本語力」が1位であるが、実際研修会に参加してみて、期待以上に「教授法」を獲得した人が年を追うごとに増えているといえる。

また、「日本人講師の教え方や姿勢から学ぶことがあった」という回答も年を追うごとに増えている。これは、21世紀の教育改革で推し進めている「素質教育」の理念が少しずつ現場に浸透し、生徒の主体性と、生徒と

表8：Q4「研修会に参加して良かったことは何ですか」(開催年別上位5位)

開催年	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002
第1位	日本語力が向上した(77.8)	日本語力が向上した(76.0)	日本人と交流できた(90.9)	日本語力が向上した(85.7)	日本人講師から学んだ(80.0)	日本人講師から学んだ(81.0)	いろいろな教授法を学んだ(75.0)
第2位	文化を扱う重要性が分かった(66.7)	文化を扱う重要性が分かった(64.0)	日本語力が向上した(72.7)	日本人講師から学んだ(69.4)	いろいろな教授法を学んだ(75.0)	いろいろな教授法を学んだ(70.7)	日本人講師から学んだ(72.9)
第3位	日本人と交流できた(66.7)	日本人講師から学んだ(64.0)	日本人講師から学んだ(72.7)	いろいろな教授法を学んだ(67.3)	日本語力が向上した(73.3)	日本語力が向上した(69.0)	文化を扱う重要性が分かった(64.6)
第4位	いろいろな教授法を学んだ(55.6)	課題が分かった(56.0)	いろいろな教授法を学んだ(63.6)	日本人と交流できた(63.3)	日本人と交流できた(70.0)	日本人と交流できた(63.8)	日本語力が向上した(62.5)
第5位	日本人講師から学んだ(55.6) 課題が分かった(55.6) 他校の教師と交流できた(55.6)	いろいろな教授法を学んだ(52.0) 自信がついた(52.0)	文化を扱う重要性が分かった(63.6)	自信がついた(61.2)	他校の教師と交流できた(58.3)	他校の教師と交流できた(63.8)	日本人と交流できた(60.4)

()内は、各項目の、Q4の全回答に占める割合(%)

有効回答数 1996年：9、1997年：25、1998年：11、1999年：49、2000年：60、2001年：58、2002年：48

教師間の協働を重視する流れが、講師の教え方や授業運び、生徒や日本語教育に対する態度・姿勢と共鳴した、といえるだろう。

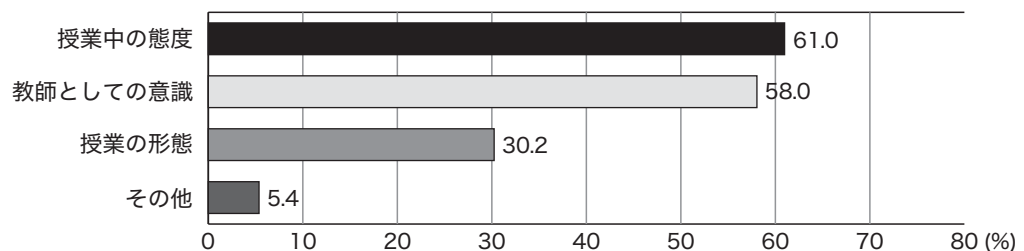
1998年はほかの年と異なり、「日本人との交流」が1位になっている(表8)。この年は日本からの特別講師、高校中国語講師との交流に加え、開催地であるハルビンの日系企業の駐在員などとの交流が印象に残った研修生が多かったようである。また、「文化を扱う重要性が分かった」に関する回答で、合同開催だった最初の3回と最終回の数値が高いのは、文化理解に関する特別講義やTJFの写真教材を使った文化理解ワークショップ、および課外で行った文化体験プログラム(風呂敷の使い方体験など)の実施と関連していると思われる。「文化理解」や「交流」に対する研修生の期待はおしなべて10～20%台で高くはなかったが、研修会後には70%台に上がっていることから、カリキュラムやプログラムに意図的に組み込んだことの成果が出たといえる。

次に、7回の研修会を通じて、「参加して良かったこと」(表7)の上位3位の内訳を見てみよう。

①「日本人講師から学んだ」の内訳

研修成果としてトップに挙げられている「日本人講師の教え方や姿勢から学ぶことがあった」とは具体的にどんなことか。自由記述を分類(表9)すると、「授業中の態度(微笑み、優しい口調、ほめる、ユーモア、辛抱強く対応など)」「教師としての意識(十分な授業準備、時間厳守、責任感や誇り、まじめで一生懸命など)」「授業の形態(多様な教え方、生徒参加型、生徒主体)」に大別することができる。教室内外における講師の意識や姿勢、立ち居振る舞いすべてから研修生は学びとるものがあつた、ということである。

表9：Q4で「日本人講師の教え方や姿勢から学ぶことがあった」とした回答の内訳



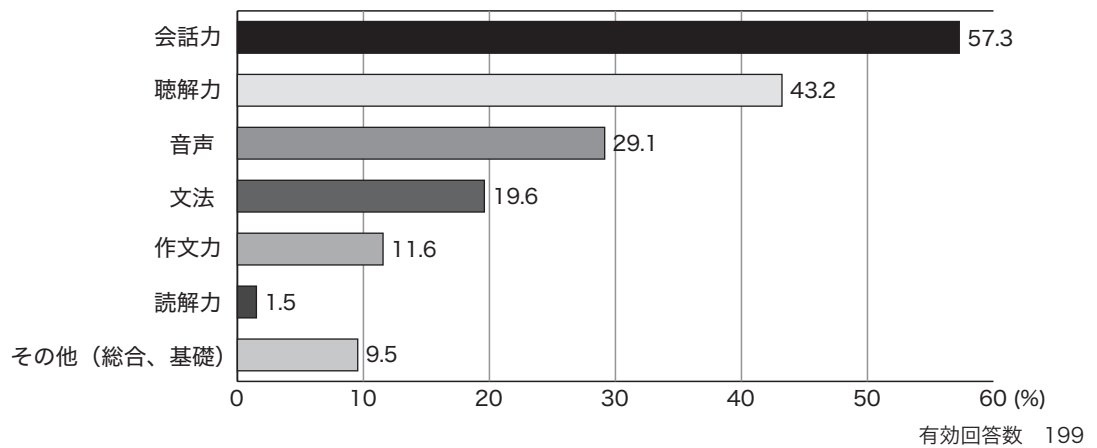
有効回答数 205

②「日本語力が向上した」の内訳

■全体集計

「日本語力が向上した」を選択した研修生の指す「日本語力」の内訳は何か。自由記述を分類(表10)してみると、「会話力」「聴解力」「音声」が上位3位を占め、次に「文法」が続く。この結果は、2節の「研修生の期待」(表3)と一致している。

表 10：Q4で「日本語力が向上した」とした回答の内訳



■開催年別集計

開催年別の上位3位(表11)を見ると、「会話力」「聴解力」の順に高くなっており、「文法」と「音声」はそれに続くが、2000年以降、「文法」が上位3位から転落している。

表 11：Q4で「日本語力が向上した」とした回答の内訳 (開催年別上位3位)

開催年	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002
第1位	会話力 (57.1)	会話力 (78.9)	会話力 (50.0)	会話力 (57.1)	会話力 (56.8)	聴解力 (55.0)	会話力 (56.7)
第2位	聴解力 (28.6) 文法 (28.6)	聴解力 (47.4)	聴解力 (37.5)	聴解力 (42.9)	聴解力 (43.2)	会話力 (50.0)	音声 (33.3)
第3位		音声 (26.3)	音声 (25.0) 文法 (25.0)	文法 (28.6)	音声 (40.9)	音声 (20.0)	聴解力 (26.7)

()内は、Q4で「日本語力が向上した」とした全回答に占める割合 (%)
有効回答数 1996年：7、1997年：19、1998年：8、1999年：42、2000年：44、2001年：40、2002年：30

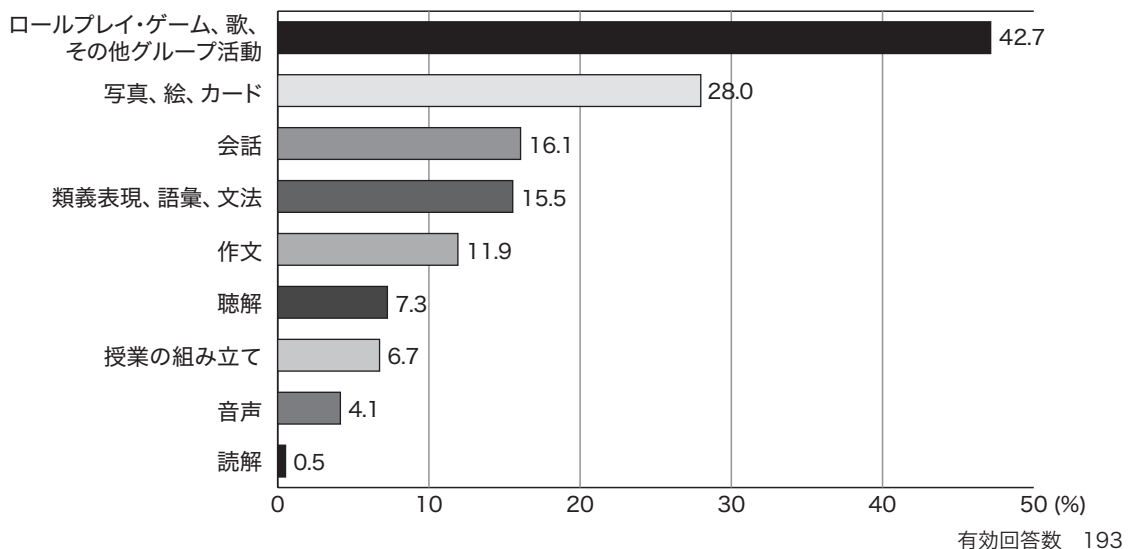
研修生の声——「日本人講師から学んだ」(Q4の記述式回答より)

- 微笑を絶やさず、穏やかで身近、まじめで責任感があります。教授法は多様で、理解しやすい。日本人講師のように生徒に日本語を教えたなら、生徒たちはきっと興味を示すと思います。
- 日本人講師のまじめな態度と分かりやすい教え方に心を打たれ、私も同じようにしようと思いました。
- 授業中、和やかで楽しい雰囲気をつくって、私たちの積極的な発言を鼓舞し、自信をもたせてくれました。また、私たちの人格を尊重し、終始笑みをうかべ、対等な立場に立っていました。
- 授業中、態度が和やかで自然だったのが印象深く残っています。私も真似していますが、効果があります。
- コマの授業のために、苦勞を惜しまず準備をすること。授業では、生徒の興味をひく教授法を多様に使うこと。そして、教師は根気強さとユーモア、常に研究する態度が必要であることなどを学びました。
- 授業は、学習意欲を刺激するような形式をとり、生徒の積極性を十分に引き出すことが重要だと分かりました。さまざまな教室活動を取り入れたら、学習効果もありました。また、笑顔で授業をすることを学びました。以前はいつもこわばった顔で、厳粛に授業をしていたが、研修会で、生徒の立場になったことで、生徒の気持ちが体験できました。私は、笑顔で授業をする先生が大好きでした。

③「いろいろな教授法を学んだ」の内訳

Q4で「いろいろな教授法を学ぶことができた」を選択した研修生の指す「いろいろな教授法」の内訳は何か。自由記述を分類してみると、表12の結果となった。もっとも多いのは「ロールプレイ・ゲーム、歌、その他グループ活動」で、次に多いのは「写真、絵、カード」である。つまり、視覚教材や教具の活用方法やさまざまな教室活動の仕方が中心で、全体の7割を超えている。これらは、「教授法(教室活動、教材・教具)」と題する講義の中で扱ったものもあるが、技能別講義の中で講師が用いた教授法や、講義で行った教室活動から学んだようである。同様に、「会話」「文法」「聴解」「音声」「読解」の項目に関しても、「会話の教え方」「文法の教え方」「聴解の教え方」など教授法に特化した講義はなかったことから、研修生自身の日本語力向上を第一目的とした講義から、教授法を学んだようだ。つまり、研修生は講師の教え方を見て学んだことも多いといえるだろう。

表12：Q4で「いろいろな教授法を学ぶことができた」とした回答の内訳



(3) がっかりしたこと、辛かったこと:研修期間が短かった

■全体集計

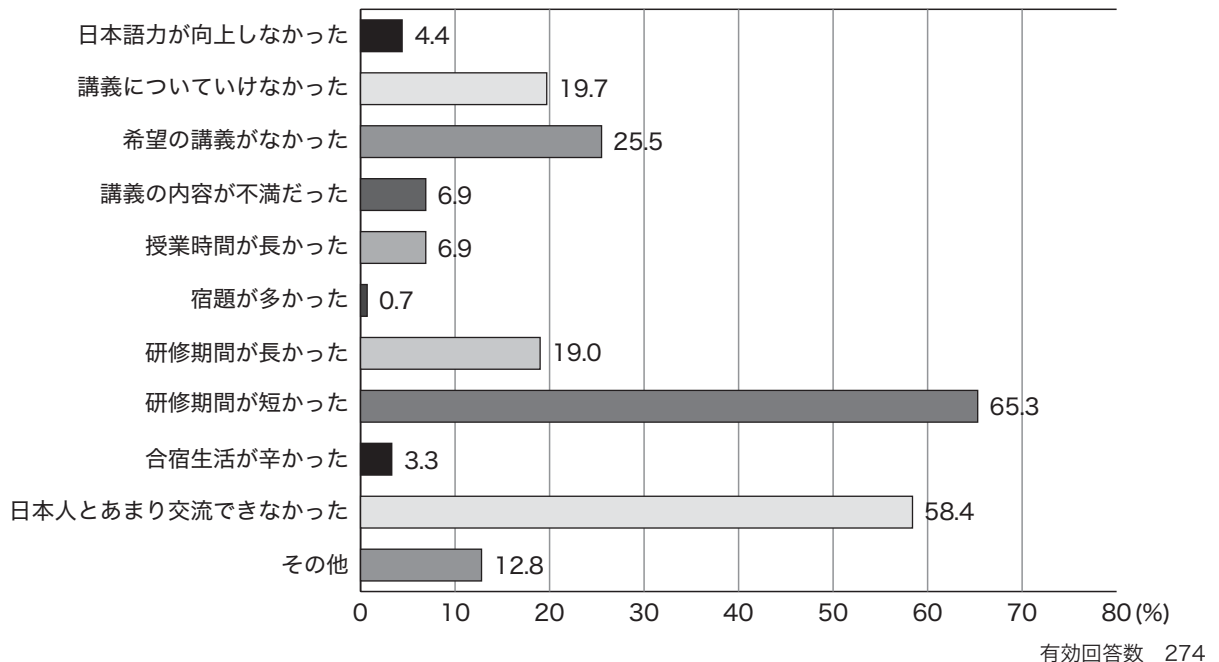
「研修会に参加してがっかりしたこと、辛かったことは何ですか」というQ5に対する回答結果(表13)で、最も多かったのは「研修期間が短かった」(65.3%)、次いで「日本人とあまり交流できなかった」(58.4%)である。次に多かった回答は、「希望の講義がなかった」(25.5%)、「講義についていけなかった」(19.7%)である。

「研修期間が短かった」という回答結果からは、研修生の研修に対する積極的な参加姿勢が窺える。しかし、研修会当初から積極的に臨んでいたわけではない。毎回研修会の最終日に行うアンケートや意見交換会での研修生の発言から、研修会参加当初はむしろ「2週間は長いな」とか、「2週間ではたいしたことが学べるはずがない」などと思っていた研修生が

少なくなかったようである。ところが、研修会が終わってみて、「こんなに勉強になるとは思わなかった」「毎年参加したい」と訴える研修生が多かった。一方、「研修期間が長かった」という回答も若干あった。これは、家庭や小さい子どもを持つ女性が多数を占めており、家を長く空けるのが難しいという事情を抱えている研修生も多かったことと関連しているだろう。

「日本人とあまり交流できなかった」という回答が6割近いが、(2)参加して良かったこと(表7、53頁参照)の中で「日本人と交流できた」が6割を超えていることから、ある程度交流に対するニーズは満たしている。つまり、「日本人とあまり交流できなかった」という不満は、「もっと交流したかった」という希望の表れと見ることもできよう。

表13：Q5「研修会に参加してがっかりしたこと、辛かったことは何ですか」(全体)



どんな講義を希望していたか

「希望の講義がなかった」と回答した研修生には、どんな講義を希望していたのか自由記述で回答してもらった。回答の中には「会話」「聴解」「類義表現の使い分け」「アクセント、音声」「作文指導法」などのように、カリキュラムに組み込まれていた講義も含まれている。これは、希望する講義のコマ数の少なさに対する不満だったと推測できる。また、ほとんどの年度で大学入試対策についての講義を聞きたかったという回答があり、関心の高さが窺えた。カリキュラムに組み込まれていなかった講義で、希望のあったものは、日本の中等教育の現状や教育制度の紹介、日本の中高校での外国語指導法、日本人講師による中国の生徒に対する教授法、などがあった。実際、研修会の会期中にも、「日本人講師が中国で使用されている実際の日本語教科書を使って、一コマ分または一課分の授業を最初から最後まで実演してほしい」という研修生の声が毎回あった。これについては、「日本人

講師の教え方＝模範的な教え方」という図式につながる恐れがあること、現場に合った教え方は現場の教師がもっともよく知っているのだから、現場教師の創意・工夫を引き出すような研修を行いたいという講師を含む主催者側の強い意向から、カリキュラムに組み入れることをあえて避けていたためである。

2002年の研修会に参加した教師からは「インターネットを活用した授業の仕方」を学びたかった、という回答があった。これは、中国の教育現場にもパソコンが普及しつつあるという時代の状況を反映している。

■開催年別集計

開催年別上位5位(表14)を見ると、「日本人とあまり交流できなかった」は、合同開催だった前3回に集中している。しかし、この3回は他の回に比べて日本人との交流プログラムが充実していた。これは「もっと交流したかった」「深く交流したかった」という不満だったかもしれない。

「講義についていけなかった」は、1996年がもっとも多く、その後減るが、毎年研修生の一定の割合を占めている。この問題については、第1回(1996年)の研修会後に解決すべき課題として捉え、研修会参加条件に「日本語による講義を理解できる聴解力を有すること」を加えるなどの対策を講じたが、結局最後まで完全に解決できなかった。

表14：Q5「研修会に参加してがっかりしたこと、辛かったことは何ですか」(開催年別上位5位)

開催年	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002
第1位	研修期間が短かった (77.8)	研修期間が短かった (72.0)	日本人とあまり交流できなかった (72.7)	研修期間が短かった (79.6)	研修期間が短かった (78.3)	研修期間が短かった (70.7)	研修期間が短かった (56.3)
第2位	日本人とあまり交流できなかった (77.8)	日本人とあまり交流できなかった (72.0)	研修期間が短かった (63.6)	日本人とあまり交流できなかった (61.2)	日本人とあまり交流できなかった (46.7)	日本人とあまり交流できなかった (62.1)	日本人とあまり交流できなかった (56.3)
第3位	講義についていけなかった (55.6)	希望の講義がなかった (20.0)	希望の講義がなかった (27.3)	希望の講義がなかった (28.6)	希望の講義がなかった (33.3)	講義についていけなかった (24.1)	希望の講義がなかった (29.2)
第4位	講義の時間が長かった (33.3)	講義についていけなかった (12.0)	講義についていけなかった (9.1)	講義の内容に不満 (12.2)	講義についていけなかった (21.7)	希望の講義がなかった (15.5)	講義についていけなかった (16.7)
第5位	希望の講義がなかった (22.2)	講義の時間が長かった (8.0)	日本語力が向上しなかった (9.1) 講義の時間が長かった (9.1)	講義についていけなかった (10.2)	講義の時間が長かった (10.0)	講義の内容に不満 (6.9)	講義の内容に不満 (6.3)

()内は、各項目の全体に対する割合(%)

有効回答数 1996年：9、1997年：25、1998年：11、1999年：49、2000年：60、2001年：58、2002年：48

4. 研修会で得たことは生かされているか

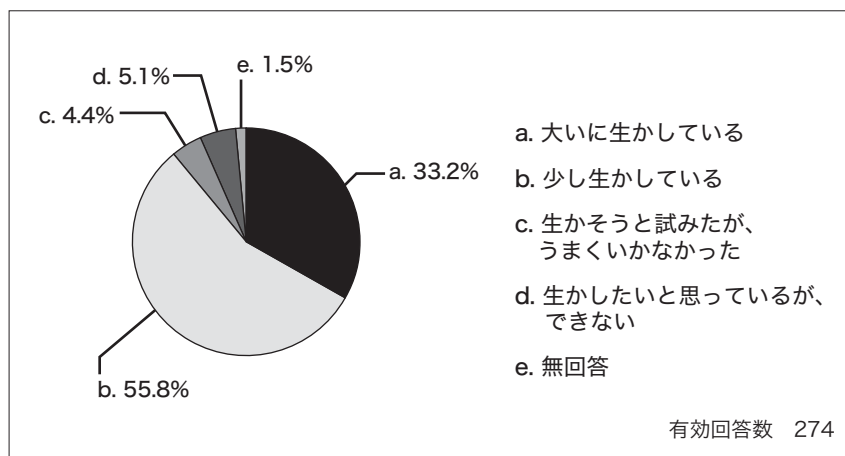
教師研修の成果をみると、研修生が研修会で得たことを教室で生かしているかどうかが大きく問われることとなる。何をどのように生かしているのか、また生かしていない場合は、何が障壁となっているのかをさぐってみた。

(1) 学んだことを授業で生かしているか：9割近くが「生かしている」

■全体集計

まず、Q6「研修会で学んだことを授業で生かしていますか」という質問の回答結果(表15)を見てみよう。「大いに生かしている」は33.2%、「少し生かしている」は55.8%、合わせて89%の人が「生かしている」と答えている。一方、「生かそうと試みたが、うまくいかなかった」「生かしたいと思っているが、できない」と答えた人が、それぞれ4.4%、5.1%いた。

表15：Q6「研修会で学んだことを授業で生かしていますか」(全体)

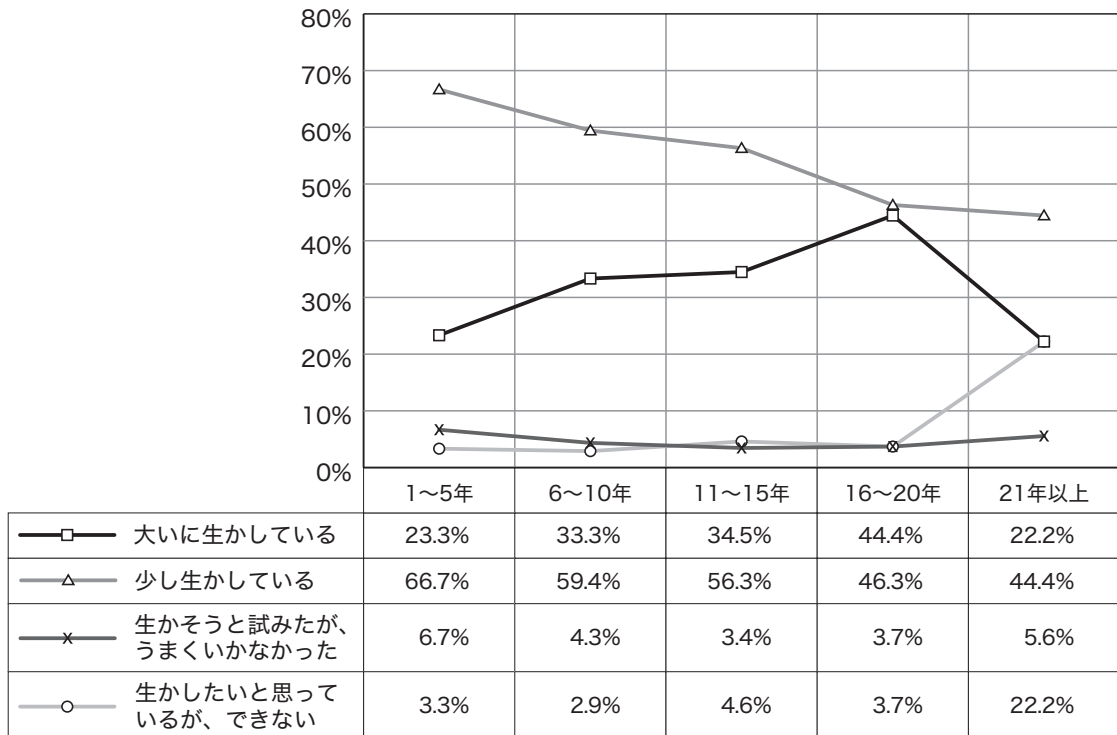


■教師歴別集計

次に教師歴別(表16)を見てみよう。教師歴が長くなるほど、「大いに生かしている」と答える人の割合が多くなっていて、教師としての蓄積が研修成果と相乗効果となって現場に還元されたといえる。しかし、教師歴が21年以上の教師では、「生かしている」という回答の割合が下がり、「生かしたいと思っているが、できない」という割合が他の層と比べて高くなっているのが特徴である。自分の教授スタイルを確立している長い経歴をもつ教師ほど、新しい教授スタイルに対応しにくいようだ。このことは、研修会で行われた模擬授業後の討論からも分かる。若手教師が行うチャレンジな模擬授業に対して、ベテラン教師は「その授業は課を何回に分けた何コマめの授業ですか」と質問し、その答えに対して「それならば、こういうやり方をすべきだ」とコメントすることがよくあった。つまり、ベテラン教師の普段の授業が一定のスタイルにのっとなって組み立てられていることが

よく感じられるのであった。

表 16：Q6「研修会で学んだことを授業で生かしていますか」(教師歴別)



有効回答数 1～5年：30、6～10年：69、11～15年：87、16～20年：54、21年以上：18 無記入：2

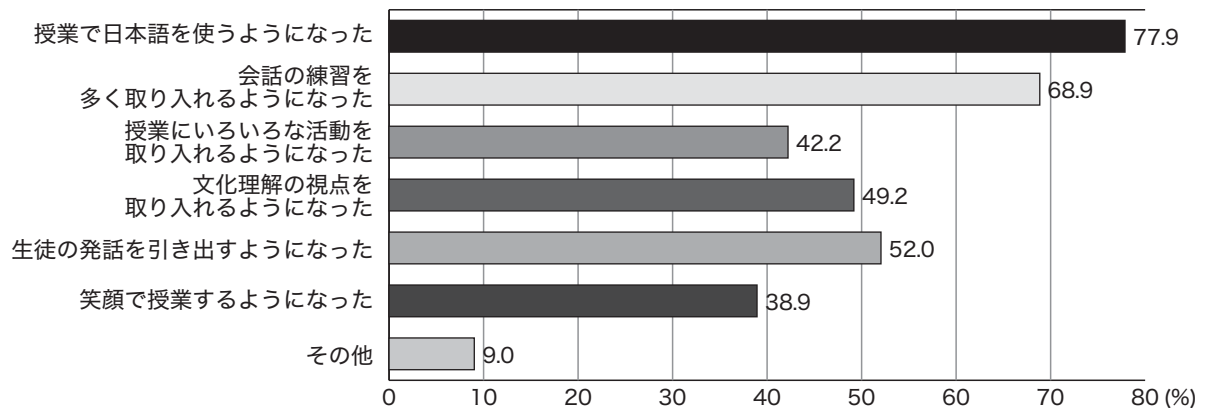
①何を授業に生かしているか

■全体集計

次に、Q6で「大いに生かしている」「少し生かしている」と答えた人に、Q7で「どういことを授業で実践していますか」と聞いてみた結果が表17である。

8割近い人が「授業で日本語を使うようになった」と答えている。これは

表 17：Q7「どういことを授業で実践していますか」(全体)



有効回答数 244

II. 研修会の成果をさぐる

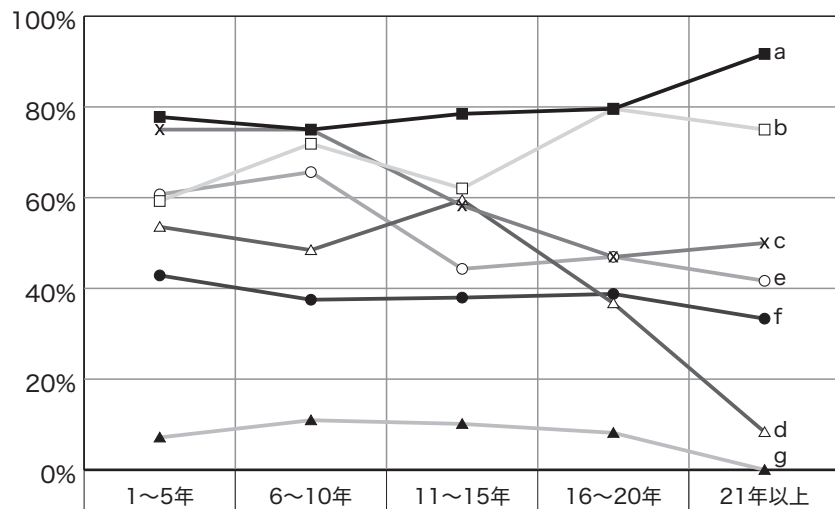
教室用語を含め、授業運びをそれまで母語で行っていたものを日本語で行うようになった、ということである。また、7割近い人が「会話の練習を多く取り入れるようになった」と答えている。「読み」「書き」「文法」が従来の授業スタイルであることを考えると、大きな進歩である。また、「生徒の発話を引き出すようになった」「文化理解の視点を取り入れるようになった」と回答した人も5割ほどいることから、2000年以降推し進められている「学習者を学びの主体とし、素質教育をめざした日本語教育」の理念が受け入れられつつあることが分かる。

■教師歴別集計

次に、教師歴別(表18)を見てみよう。教師歴が長いほど「授業で日本語を使うようになった」「会話の練習を多く取り入れるようになった」と回答した人が多いことが分かる。それまでが、そういったことが少なかったということもあり、それだけ変化の値が大きくなっていると考えられる。

しかし、一方で、「文化理解の視点を取り入れるようになった」り、「授業にいろいろな活動を取り入れるようになった」り、「生徒の発話を引き出すようになった」り、「笑顔で授業するようになった」りする面では、教師歴が長い(年齢が高い)人ほど消極的で、教師歴が短い(年齢が低い)人ほど

表18：Q7「どういことを授業で実践していますか」(教師歴別)



■	a. 授業で日本語を使うようになった	77.8%	75.0%	78.5%	79.6%	91.7%
□	b. 会話の練習を多く取り入れるようになった	59.3%	71.9%	62.0%	79.6%	75.0%
x	c. 授業にいろいろな活動を取り入れるようになった	75.0%	75.0%	58.2%	46.9%	50.0%
△	d. 文化理解の視点を取り入れるようになった	53.6%	48.4%	59.5%	36.7%	8.3%
○	e. 生徒の発話を引き出すようになった	60.7%	65.6%	44.3%	46.9%	41.7%
●	f. 笑顔で授業するようになった	42.9%	37.5%	38.0%	38.8%	33.3%
▲	g. その他	7.1%	10.9%	10.1%	8.2%	0.0%

有効回答数 1～5年：30、6～10年：69、11～15年：87、16～20年：54、21年以上：18 無記入：2

人ほど積極的であることがわかる。言い換えれば、新しい教育理念やそれに基づく新しい教授法および授業スタイルの吸収と実践に関しては、若い教師ほど柔軟で、順応性が高いといえるだろう。

②生徒の反応はどうか

教師たちの新しい試みについて、生徒たちはどのような反応を示しているかを知るための質問がQ8「新しい試みをして、生徒の反応はどうでしたか」である。

ほとんどの教師が「とても反応がいい」「歓迎されている」と答えている。しかし一方で、「生徒の聞き取りは明らかに向上したが、日本語のレベルが比較的低い生徒は苦勞している」「適応できる生徒と適応できない生徒がいる」「おおむね生徒に好評だが、筆記試験に対応する能力が下がった」というコメントもあり、さらにごく少数であるが「あまりいい反応とはいえない」という回答もあった。

生徒の反応例は以下のとおりである。

- ・日本語に対する興味が高まり、学習意欲が上がった。
- ・積極的に会話練習に参加するようになった。
- ・教室の雰囲気が活発になった。
- ・楽しそうに授業に臨むようになった。
- ・主体的に学ぶようになった。
- ・はじめのうちはなれなかったが、だんだん受け入れた。

③生かせない理由は何か

「大いに生かしている」「少し生かしている」と答えた教師の中にも、その試みが必ずしもすべて成功しているとはいえない事例があることは、②の「生徒の反応」でも分かる。Q6で「生かそうと試みたが、うまくいかなかった」「生かしたいと思っているが、できない」と答えた理由は何か、Q9とQ10で聞いてみた。

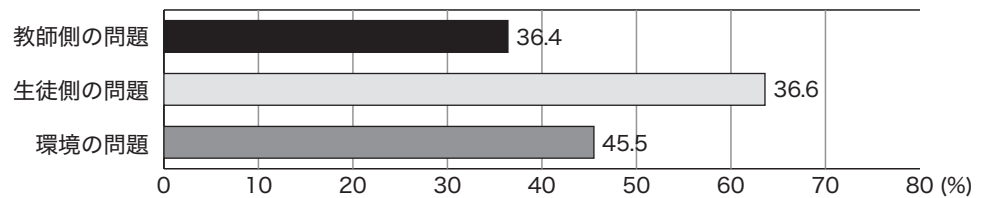
その結果、「生かそうと試みたが、うまくいかなかった」「生かしたいと思っているが、できない」の理由として記述された回答(表19、20)は、大体において共通している。それらは「教師側の問題」「生徒側の問題」「日本語教育を取り巻く環境の問題」に大きく分けることができる。

教師側の問題としては、教える技術や日本語力の不足、日本体験のなさといったことを挙げている。生徒側の問題としては、単語量が少ない、日本語力もしくは学力そのものが低いといったことを挙げている。日本語教育を取り巻く環境の問題として、教材(特に聴解教材や会話教材)がない、クラスの人数が多すぎる(80人のクラスもある)、教科書で学習すべき内容が多くて時間的余裕がない、日本語クラスがなくなっている、といったことを挙げている。

日本語教師を取り巻く環境の問題は教師にとっては切実である。しかし、

「生かそう」という気持ちを失わない限り、どこかでチャレンジするものと思われる。研修会で研修生たちに「自分もやってみよう」「何か工夫してみよう」という意識をもってもらうことが第一歩だと考える。

表 19：「生かそうと試みたが、うまくいかなかった」理由



()内は、Q6で「生かそうと試みたが、うまくいかなかった」と回答し、9で記述した全回答に占める割合 (%)
有効回答数 11

◆生かそうと試みたが、うまくいかなかったのはなぜか

記述例は次のとおりである。

〈教師側の問題〉

- ・日本人の生活習慣や日本文化について生徒に教えるが、自分自身体験したことがないので説得力がない。そのうち扱うのを避けるようになった。
- ・文化と伝統を紹介したが、内容が浅く、知識も足りないので、生徒の興味を引き出せなかったし、自分としてもつまらなく終わった感じが否めない。
- ・会話がうまくいかない。なぜなら、私自身が日本人のコミュニケーションスタイルを知らないから。

〈生徒側の問題〉

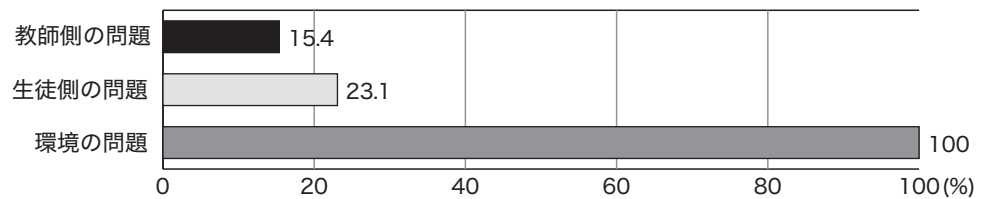
- ・「写真パネルバンク」を使って文化を紹介したり、日本の行事に関する音声テープを聞かせたりした。しかし、生徒の聴解力が必要レベルに達しておらず、うまくいかない。
- ・ゲームを取り入れようとしたが、うまくいかなかった。生徒の日本語力の基礎が弱く、単語量も少ないから。
- ・ロールプレイを何度も試みたが、生徒は日本語を話すのにも苦労しているし、演技も下手でうまくいかない。

〈環境の問題〉

- ・いろいろなゲームを試みたが、一クラス70人という大人数のため、ゲームをすると、どの生徒も自己表現をしたがるから混乱する。
- ・コミュニケーション力を高めようと、会話練習をさせたが、生徒数が多すぎるため、授業がめちゃくちゃになるときがあるし、ぜんぜん活気がないときもある。
- ・英語の聴解教材は多いが、日本語の聴解教材は少ない。特に生徒に合うものが少なすぎる。

◆生かしたいと思っているが、できないのはなぜか

表 20：「生かしたいと思っているが、できない」理由



()内は、Q6で「生かしたいと思っているが、できない」と回答し、10で記述した全回答に占める割合(%)
有効回答数 13

記述例は次のとおりである。

〈教師側の問題〉

- ・類義表現の使い分けを教えたいが、自分がその言語を実際に運用する機会が少なく、日本人と交流したり、日本での生活を体験したりすることがないうえ、資料も少ないので、実現する方法がない。
- ・コミュニケーション表現を授業に取り入れたいが、自分の知識に限界があるので、なかなかできない。
- ・日本語で授業したいが、自分の日本語力ではできない。

〈生徒側の問題〉

- ・ゲームをして生徒の興味や学習意欲を高めたいが、一クラスの人数が多いし、生徒の語彙数が足りない。
- ・コミュニケーション力を付けさせたいが、学力の高い生徒は英語のクラスに集中し、日本語のクラスには学力の低い生徒ばかりで難しい。

〈環境の問題〉

- ・日本の文化や習慣や自然などを紹介したいが、ふさわしい教材・教具がない。インターネットを活用する環境もない。
- ・聴解や会話に関して学んだことを生かしたいと思った。でも、英語だと高校生に合った聴解教材がたくさんあるのに、日本語ではほとんどないので、取り入れられない。
- ・ゲームを取り入れた授業をしたかったが、一クラスの人数が多すぎてできない。また、毎週20コマの授業をこなさなければならないので、新しい教具を準備する余裕がない。
- ・教える内容が多すぎて、会話練習のための時間が取れない。
- ・ペアワークやグループワークを取り入れたいが、クラスの人数が多すぎる(70～80名)。

(2) ネットワークづくりはできたか：5割近くが現在も「連絡を取り合っている」

①連絡を取り合っているか

研修会の目的の一つに「ネットワークづくり」がある。これは、普段他校の

II. 研修会の成果をさぐる

教師と知り合う機会があまりなく、孤軍奮闘している現場教師が多い状況のなか、研修会を通じて、研修生同士が交流できる土台をつくることが重要だと考えたからである。この目的がどの程度達成されたかを見るための質問がQ12である。回答結果は表21のとおりである。半数近くが現在も連絡を取り合っていることが分かる。「取り合っている」と答えた教師のうち、連絡を取り合っている相手の多くは市内で、次が省内の市外となっている(表22)。連絡を取り合っている場合、「どんな情報を交換しているか」という質問に対する回答結果が表23である。「教え方」「大学入試など試験に関する情報・資料」に関する回答が多く、ほぼ同数になっている。次に多いのは「授業で使う教材・資料」に関する回答である。

表21：Q12「研修会で知り合った他校の教師と連絡を取り合っていますか」(全体)

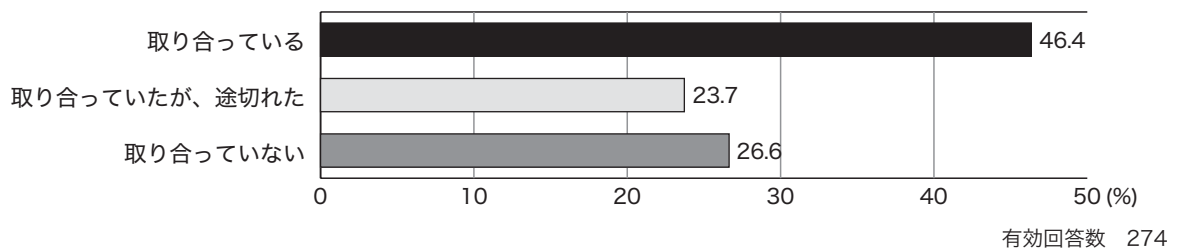


表22：Q12-①「どの地域の先生とですか」(全体)

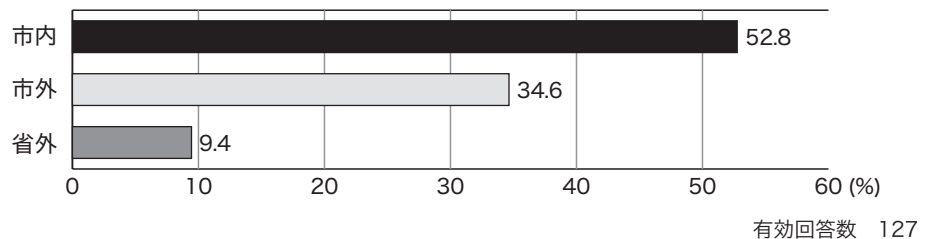
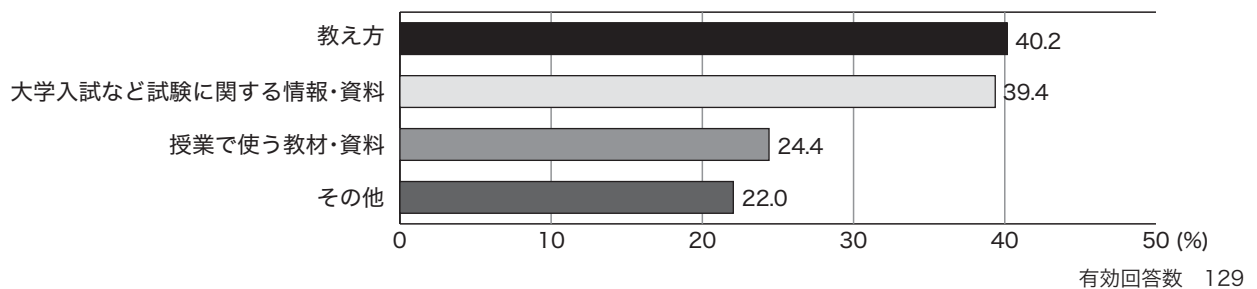


表23：Q12-②「どんな情報を交換していますか」(全体)



「教え方」についての情報交換の詳細は以下のとおりである。

- ・お互いの生徒の学習状況、理解の状況はどうか。
- ・効果的な作文指導法はないか。
- ・生徒にうまく伝わらないときや効果的に能力育成ができないときにどう対応したらいいか。
- ・新しい教え方はないか。
- ・生徒の学習意欲と興味をどのように引き出すか。
- ・どのようにクラスを活発な雰囲気にするか。

「その他」の項目には、以下のことが含まれている。

- ・日本に関する情報
- ・日本への留学情報
- ・教育改革や日本語教育の動向
- ・現在抱えている問題
- ・各学校の日本語教育の現状と今後のこと
- ・研修会や教師交流に関する情報
- ・新しい書籍や論文のこと
- ・お互いの授業を見学すること

②連絡を取り合わない理由は何か

一方、Q12で「取り合っていたが、途切れた」「取り合っていない」と回答した人に、それぞれ理由を聞いてみた。その結果が表24、25である。共通しているのは、どちらも「時間がない」とした回答がもっとも多いことである。次に多いのは「必要がない」という理由である。「必要がない」の具体的な記述を見ると、問題解決ができていないから必要ない、興味がないという意見もあるが、中国の日本語教師に聞いても問題解決できないから、という声もある。

なお、上記理由の中で特筆すべきは、複数の人が「日本語教育から離れた」と回答したことである。両方合わせて12人もいる。自分または相手の勤

表24：Q12で「取り合っていたが、途切れた」とした回答の理由

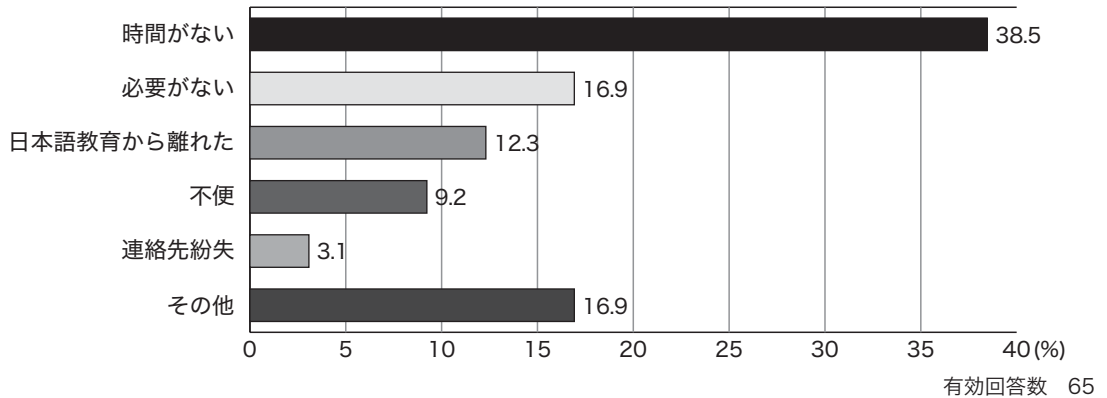
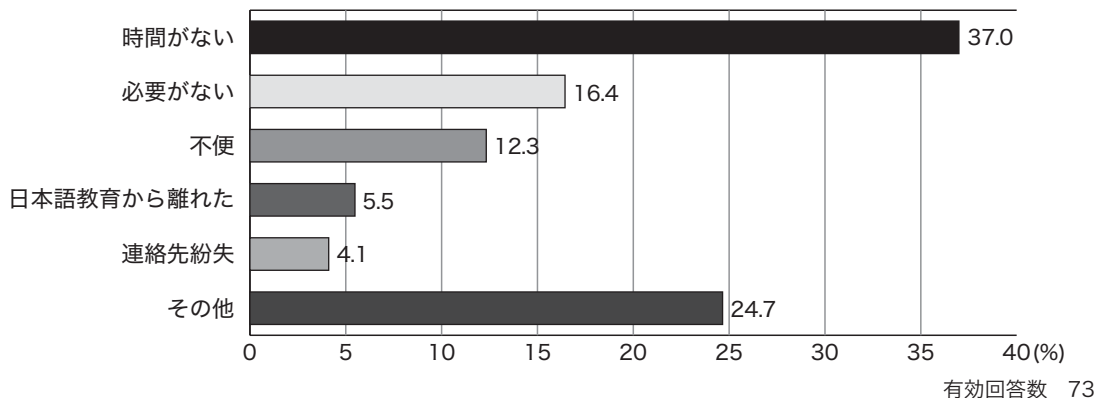


表25：Q12で「取り合っていない」とした回答の理由



務校における日本語科目の開設が中止になったため、他の教科の担当になったり、教壇から離れて他のポストに移ったりしている。中国の中等における日本語教育の現状を端的に表している。アンケートに答えていない人の中にも、止むを得ず日本語教育から離れてしまった人、教師という職業自体から離れた人もいる。

「必要がない」の詳細は次のとおり。

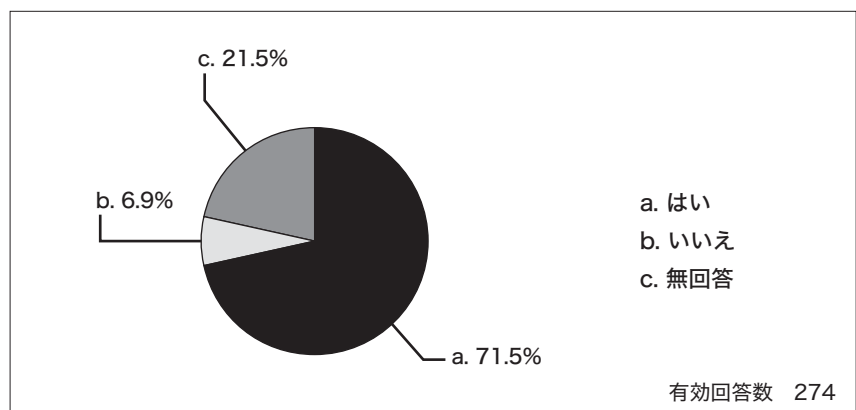
- ・他の人に聞こうと思わない。
- ・普段の仕事には必要ない、自分の関心は大学入試のための指導のみ。
- ・問題にぶつかったとき、中国の日本語教師に聞いても解決できないことが多い。
- ・学校間の交流がなく、わざわざ連絡を取るのは大変。
- ・毎日の仕事が忙しく、交流の必要性について考える時間もない。
- ・向こうから連絡が来ないので、こちらからも取ろうと思わない。
- ・日本語教師も資料も揃っていて、校内で問題が解決できる。
- ・本校に日本人教師がいて、他校の人と連絡をとる必要はない。

③今後、情報交換したいか

以上見てきたように、教師たちは研修会という場を共有したことがきっかけで、その後も連絡を取り合い、情報を交換していることから、研修会の目標の一つであった「ネットワークの構築」は一定の成果を上げたといえる。このネットワークを長く維持しつつ、活性化を図り、さらに広げていくためには、インターネットの活用が考えられる。一方、彼らがネットワークに求めているのは問題解決の拠りどころであるが、日本語のノンネイティブ教師同士では解決できない問題も多いという声があった。そこで日本人の日本語教育専門家を巻き込んだネットワークの構築のニーズと可能性について聞いた(Q14)。

その結果(表26)、7割近い人が「はい」と回答している。これには「参加

表26：Q14「電子メールを使って、中国の日本語教師と日本人の日本語教育専門家が情報を共有したり、問題を解決したり、意見を交換したりする場があれば、参加したいですか」



したいが、パソコンを持っていないためできない」という回答も若干含まれている。また、「いいえ」と回答した人の中にも「パソコンがないから参加しない」と回答した人が含まれ、環境さえ整えば「参加したい」と思う教師はもっと多くなることが考えられる。また、若い教師ほど意欲的であることも回答結果から分かっている。

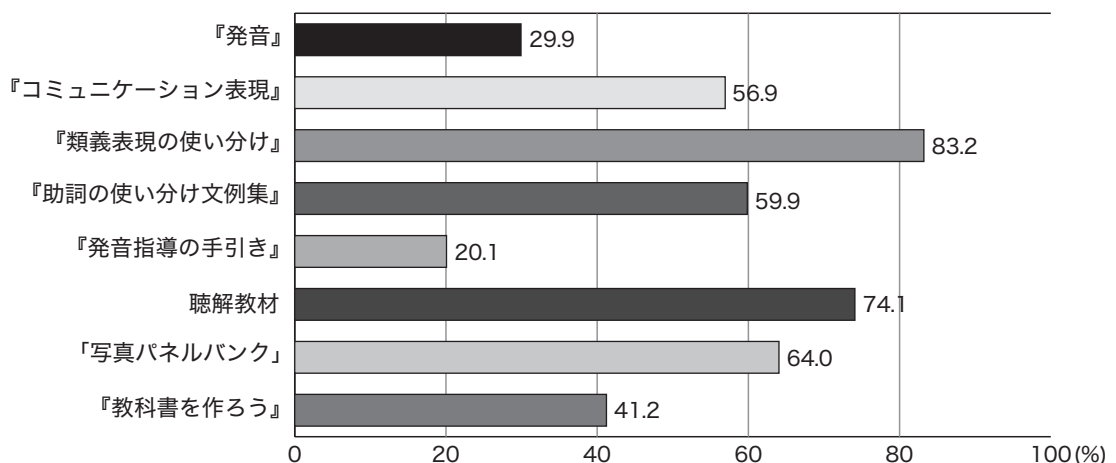
(3) 教材・資料を活用しているか：概ね活用

「漢語話者のためのわかりやすい日本語シリーズ」①～⑤として2002年に刊行された『発音』『コミュニケーション表現』『類義表現の使い分け』『助詞の使い分け文例集』『発音指導の手引き』は、7回の研修会に参加した全研修生に寄贈した。聴解教材は、『楽しく聞こう』などであり、1996年から毎年研修生に寄贈した。また、『教科書を作ろう』は1999年から、「写真パネルバンク」は2000年から毎回、国際交流基金が研修生またはその所属校に寄贈した。

「漢語話者のためのわかりやすい日本語シリーズ」は、研修会教材として開発したものであるが、教師の日ごろの参考書として機能するように、編集上さまざまな工夫を凝らした(36頁参照)。アンケートの回答結果(表27)を見ると、『類義表現の使い分け』を活用していると答えた人は8割を超え、また、6割近い人が『コミュニケーション表現』『助詞の使い分け文例集』を活用していると回答している。しかし、『発音』と『発音指導の手引き』の活用率が低いのは、この分野に対する現場教師の関心が低いことと、音声テープ付きでも自主学习が難しいということを物語っている。

一方、聴解教材では7割強、「写真パネルバンク」では6割強の人が活用していると回答し、こういった視聴覚教材に対するニーズの高さを窺うことができた。また、『教科書を作ろう』といった素材集も現場教師にとって有効であることが分かった。

表27：Q11「研修会でもらった教材、参考書の中で、研修会後も活用しているものは何ですか」



有効回答数 『発音』：274、『コミュニケーション表現』：274、『類義表現の使い分け』：274、『助詞の使い分け文例集』：274、『発音指導の手引き』：274、聴解教材：274、「写真パネルバンク」：178、『教科書を作ろう』：228

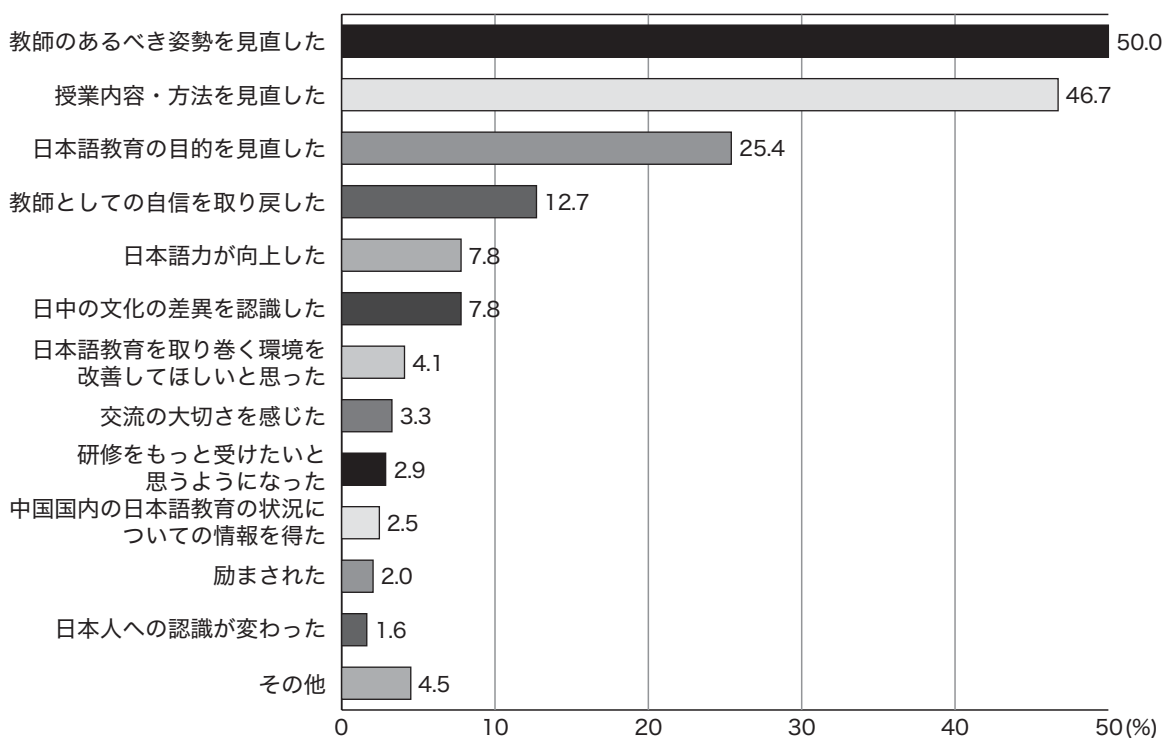
(4) 研修生の意識は変わったか：「教師の姿勢」と「授業内容・方法」の見直しが共に5割

Q13では、「研修会に参加したことで、意識面、価値観、教育観などで考えたり、発見したり、変わったりしたこと」について自由記述で回答してもらった。その回答を、「授業の内容や方法を変える必要があることが分かった」「日本語教育の目的は語学習得だけでないことに気づいた」「教師としての姿勢を学んだ」「日本語力が向上した・自信がついた」「教師としての誇りや価値を認識した」「励まされた」「日本人に対する認識が変わった」「交流の大切さが分かった」「日本の生活習慣や考え方および日中の考え方や価値観の差異に気づいた」「中国国内の日本語教育の状況を知った」「その他」に分類してまとめたのが表28である。

ここでも、「教師のあるべき姿勢」について認識を新たにしたいという教師がもっとも多く、次に多いのは「授業内容・方法の見直し」につながったという回答で、「日本語教育の目的の見直し」につながったといった回答は3位になっている。「教師としての自信を取り戻し、存在価値を再確認した」とする回答の多かったことも注目すべき点である。

また、問いの趣旨からずれている回答も多くあったが、「日本語力が向上し、日本語力に自信がもてた」「日本文化と中国文化の差異が分かった」「中高校の日本語は危機的状況に陥っている、有効な手立てを考えてほしい」「日本に行って研修する機会を得たい」など、興味深い結果を得ることができた。

表28：Q13「研修会に参加したことで、意識面、価値観、教育観などで考えたり、発見したり、変わったりしたことはありますか」



有効回答数 244

研修会で学んだこと（アンケートQ13回答より）

●教師としての自分の姿勢について考えた

- 考え方はもちろん、人生観、教育観についても新しい認識をもちました。教育に従事してから十余年経ちますが、改めて生徒になって先生の授業を受け、昔に戻ったような気がしました。教師として生徒にどう接すべきか、生徒に授業に対する興味をもたせ、真面目に授業を受けさせるためにはどうすればいいのか、生徒の潜在能力、知力、人間性を育成するにはどうすればいいのか、改めて考えました。そして、改めて考えることによって、教師としての自信がさらに増しました。(2000、吉林省)
- 日本人の先生が無私の精神で、私たちのために尽くしてくださった姿から、人間が金銭のためにだけ生きているのではないこと、人間の情があることに気づきました。また、教えるということは、受験対策のためだけではなく、人間の育成のためです。日本語教育も単に日本語を教えることだけでなく、日本および日本人とその文化を生徒に理解してもらい、日本人と会話してもらうことを目的としていることに気づきました。(1999、黒龍江省)

●教師のやりがい認識した

- まじめに責任感をもって仕事をする日本人の先生の姿勢にとっても感動しました。私はこれからも教育にずっと携わる決意を固めました。同級生は続々と教育畑から離れていますが、私は動揺しません。可能ならば、最後の最後まで教師の仕事をしたと思っています。(1997、遼寧省)
- 教師になったことについて改めて考えてみました。以前、教師という仕事を真剣に考えたことがありませんでした。今は自分の仕事を大事にしようと思うようになりました。日本人の教育や授業に対する真摯な態度は、私も含めてみんなが学ばなければなりません。教師の一人ひとりが教育を大切な仕事として認識してこそ輝く未来につながると思います。(1999、吉林省)

●自分の力不足を認識。学び続けることが必要

- これまで小さな地方都市にいて、正式な日本語の訓練も受けたこともなければ、日本人に会ったこともありませんでした。研修会では、日本人の先生の授業に対する熱意、仕事と勉学に対する姿勢に接し、また半月にわたって勉強することによって、自分は教師として未熟であると痛感しました。外部から情報を取り入れ、これまでの閉鎖的な考え方を改めました。また、今年は大学で研修を受け、日本語教師としてふさわしい人間に成長したいと思っています。(2000、吉林省)
- 私たちは、日本語の教師として日本語らしい日本語を教えるように努力しなければならぬと強く思いました。そのために、日本の雑誌などを見て、日本の社会、文化、歴史などを学び、どんどん自分のレベルを高めることがとても重要だと思いました。(2000、黒龍江省)

●授業の内容と教え方を見直した

- 中国語による授業から日本語による授業に変えるとともに、文法教育から聴解・会話能力を育てる授業に変えました。文化を取り入れながら外国語を勉強することによって、人と人との交流を促進し、隔たりと誤解を解消できると気づき実践するようになりました。(1998、内蒙古自治区)
- 教師が主体となるのではなく、生徒を主体にして、生徒を導くようになりました。一方的な講義から生徒が自主的に学習するような指導へと変えました。生徒が問題意識をもって調べ、教師は最後にまとめるという方法をとるようにしています。その結果、生徒は勉強に対して意欲や積極性をもつようになり、主体的に勉強するようになりました。また、日本語の知識を伝えるだけでなく、日本の文化を紹介し、中国文化との関連を説明し、生徒の知識の幅を広めています。(1996、黒龍江省)

●語学習得だけが日本語教育の目的ではない

- 単に知識を伝えるのではなく、人間を育てることこそが教師として重要なことです。日本語教育において、生徒とどう向きあうべきか、生徒のコミュニケーション能力と素質をどう高めるべきか。研修会が終わった後、日本語教育について一生懸命考えています。(1997、内蒙古自治区)
- 以前、教師の優劣を評価する基準は生徒の進学成績であるという考え方をもっていました。しかし、研修会后、それだけではないと思うようになりました。生徒に知識を教えるだけでなく、知識の学び方についても教える必要があることが分かりました。(2000、黒龍江省)

●励まされた

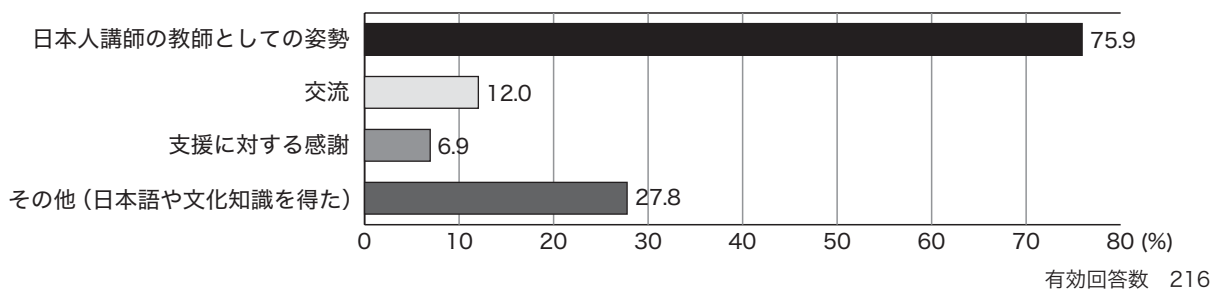
- 価値観についても、教育発展の見通しについても、新たな認識をもつようになりました。教育者として重責を背負っていることを強く感じるとともに、日本語の将来性に自信をもっています。他の学科よりうまくできていると思っています。また、日本語学習に対して学校や上級の指導部門もそれなりに重視するようになり、私たち末端の日本語教師は大いに励まされています。(1997、遼寧省)
- 日本語教師を務めるのは、とても骨が折れます。学校で黙々と、勤勉、誠実にやっても成績が認められないのは、日本語が少数科目だからです。でも、研修会后、自分はまだ幸運なほうだと思いました。私より苦勞していて、教育活動の条件がもっと厳しいところにいる先生は少なくありません。しかし、彼らは一言も不平を漏らしたことはありません。とても感動しています。(2002、遼寧省)

(TJFで翻訳、編集しました)

(5) 研修生の心に残ったこと：7割が「日本人講師の姿勢」に感動

Q15で、「研修会で一番心に残っていることを聞かせてください」と問いかけた結果が表29である。回答者のうち、実に75.9%の人が「日本人講師のひたむきさに感動した」「日本人講師の真摯な態度から学んだ」と記述している。また、「初めて日本人と話した、交流した」という回答も多かった。下の記述にもあるように、「日本人と日本語で交流した」ことが、自信につながった研修生も多い。これらのことは、研修会の講師の人選や研修会に臨む講師の姿勢、教師研修における「人」と「人」の関わり、人間的な交流の大切さを指摘しているといえる。

表29：Q15「研修会で一番心に残っていることを聞かせてください」



研修生の声 (アンケート Q15回答より)

「一番印象に残ったのは、私と同じく外国語教育に携わっている多くの人と会えたことと日本人講師の授業を聞くことができたことです。交流を通じて、日本と中国との友情を感じました」

「日本人と交流したのは、今回が生まれて初めてです。日本人の先生による日本語の授業を聞き、一緒に水族館や大連タワービルを見学し、一緒にパーティをするなど、どれも印象深い体験でした。生涯忘れません」

「最後の夜の送別会で、みんなで歌ったり踊ったりして思い切り遊んだことが忘れられません」

「これほど多くの日本人講師や、中国国内の日本語教師と知り合えたことがいちばん印象に残っています」

「研修会中はとても暑かった。でも、日本人の先生たちは心を込めて、熱心に教えてくれました。日本語が下手な私たちと一緒に食事をし、話をしてくれました。その中から多くのことを学びました」

「研修会期中、私が風邪を引いて倒れたとき、親身になって助けてくれました。心から感謝しています。日本の友人は、私たちを誠心誠意助けてくれる友人だと思いました」

「いちばん印象深かったのは、最後の夜の日本人との交流でした。学校で日本人と交流する機会がないので、とても貴重な体験でした」

「研修会期中、急に寒くなって、ある先生は風邪を引いたにもかかわらず、授業を続けてくれました。辛くてもそのことを口に出したりしませんでした。とても感動しました。だから私も、日本語教師を職業として選んだ以上、ベストを尽くさなければ、教えてくださった先生方に報いることができません」

「初めて日本人と交流しました。日本人講師の授業を受けるというのは、はじめのうちは緊張し、慎重になりました。でも、2週間のふれあいを通じて、心配や緊張は無用だと分かりました。そして、今では、知らず知らずのうちに日本人講師と同じように、やる気満々になり、生き生きと授業に臨んでいます」

「いちばん印象に残ったのは、日本人と日本語で交流できたことです。ふだん日本語を勉強できる条件が私たちにはほとんどなかったからです」

「多くの日本人と交流しているうちに、日本人に対してもっていた反感が変わりました」

「研修会で初めて日本人に会い、初めて言葉を交わしました。はじめのうちは、自分の日本語が通じるかどうか心配でした。自信がないので、なかなか口を開けませんでした。でも、1週間経つと、すべての不安が消え、かなり自信が湧いてきました」

(TJFで翻訳、編集しました)

第III章

研修会の意義を再考する



1. 研修会の成果

第I章と第II章で触れたように、研修会を実施するたびに何らかの問題が生じ、それらを課題として次の研修会では解決しようと試行錯誤を繰り返した。国や文化の違いを超え、共同事業として教師研修を行う際の参考となるように、ここでは主にその成果に焦点を当てて述べることにする。ただし、成果と一口に言っても、研修生にとっての成果もあり、主催者にとっての成果もある。研修生にとっては、一人ひとりの研修生がそのニーズや期待を満たすことができたかどうか成果の判断基準になる。一方、主催者にとっては、研修生のニーズや期待に応えることができたか、事業理念を反映させることができたか、事業趣旨を達成することができたかどうか判断の基準となる。したがって、主催者としては、共催者それぞれが成果の判断をしなければならないが、本章では、研修生や研修会に関わった人々へのアンケートやインタビュー、投稿原稿などを踏まえて、日本側主催者の中心であったTJFの視点から研修会を振り返り、その成果をまとめてみたい。

研修会の成果について考えるとき、もう一つ認識しなければいけないのは、アンケートなどで統計的に全体傾向を把握することはできるが、一人ひとりの研修生では、背景事情がかなり異なり、すべての研修生に同じ成果を求めることはできないし、また求めるべきではないということである。なぜなら、7回の研修会に参加した523名の研修生の日本語力、学歴、教師歴、教師としての力量、また所属している学校の状況(民族や地域の差、経済状況、受験体制等)や学校での待遇(給料の額や支払い状況)は実にさまざまであり、研修会への期待や研修会に臨む姿勢、吸収力も一様ではないからである。アンケートの調査結果にもあったように、「研修会直後は確かに日本語力が向上したと実感したが、1年ほど経つと元のレベルに戻ったような気がする」という教師もいれば、新しい教授法に対して吸収力があり意欲も高いが、経験のなさから十分にそれを生かせなかった教師歴の短い教師もいた。また教師歴が長い教師の中には、研修で学んだことを生かす力はあるが、逆に自分のスタイルを急に変えることができな

時間がたって分かった、研修会で得たもの

私は、ハルビンで開催された1998年の研修会に参加した。研修会直後よりも、時間がたってからのほうが、研修会で得たものの大きさを実感している。私は授業でできるだけ日本語を使うようにしているが、これは研修会で日本人と交流したことで、日本語で話す自信がついたからだ。また、授業をどのように進めたらいいか、授業を活発にするためにどのような教室活動を取り入れたらいいかと考えるときに、研修会の講師がやっていた方法を思い出して参考にすることがよくある。授業の方法について、やはり研修会に参加したことのある同僚とよ

く相談するようにもなった。

私が受けた講義の講師は、笑顔で研修生に接し、教室の雰囲気をよくし、いろいろな教室活動を取り入れて楽しい授業にしようとしていた。私も実際にロールプレイなどの教室活動を取り入れてみたが、生徒の反応もよく、学習効果も高いようだ。研修会で日本人講師の授業を受けるうちに自然と教授法を学べたのだと思う。

田晶(大連市第一中学)

(インタビューをもとにTJFがまとめました)

い教師もいた。

わずか2週間の研修一回で問題がすべて解決するはずがないことは当然である。また、研修生自身が研修で学んだことを日頃の教育実践に生かそうと努力したかどうかにかかっている部分も大きい。その意味でも、研修会で得た成果を定着させるためには、研修会終了後のフォローアップとともに、地域に根ざした教師研修をたとえ小規模であっても継続する必要があると考える。むしろ研修会の意義は、その契機と土台をつくることができたかにあるのではないだろうか。

(1) 日本語力と教授力の向上

研修会の成果を測る明確な基準の一つは、研修生のニーズに応えることができたかどうか、ということであろう。その意味においては、本研修会は一応の成果が得られたといえる。研修生の最大のニーズは「日本語力の向上」であり、さらに、「日本語力の向上」に比べると少ないものの、年々高まっていった「教授力の向上」というニーズであった。今回のアンケートの結果からも分かるように、この二つのニーズに対して、研修生の約7割が満足している。これは、技能別の講義をカリキュラムの中心に据える一方で、それらの講義を行う際に意図的に教授法や教室活動にバリエーションをもたせたり、「教授法(教材・教具、教室活動)」関連の授業の割合

自信を取り戻させてくれた研修会

私は大学時代から日本語が大好きで、一生懸命勉強した。努力の甲斐あって、大学を卒業するとき、「優秀卒業生」として表彰された。卒業後、情熱を胸いっぱい抱いて故郷に戻り、高校で日本語教師の仕事始めた私を待っていたのは、洗面器いっぱいの冷たい水を頭からかけられたような厳しい現実だった。学校には、教科書と教師用指導書以外に何もなく、テープレコーダーのような基本的な音声設備さえなかった。そうした「ないない尽くし」の環境のなかで、教師たちは大学入試に対応するために、単語や文法の教え方を模索し、詰め込み教育を行っていた。一方、生徒たちは、膨大な文法ルールと山のような練習問題で苦しみ喘いでいた。教える側にとっても学ぶ側にとっても、決して楽しい作業ではなかった。もっとも苦痛だったのは、自分自身、日本語の読み書き、聞く話す能力がどんどん下がっていくように感じることだった。毎日毎日、毎年毎年同じことを繰り返し、教師自身が日本語を話せない、そして、話す勇気もなくなっていくのだから、生徒の日本語力、特に話す能力がいかなるものか、想像に難くないだろう。

幸運にも私は、1999年の研修会に参加する機会を得た。それは私にとって、心のなかに春風が吹き込んできたような経験だった。蒸し暑い夏だったが、講師たちは毎日熱心に教授法や文法などを教えてくれた。大学を卒業してから七、八年ぶりに体験する学びの場であった。

私は教室内では貪るように講義を聴き、教室外では積極的に日本人講師と交流した。今では日本人に「日本語がうまいね」とよくほめられるが、研修会での経験が、なくしていた自信を取り戻させてくれたことは確かである。半月足らずの短い研修期間だったが、日本語を話す能力は飛躍的に進歩したように思う。と同時に、研修会を通して感じたことは、外国語教育において先進的な教育設備が揃っていないなくても、教え方を工夫すれば、半分の力で倍の効果を得ることができるということである。

研修会を終えて学校に戻ると、それまでの活気のない教え方を一新した。文法だけを教えるのではなく、私自身できるだけ日本語で授業を行うとともに、生徒には読み書き、聞く話す訓練をバランスよくさせるようにした。生徒たちは以前とは違って学習意欲を示し、私だけでなく、生徒たちも積極的に日本人と日本語で話せるようになった。今私の生徒たちは埼玉県志木高校の生徒たちと文通交流をしている。なかには、電話をかけ合う生徒もいるようだ。

日本語教育という仕事はこんなにも楽しいものだったのかと改めて感じている。これからもっともっと励んでいきたいと思う。

包華(阜新県蒙古族高級中学)

(TJFで翻訳、編集しました)

を一定の割合で組み込んだりした成果であろう。

(2) 研修生へのエール

「日本語力が明らかに向上した」という研修生、「新しい教え方を多く学んで自分の授業に生かしている」という研修生の声が多く寄せられたことは、主催者として大変うれしいことである。しかし、この研修会の目的は、単に研修生のニーズに応え、彼らの日本語力や教授力を向上させることだけではなかった。

2週間の研修で得られる成果には限りがある。この短い期間内に、日本語や教授力の向上よりも大切なのは、一人ひとりの研修生が研修会を通じて自分の日本語力や教授力を相対化し、課題を認識し、その課題を克服する方法、ヒントや努力目標を知ることであろう。それが明日への活力ともなるのである。

中高校の日本語教育を取り巻く環境がだんだん厳しくなっているなか、多くの研修生は日本語教師という仕事ないし教師という仕事自体に対し自信や価値を見失っていたが、研修会への参加を通じて、さまざまな場面で励まされ、日本語教師という自分の存在意義を再確認したという。こうした研修生の今後の活躍が大いに期待できるのではないだろうか。

(3) 「文化理解」の促進

TJFは、海外における中等教育レベルの日本語教育の大きな目的は、日本語を話す人と積極的にコミュニケーションを図り、交流しようとする姿勢を育てること、言語と同時に文化に対する理解を深めることであると考

文化に触れ、教師のやりがいを見つけた

大学卒業後、憧れの仕事に就けなかった私は、ぼんやりとして初めての教壇に立った。もちろん、時間がたつにつれ、「教師」というものに対する認識もだんだん変わってきたが、本当に教師という仕事に魅力を感じたのは、研修会がきっかけだった。

外国語の授業は長い間、文法中心に行われてきた。そのために、外国語の背景にある文化は見失われ、外国語教育の本来の目的も無視されるようになっていた。文法中心の教育を受けた教師が、同じように生徒を教えている現実を決して望ましいものではないが、多くの外国語教師は文化に触れる機会がなく、テキストに頼るしかない。私も研修会に参加するまでは、そんな教師の一人だった。研修会で日本文化に触れ、日本人と交流することができて、私の考え方は変わった。研修会後は、言葉と文化を結び付けて日本語を教えるようになった。

文化は世界を豊かにし、言葉は文化と文化を結んでいる。「自文化」も「異文化」も、それぞれ独自の魅力があり、お互いに吸収し合い、大切にしていかなければならない。私は、文化を伝えると同時に、文化の美しさを感じ、味

わっている。文化の美しさに気づかせてくれた日本語、そして日本語教育に関する研修や交流の機会を提供してくれた方々に心から「ありがとう」と言いたい。

研修会で見つけたもう一つのもの。それは、教師としてのやり甲斐だ。研修会では多くの日本人講師の情熱に触れ、感動すら覚えた。それまでの私にとっては、「教師」は単なる仕事でしかなかった。さらに、研修会后、福島にある公立高校と交流する機会があり、同校の校長の教育に対する熱意にもまた感動した。そして、ますます教師としてのやり甲斐や責任を強く感じるようになった。

日本語教師をしていたからこそ、このようなチャンスに恵まれたのだと思う。日本語教師になって幸運だった。教師のやり甲斐を見つけてから、教育への愛着、生徒への愛情が強く湧いてきた。生徒には知識を教えるだけでなく、文化の美しさを伝える使者として、愛を注ぎ、心を込めて教育をし、立派な人材に育てたいと思う。今、私は、「教師」であることを誇りに思っている。

孫栄娟(瀋陽市二十中学)

えている。そのために、TJFでは言語学習と文化理解を統合した日本語教育の実現をめざしてきた。

しかし、研修会発足当初の頃は、「文化理解」に対する研修生の姿勢は、日本固有の伝統文化について知識を得ることであるというものが多く、一般的に「文化」に対するニーズや関心は低かったといえる。しかし、TJFとしては、カリキュラムやプログラムを組む際には、あえて積極的に、また意図的に「言語学習と文化理解」について考える時間を設けた。具体的には、文化事情を含む「聴解・口頭」の授業、教科書の文化コラムについての特別講義、異文化間教育に関する特別講義、写真教材を使ったワークショップなどであった。こういった努力が、5割の教師が研修会に参加して良かったこととして「文化を扱う重要性が分かった」ことを挙げたことにつながっているといえるだろう。

(4) 研修生や学校間のネットワーキング

アンケートの結果からも分かるように、研修会后、予想以上に研修生同

言語教育の重要課題を先取りして

言語は民族や国民の性格、人間関係など社会文化を反映したものである。したがって言語を教えたり習得させる過程において関連する文化的背景を紹介したり身につけさせたりすることが必要となる。言語教育において関連する文化背景知識を取り入れることは、21世紀の外国語教育の重要な要素となっている。しかし、中国の中等教育では、例えば日本語教育において言語と文化の関係は、1990年代半ばの時点でまだ明確に認識されていなかったように思う。

1997年の研修会に参加したとき、私は長春市第八中学の教員だった。当時の学校教育ではまだ「素質教育」を提唱しておらず、学校は生徒のテストの点数、特に大学入試の点数に基づいて教師の評価を行っていた。授業では語彙や文法を教えることが中心で、日本文化に関する内容を扱うことは稀であった。

2週間という期間は長くはなかったが、研修会で得たことは多かった。日本人講師から進んだ教育理念や方法を学んだり、日本人の仕事に対する勤勉な精神を身をもって感じる事ができた。さらに研修会を通じて言語と文化の関係に対して新たな認識をもつことができた。

研修会では、日本人の生活と密接に関わる文化の紹介も行われた。例えば、日本人の食習慣や風呂文化などが取り上げられた。また、文化を取り入れた授業の紹介もあった。私は研修会で学んだ知識を参考にしたり、関連する資料を読んだり、さらに教室での実践を通して、「日本人とお風呂」という授業案を作成し、国際文化フォーラムが開催していた「第2回文化を取り入れた日本語の授業アイデアコンテスト」に応募した。そして、入賞することができた。このことは私にとって励みになり、教師

としての自信となった。それと同時に言語と文化の関係に対してより深く理解することとなった。

1998年に開催された第3回の研修会では、私は客員講師として、コンテストに応募した授業案の模擬授業を行った。参加者から貴重な意見と提案があり、さらに当時の授業方法について真摯な意見交換と討議が行われた。そして、文化が言語教育の中でプラスの役割を果たすという認識で一致した。

研修会に参加して、他校の日本語教師と多く知り合い、経験したことや情報を交換することができた。日本人講師には、私が普段教えるなかで生じた日本語に関する疑問や問題点について教えてもらった。当時私の学校には外国人教師が在籍しておらず、外部との交流もほとんどない状況だった。そのため、こうした経験は私にとっては、家の窓を開け外の世界を見たようなものであり、自分自身を理解することにもなった。

研修会のことを思い出すと、感動を覚えずにはいられない。こうした得がたい研修経験は再び私に自信をもたらし、言語教育において文化が果たす役割を再び認識させてくれた。現在、国際交流が日増しに盛んになり、異なる文化や異なる生活背景をもった人々が交流する機会が増えている。異文化を理解し、摩擦を減らすことは外国語学習者にとって非常に重要なことである。言語教育に文化を取り入れる必然性はより大きくなってきており、7年前に現在の言語教育の重要課題に触れることができたのは幸運だったと思っている。

劉淑艷(吉林大学非専攻外国語教育研究センター)

(TJFで翻訳、編集しました)

士が現在に至るまで連絡し合い、情報を交換したり、教材や資料を交換したり、互いに授業見学をしたりしている。連絡を取り合っている相手は省外よりも省内、市外よりも市内が多く、そして長く維持されていることから、地域に根ざしたネットワークを形成することが有効だといえる。

一方、電子メールを駆使して、他省の教師ないし日本人講師と交流を続けている人もおり、メールを活用した交流に前向きの人が多い。今後のネットワークの形成や促進、情報提供に、電子メールやインターネットも有効であろう。

(5) それぞれの出会いと学び

TJFは研修会を文化交流事業の一環として捉え、そこでの人と人の出会いを特に大切にしてきた。研修生、講師、中国在住日本人、日本の高校中国語教師、事務局スタッフ、日中関係者がさまざまな場面での交流を通して相互理解を進めていけるよう努力してきた。

特に研修生と講師との出会いが研修会の軸であると考え、講師が初めて会う日本人であるという研修生が多いことを考慮して、講師の人選については最大の配慮をほらった。日本語教育の教師として、専門性もさることながら、この事業の趣旨に賛同してくれること、中国事情や中国語に通じていること、中国の人たちを理解し尊重すること、同じ日本語教師として対等に付き合えること、そういう要件を満たす方々を主任講師、副主任講師として依頼した。と同時に、その他の講師の方々にも、講師マニュアルによってこの事業の趣旨を十分に理解していただくように努めた。その効果は、アンケートで数多くの研修生が最も研修会で印象に残ったこととして講師との出会いを挙げていることから十分に証明されたといえよ

コミュニケーションには「文化」が不可欠

私は1998年にハルビン市で開催された研修会に初めて参加した。この研修会で、日本語教育に対する考え方は大きく変わった。それまでは日本語の文法だけを生徒に教えていた。日本の文化を取り入れながら日本語を教えることの重要性が分かっていなかったのだ。しかし、研修会に参加してみて、文法的に正しい日本語と日本人が実際に話している日本語とは必ずしも同じでないこと、日本の文化に対する十分な理解がないと、上手に日本語を使っても、うまくコミュニケーションが図れないことなどが分かった。そして、日本人の習慣や考え方を知らない、本当の日本語を身につけることができないと思うようになった。研修会后、私は文化を取り入れながら日本語を勉強したり教えたりするようになった。

2000年に、私は内蒙古で開催された研修会に事務局のボランティアとしてもう一度参加する機会を得た。事務局のいろいろな仕事をやりながら、時間のあいているときは講義を聴くことができた。この研修会では、前回とはまた異なる感想をもった。1998年は初めての参加

だったために、講師が話す日本語や講義内容を理解することで精一杯だったように思う。しかし、2回目の参加となった2000年は、少し余裕があったので、講師の教え方を観察することができた。2回目の研修会では、テキストのつくり方や教授法、日本人の話す習慣がもっとも強く印象に残った。特に、日本人講師が授業に取り入れたモデル会話はとても面白く感じたし、ロールプレイの課題のつくり方や、自然な日本語を生徒に使わせる教授法について学ぶことができた。今は研修会で学んだ教授法を自分の授業で活用している。生徒たちのほうも、そんなにノートを取らなくても楽にたくさんのことを吸収できるようになった。生徒たちは職員室に来たとき、「失礼します」「失礼しました」と言うようになった。また授業中、お互いに積極的に会話を練習するようになった。こうした生徒の成長を見るにつけ、ますます教える自信を強くもつようになった。

劉海峰(参加当時、遼寧市カンチカ第二中学)

う。授業以外でも講師と研修生の交流会や茶話会を開いて、お互いにリラックスした雰囲気の中で話してもらおうようにした。こうした交流により双方の距離感が狭まり、毎回歓送宴は盛り上がりを見せた。

こうした講師陣を編成することができたのも、一貫して日本からの講師派遣の費用を負担し、中国赴任中の派遣専門家の参加を可能にしてくれた国際交流基金、および青年海外協力隊員を派遣してくれた国際協力機構という官のサポートがあったからで、官民一体の事業として成功したプロジェクトの一つではなかったかと思っている。

講師陣の編成にあたっては、講師間のチームワークや切磋琢磨が大切であると考え、ベテラン、中堅、若手の混合チームとした。実際をお願いしたすべての講師が、研修会の趣旨を理解し、持ち前のボランティア精神と情熱を傾けてくださった。また、若い講師は、ベテラン講師や研修生から多くのことを吸収したようだ。研修会で収穫を得たのは研修生ばかりではなかったといえる。多くの講師にとっても研修会は自己研鑽の場となったのである。

また、TJFとしては、中国の中等教育における日本語教育に協力するだけでなく、日本の中等教育における中国語教育も積極的に支援し、互いの言語を教える教師、学ぶ生徒の橋渡しをすることによって双方の言語教育を活性化させ、相互理解を促進することをめざした。その試みを第2回の研修会から始めたが、最終回の研修会で会期中に同じ会場で中国語教師研修会も併行して開催できたことは大きな成果だった。研修会後の日中教師セミナーでは、共通のテーマで議論することができた(40頁参照)。

中国の日本語教師とさまざまな日本人との出会いの場をつくるために、もう一つ努力したのは、各会場の近くに住む日本人駐在員との橋渡しであった。特に大連、瀋陽、ハルビンで行った交流会は盛況であったが、それを日常化するところまでもっていけなかったことは残念であった。

研修会で得たネットワーク

私は2000年に長春で開催された研修会に参加した。この研修会は、中日の教師の文化交流、学習、相互理解の場を提供してくれた。研修会では多くの日本の友人を得ることができた。彼らは博識で、親しみやすく、何よりも中国の文化を熟知し、尊重してくれていて、もっと早く知り合っていたらと思う人ばかりだった。そのため、研修は終始和やかで、統制と調和のとれた雰囲気の中で進められた。教える側、教えられる側双方が、中日文化の交流と融合について、そしてそれが言語に及ぼした影響について共に探求し、違いを認めつつ共感できることも多かった。この研修を通して、新しい知識、理念、考え方を得たこと、体験的に教授法が学べたことは、大きな収穫であった。

研修会での交流を通して得たことは、波及効果が大きく、私の一生の宝となるだろう。私は学校に帰ったあと、

研修会で学んだことや感じたことを、メールで同僚や他校の教師に伝えたり、意見交換したりしている。また、研修会で知り合った日本人講師の方々(例えば、中新井綾子先生、東京学芸大学の谷部弘子先生、大分の高校中国語教師田口理一先生など)とは、その後もメールや電話で交流を続け、日本語の研究や教育の中でぶつかった疑問や難問について相談している。先生方がいつもすぐに疑問を解いてくれるお陰で、私は先に進むことができる。

このように、研修会で始まった交流はさまざまな形でずっと続いており、中国の学校内、学校外における日本語教育の進歩と発展に寄与し続けている。

董賀(長春市第八中学)
(TJFで翻訳、編集しました)

講師から見た研修会



有馬淳一(ありま・じゅんいち)

2002年より現職。2002年夏に実施された第7回中国中高校日本語教師研修会の講師を務める。現在、中国各地で行われる日本語教師研修会やセミナーで中心的な役割を果たすかわら、日本語教師向けのウェブサイトの作成、メーリングリストの運営に当たり、日本語教師向けの広報、支援を行っている。

※1：吉林省教育学院と延辺教育学院の主催で、2003年3月に延吉市で開催されたコンクール。7名の中高校教師による模擬授業が行われ、その中から優秀教師が選ばれた。

■私が見た研修生のその後

◆有馬淳一(国際交流基金北京事務所日本語教育アドバイザー)

私が講師として初めて、この研修会に参加したのは、2002年8月の黒龍江省ハルビンでの研修会だった。それが最初で最後の機会だったため、私が現場の教師の皆さんと時間を共有し、この研修会のすばらしさを肌で感じることはできなかったのはごくわずかでしかない。

しかし、7回にわたって、吉林省、黒龍江省、遼寧省、内蒙古自治区の各地で行われ、延べ550人の中高校日本語教師が受講したこの研修会が残した成果は、今でもはっきりと感ずることができる。

例えば、こんなことがあった。出張先で「十佳日本語教師授業コンクール」※1という模擬授業の発表会に参加したときのことだ。

ある教師が、模擬授業の冒頭、復習の活動として、既習語彙の「ビンゴゲーム」を取り入れていた。教室活動としてビンゴを紹介するのに、まず中国人教師たちにビンゴのやり方を理解してもらうのが一苦労だという話を以前日本人教師から聞いていたので、とても意外な感じがしてその様子を見ていた。

発表会后、校舎の出口で、ちょうどその“ビンゴの先生”と出くわしたので、「ビンゴ、おもしろかったですよ」と声をかけたところ、「去年の夏にハルビンで有馬先生に教わりました」と言われて驚いた。そして、そう言われてとてもうれしかったことを今でもよく覚えている。

国際文化フォーラムの「中国中高校日本語教師研修会」が一つの区切りをつけた後も、国際交流基金派遣の日本語教育専門家やジュニア専門家らが、現地の教育機関と協力する形で、現職教師を対象とした研修会を行っている。規模は小さいものの、一つの場所に参加者が集まって合宿型研修会を開くという形は、7回続いた“フォーラムの研修会”がモデルになっているといえるだろう。

私たちの研修会に参加した教師で、「1999年の延吉研修会に参加しました」「2001年の瀋陽の研修生でした」と自己紹介する人がときどきいる。もしかすると、この人たち、われわれの活動を“フォーラムの研修会”だと思っているんじゃないだろうかなどと嫉妬の気持ちも少々抱きつつ、中国の中高校の日本語教師たちが、“フォーラムの研修会”に参加できたことを誇りに思い、そこで学んだことを今もしっかり生かしてくれていることに大きな喜びを感じる。

講師から見た研修会



本田弘之(ほんだ・ひろゆき)

青年海外協力隊員として中国の大学で日本語を教え、その後、TJFの専門員、杏林大学大学院を経て、杏林大学教員となる。中国中高校日本語教師研修会の講師を初回から最終回まで務める。TJF発行の研修会用教材の作成に中心メンバーとして加わる。中国の中高校日本語教師向け情報誌『ひだまり』(TJF発行)のコーナー「日本語をみがこう」を執筆(1999～2004年)。

■私が実感した研修会の成果

◆本田弘之(杏林大学教授)

私は2002年春、黒龍江省のある朝鮮族中学に滞在していた。ある日、教室の外を通りがかった私は、その教室から洩れてくる声を聞いてうれしくなった。担当教師が、実に堂々と日本語による直接法で授業をしていたからである。

私は7回の研修会のすべてに参加する機会を得たが、はじめのうちは、参加者に「日本語教育」より「日本語」の研修を求める気持ちが強かった。参加者の関心は「授業で何を教えるか」に偏っていたのである。

しかし、研修会が回を重ねるにつれ、参加者の意識は変化していった。日本語そのものより、教室での授業技術に対する関心が高まっていった。「どのように教えるか」に興味をもちはじめたのである。

これについては、研修会を重ねたことの効果が大きかったと考えている。というのは、研修会実施4年目ぐらいから、各校の職員室で、研修会に参加した教師が、未参加教師より多くなったからである。参加者が自校に戻り、研修会について同僚と話をする場合、「講師がどのように授業を進めたか」というのが話題の中心になることが多い。そのことによって、「授業の方法・技術」を強く意識するようになったのではないかと思うのである。

さて、私は2002年度、黒龍江省教育学院にお世話になり、黒龍江省各地の中学に滞在する機会を得た。冒頭に述べた授業を聞いたのは、そのときである。この中学も7名の教師全員が研修会に参加した経験をもっており、先生方の「授業の方法・技術」に対する関心が非常に強かった。このように、7回の研修会は、日本語教師の教授力の向上に大きく貢献した。

しかし、実際に教育現場に身をおいてみると、まだまだ解決しなければならない問題は多い。例えば、研修会では「受験日本語教育」に対して批判的な空気があったが、「受験日本語」が、受験で不利になりがちな少数民族の教育や、貧困地区の進学率向上に多大な貢献をしているのが現実である^{※2}。それを軽視するのは、やや問題があった。また、現場では大人数のクラスや、学生の学習意欲に極端な差があるクラスがあり、先生方は多くの苦勞をしていたが、そうした教育環境を主催者側が十分に把握できていなかったところもある。

研修会が終了した今でも、まだ、考えなければならないこと、支援すべきことがなくなったわけではないのである。

※2：このことについては張石煥氏の原稿(100頁)に詳しい。

講師から見た研修会



山口敏幸(やまぐち・としゆき)

国際交流基金派遣の日本語教育専門家として北京赴任中に実施された第1回中国中高校日本語教師研修会から計4回講師を務める。TJF発行の研修会用教材の作成に中心メンバーとして加わる。中国の中高校日本語教師向け情報誌『ひだまり』(TJF発行)のコーナー「教授法を学ぼう」を執筆(2003～2004年)。2001年に国際交流基金から香港総領事館に派遣され、香港の日本語教育に携わる。

■交流促進を実感

❖山口敏幸(元国際交流基金派遣専門家)

私は、この研修会に講師として4回参加したが、今振り返ってみると、大変密度の濃い、熱い時間を過ごさせていただいたという印象をもっている。

研修会には、毎回、各地から中高校の日本語教師が夏休み返上で集まってきたが、皆一様に研修会に対して大きな期待を寄せていた。研修会に対して期待度が高いということは、裏を返せば、現場で教えるのに大変苦労しているということで、そうした気持ちに何としても応えなければと身が引き締まる思いだったのをよく覚えている。

スケジュール上は2週間という短い期間でありながら、その中にぎっしりと詰め込まれたカリキュラムは、講義がすべて日本語で行われるということもあって、参加した研修生にとっては大変辛く、厳しいものであったと思う。しかし、ほとんどの人が脱落せず、最後まで研修を受けたということは、研修内容がその当時の先生方のニーズに合っていたということと、主催者の周到な準備と運営があったこと、そして、何より、研修生の教育に対する熱意に、日中双方の講師、スタッフが熱意で応えたからだろうと思う。

そうした熱意のもとで進められた研修会は、当然ながら日中双方の関係者に一体感をもたらし、講義の時間以外でも交流が進むことになった。閉講式が終わった後のパーティの盛り上がりと涙の別れは、まさに研修を通して心の交流があった証だろう。

研修会に集まった研修生は、それまで一度も日本人と会ったことのない人が多く、歴史的な背景から、たとえ自ら戦争を経験していなくとも、語り継がれた話から、日本人は怖いという先入観をもっていた人もいたようだ。また、彼らの教育のスタイルが、教師は威厳をもって生徒に一方的に知識を伝授するというようなものであったため、研修生という「伝授される」立場になったことによって、特に日本側講師に対してはさらに怖さを増幅させていたようだった。

しかし、研修会が進み、日本人講師、スタッフとの交流が進むにつれて、彼らの日本人に対するステレオタイプな印象は大きく変わっていき、教師は威厳をもって生徒に知識を伝授すべきだという古い教育観を見直す気持ちも生まれたようだ。研修生が研修を通して、それまで日本人に対してもっていたステレオタイプな観念や古い教育観を変えるきっかけになったとすれば、この研修会は日中文化交流の促進という点でも、大きな成果を上げたことになるだろうと確信している。

講師から見た研修会

■私が出たもの

◆杉山充(元青年海外協力隊日本語教師隊員)



杉山充(すぎやま・みつる)

青年海外協力隊日本語教師隊員として中国の高校に赴任。最終回の中国中高校日本語教師研修会の講師を務める。帰国後大学院に進学して、日本語教育の研究に従事するかたわら、TJFが2004年に実施した第1回全中国小学校日本語教師研修会の講師を務める。中国の中高校日本語教師向け情報誌『ひだまり』(TJF発行)の「『素質教育』をめざした授業づくり」を執筆中。

私が初めて講師として参加したのは、2002年にハルビンで開催された研修会であった。当時私は青年海外協力隊員として大連市第一中学に派遣されていた。赴任校では高校生の日本語指導に携わっていたが、現場経験の浅い私にとっては毎日が試行錯誤の繰り返しであった。そんなときに本研修会に参加したことは、その後の協力隊活動を進めるうえで大きな転換点となった。

研修会中は、聴解とコミュニケーション表現の授業を担当した。聴解授業に先立ち、国際交流基金日本語教育アドバイザーの有馬淳一先生から聴解授業における教室活動プランやタスクの組み立て方に関する説明を受けた。また、実際に授業を見学していただきアドバイスを受けることもできた。コミュニケーション表現の授業では国際交流基金青年日本語教師の稲田登志子先生とチームティーチングを行った。準備の段階では授業の流れやロールカード作成などについて、また授業後はその日の反省点や改善点について意見交換を行った。空き時間を利用して他の講師の授業を見学することもできた。このように自分の授業を専門家に見学してもらったり、逆に他の先生の授業を見学したり、あるいは授業に関して意見交換したりする機会は、普段日本人一人という環境にいる私にとっては、自分の授業を内省したり新たなアイデアを得る絶好の場となった。

さらに、講師間の人脈を築けたことも、その後の協力隊員としての活動の幅を広げることとなった。2003年冬に青年海外協力隊が中心となって大連市の中高校日本語教師のために行った研修会では、課程教材研究所の唐磊先生と大船ちさと先生(研修会講師経験者)に依頼し、特別講義を担当していただいた。また、青年日本語教師の稲田先生、中新井綾子先生にも講師として参加していただき、研修カリキュラム作成の段階から貴重なアドバイスをいただいた。赴任校で普段の授業を進めるうえで必要な作文指導法などに関して、杏林大学の本田弘之先生からアドバイスをいただくことができた。大連市で月一度行っていた教研活動(教育研究活動の略)についても、有馬淳一先生から活動内容に関してさまざまな助言をいただいた。ハルビンでの研修会に参加していなければこのような方々と知り合うことはなかったであろう。

今振り返ると、私はハルビンの研修会に講師として参加したのであるが、同時に研修生と同じように教授法に関して多くのことを学び、また講師間のネットワークを広げることができた。そのお陰で協力隊活動もより充実したものになり、中国の中等日本語教育の発展にわずかながらでも寄与できたと信じている。

(文中の所属、肩書きは当時のもの)

講師から見た研修会



谷部弘子(やべ・ひろこ)

1980年代から中国の日本語教育に携わり、2000年から3回にわたって中国中高校日本語教師研修会の講師を務める。現在、ことばの男女差に関する研究、中国の大学日本語学習者のための教材開発に関する研究などに従事。

■研修の成果を性急に求めてはいけない

◆谷部弘子(東京学芸大学教授)

研修会期間中はともすると、意欲的で柔軟な若手教師vs頭の固いベテラン教師という構図ができてしまうのだが、両者に同じ目標を設定することに無理があるのではないかと思う。今の私に若手講師と同じことを求められても太刀打ちできないであろうし、逆にこの年齢になった私のよさは若手講師には発揮できないのではないかと思うのだ。

同じことが研修生に対してもいえるのではないだろうか。年配の研修生の中には、「コミュニケーション活動もゲームもおもしろいけれど、毎回できないな」という気分もあるのではないだろうか。例えば、私自身、学習者の発話を引き出すような授業をするには、若いときと違い意識的に気分を高揚させないとできなくなってきた。ましてや、中高校の中堅教師として果たすべき役割は、日本語を教える以外に多々あるはずだから。より良い授業をするためには、教師自身の内的な「気づき」、変化が必要である。しかし、その「気づき」を誰もが行動に移せるわけではない。研修の成果を、どの研修生にも一様に性急に求めてはいけないと思う。

(研修会後のレポートをTJFで編集しました)



中新井綾子(なかあらい・あやこ)

青年海外協力隊日本語教師隊員、国際交流基金派遣ジュニア専門家(派遣当時:青年日本語教師)として中国の中高校日本語教育に携わる。赴任中に実施された中国中高校日本語教師研修会の講師を、1999年より3回にわたって務める。中国の中高校日本語教師向け情報誌『ひだまり』(TJF発行)に寄稿。2003年から、課程教材研究所で、中国の中高校日本語教科書の制作に関わる。

■さまざまな形の「自ら学ぶ場」を

◆中新井綾子(元青年日本語教師)

私はこの研修会で、多くの教師に出会った。今でもその時の様子が思い浮かぶ。2週間という長くて短い研修会が始まった直後は、研修生の緊張した顔が並んでいる。もちろん、私も相当緊張している。それが2週間たつと、顔が緩んでいって、最後には涙を流して別れる場面となる。

青年日本語教師だった2年間は、吉林省内の学校を回ったり、セミナーを開いたりしたが、行く先々で研修会で出会った教師に再会したり、逆にセミナーで出会った教師に研修会で再会したり、まるで研修会が人と人をつないでいるかのようだった。また、あちこちで「私は×年の研修会に出ました」「〇〇先生(講師の名前)を知っていますか」と合言葉のように言われた。その一方で、研修会のことをまったく知らない教師もいた。地方にあって情報を入手しにくい学校の教師だ。そのような地域で、教育学院がセミナーを開いたときの教師の真剣な眼差しは忘れることができない。

日本語教師がおかれている状況は、地域差、学校差、個人差が非常に大きい。それらの「差」にきめ細かく対応した研究会やセミナーなどを継続的に開いていくことが大切だと思う。また、そうした研究会やセミナーは「誰かから教えてもらう場」ではなく「自ら学ぶ場」とあるという認識をもって参加することが大切だと感じている。

講師の声：さまざまな交流、学びの場

●教育のあり方について考えた

教職員はじめ研修生の方々が、「日本人の先生方から、教育がどうあるべきかを学んだ」「今後は、詰め込み教育をやめて、生徒が楽しく学べるような教育をやりたい」とおっしゃったことには、逆にこちらが教えられました。単に日本語教育の問題だけでなく、教育というもののあり方について考えてもらうという意義も研修会にあったのではないのでしょうか。

(2001、内蒙古自治区通遼会場)

●中国側の熱意と日本側の思い

研修会成功の第一の要因は、中国側の熱意。そして、研修生の切実な思いを講師陣が重く受け止めたこと。また講師の中国や中国人に対する深い思い。TJFスタッフの働き。さらに、若い講師たちの体当たりの授業。若い講師は、中国語を理解し、中国の生活に順応している人たちだったので、はじめからスムーズに授業ができたように思います。これは、現地の事情を理解し、いっしょに仕事をするとする姿勢ができていたということです。このような研修会のありようとして重要なことだと思います。

(2001、内蒙古自治区通遼会場)

●若い講師に刺激を受けた

研修日程を組んでいたとき、私は「もっと若い先生方に活躍していただいたら」という意見を出したのですが、これは正解でした。いろいろな授業を見学させてもらい、大変いい刺激を受けました。ある若手講師から授業案をもらいましたが、そこには教育実習さながらに、時間配分や手順が細かく書かれていました。1時間の授業のために毎回かなりの時間をかけていたのでしょう。これはほかの若手講師も同じだったにちがいません。こうした姿勢に、私は素直に敬意を表したいと思います。

(2000、吉林省長春会場)

●講師間の信頼関係が重要だ

中国側との信頼関係だけでなく、日本側内部でのスタッフと講師の間、ベテラン講師と意欲的な新人講師との間の信頼関係が研修会を成功させる大事な要素なのだと感じました。

(2000、黒龍江省ハルビン会場)

●自分を見つめることができた

この研修会に関わる中で得たものはたくさんあります。その一つは、研修生や講師陣との付き合いを通して「個性を見つめる」ことができたということです。実際、連続20日間ほぼ毎日三食一緒にし仕事をし、つまり起きてから寝るまで集団で生活する、こういった多くの時間を共有すると、個々人の良さや短所が非常によく見えてきます。そして、それ以上に客観的に自分の姿、己を見ることができました。普段の生活ではなかなか

できない、自分というものを客観化、相対化させて観察することができたのです。そして、はっきり分かった(再認識した)ことは、「自分は人間が好きなんだ」ということです。

(2002、黒龍江省ハルビン合同会場)

●多くの先生と出会った

熱心な中国人の日本語の先生たちに会えたことは幸せなことでした。また、主任講師の先生をはじめ、大勢の先生方と出会ったこと、特に若い方たちと話せたことを嬉しく思いました。

(2001、吉林省長春会場)

●自分自身が多くのことを得た

今回の研修会は、何よりも自分自身にとって得ることの多いものでした。吉林省の各地で日本語を教えている先生方にお会いできて、自分が関わった1年間では分からなかった中国の中等教育の現状を垣間見ることができました。例えば、一クラスの人数が多いことや、適当な教材がないという教育環境、またカリキュラムについても先生方と話ができました。今後自分自身がどう関わっていくか、改めて考えるいい機会になりました。また、研修生の熱心さにも脱帽しました。教師歴10年、20年のベテランでありながら、私たちの授業にも真剣に耳を傾けてくださり、少しでも自分自身のレベルを向上させようと努力されている姿勢に感動しました。

(2001、吉林省長春会場)

●研修生の熱意に感動した

研修生一人ひとりが本当に熱心で、頭の下がる思いでした。「このチャンスにしっかり勉強しよう」という気迫が伝わってきて、こちらも熱が入りました。

(2000、遼寧省大連会場)

●講師の熱意を感じた

研修前の講師を対象にしたオリエンテーションで、短期間でいかに成果を上げるかということを講師の方々が真剣に考えておられることがひしひしと伝わり、大変プレッシャーを感じました。しかし、同時にこういうメンバーに加えていただいたことに喜びを感じました。

(2000、内蒙古自治区フフホト会場)

●いろいろなことについて考え直すことができた

いろいろなことを考え直すきっかけになりました。また新たな気持ちでがんばろうという気持ちもわいてきました。いろいろな先生との話からいろいろな刺激をうけたこと、問題にぶつかるごとに、すぐ話ができて相談できる人が何人もいたことが大きかったと思います。

(2002、黒龍江省ハルビン合同会場)

(研修会後のレポートから抜粋、編集しました)

教員から見た研修会



■ 教師間の交流と行政関与の促進

◆ 張石煥 (黒龍江省教育学院日本語教員)

国際文化フォーラムおよび国際交流基金など関係機関の支援のもと実施した7回の教師研修会で以下に述べる四つの大きな成果を収めた。

まず、日本語力が向上したことである。日本語教師の多くは日本語を専門としておらず、途中から日本語教師に鞍替えした人も少なくない。したがって、教師たちの日本語力は高いとはいえないものだった。しかし、この研修を受けたことで、口頭表現、文法、教授法などの面でのレベルアップは顕著である。

次に、自信がついたことである。日本語教師たちは日本人から教わったこともなければ、日本人が話す日本語を聞いたこともない教師が多い。そのため、自分の日本語力に自信がなく、日本語を話す勇気もなかった。しかし、研修会で勉強したり交流したりすることを通じて、教師たちは日本語を話す自信をもち、勇気もわいたようだ。そのお陰で、教師たちに対する校長の信頼が高まり、保護者たちも日本の専門家に直に教わった教師たちに安心感を覚えるようになった。

三つめは、学校間の交流が促進されたことである。黒龍江省は中国の辺縁地域にあって、面積が広く、学校同士はかなり離れている。特に日本語を開講する学校の多くは、さらに奥地に点在しているため、交流はほとんどなく、閉鎖的な状況に置かれてきた。7回の研修会は、これらの学校の教師が集まり、情報交換、交流をするまたとない機会となった。

最後に、いい教材と参考書を得たことである。7年にわたる研修会ごとに、主催者から研修生とその学校に貴重な教材・参考書が贈られた。教師と学校にとって長年の教材・参考書の不足が緩和された。このように、この研修会は、その注目度、対象範囲の広さ、効果の大きさなど、どの面からいっても、これまでになかった研修会である。

国際文化フォーラムはこの研修会をスムーズに運営できるように、政府の外事部門、教育行政部門の関係者とたびたび直接接触し、その結果、研修会はこれらの関係部門から強力なサポートを得ることができた。会期中、国際文化フォーラムから派遣された担当職員は、教材や資料などを準備するなど、講師のサポート役を務めた。担当職員が過労で倒れたときには、われわれ中国側スタッフは大きなショックを受けた。研修会に関わった講師たちも、中国の日本語教育の発展のために心血を注いでくれた。苦労も多かったであろう。その講義のすばらしかったことはいまでもないが、ここで逐一紹介するのは割愛する。こうした方々の協力と支援があったからこそ、日本語教育が全国規模で急激に衰退しているなかであっても、黒龍江省の日本語教育は、依然安定した発展を続けているのである。

教員から見た研修会



■ 生きた言語を学び、交流を深める

❖ 曾麗雲（遼寧省基礎教育研究教師研修センター日本語教員）

7回の研修を通して中高校の日本語教師の日本語力、日本語教授力、授業運びなどすべての面で明らかに向上が見られた。今では日本語教師たちは日本人に会うことを怖がらず、あらゆるチャンスを捉えて日本人と接触し交流しようとしている。これは、研修会で授業を担当した講師が国際文化フォーラムによって慎重に人選され、中国の日本語教育に対して熱意と愛情と強い責任感をもつ優秀な講師ばかりであったからだ。これらの講師が担当した授業では、中国の国情や中国の日本語教育に対する理解が十分に発揮され、それぞれの能力と教材も十分に生かされた。

これまでの研修内容を見ると、カリキュラムデザインは知識伝授型で受験対策教育を主にするスタイルから、教師自身の日本語力の向上、日本語教授力の向上をめざすスタイルへと絶えず変化してきたことが分かる。研修を受けた日本語教師の教育理念や考え方においてそれぞれ一定程度的変化が見られた。研修を行う前は、日本語の授業は基本的に中国語で行われ、日本語を耳にすることはほとんどなかった。また、授業の中心はこの文法をどのように説明するか、その空欄をどのように埋めるかなどというものであり、教師も生徒も文法学習を重要視していた。そして、日本語の発音やアクセント、日本語を使ったコミュニケーションなどを軽視していた。そのため生徒は、何年日本語を学んでもほとんど聞き取れず、話すことができなかった。俗に言う「口の利けない日本語」になっていた。研修会の開催や新しい「課程標準」の制定に伴い、日本語教師は新しい教育理念を取り入れるようになり、自ら研修会で学んだことを積極的に自分の授業の中で実践していった。教室では、生徒は教師が授業中に使う日本語を耳にするようになっただけでなく、先を争うように日本語を使って自分の考えや気持ちを表現するようになった。このようなさまざまな理由から研修会の成果は大きかったといえる。

また、研修会を通して、日本語教師は日本人講師から生きた日本語の知識や指導技術を学んだだけでなく、普段、本からは知りえない「言語の文化背景」も深く知ることができた。また、日本人講師の勤勉な精神や授業で手を抜かない態度も学んだ。

さらに、研修会は、漢族の学校、蒙古族の学校、朝鮮族の学校がお互いに交流する良い機会となった。各民族学校の教育理念や教育方法はそれぞれ異なるが、お互いに長所を取り入れ、短所を補うことができた。研修会は中国の日本語教師に日本人講師と交流する機会を提供しただけでなく、中国の日本語教師に自己実現の場を提供してくれた。日本語教師たちはこのような研修会が継続して開催されることを望んでいる。

教員から見た研修会



■研修生の意識変化を促す

❖ 尹勝傑 (吉林省教育学院日本語教員)

7回の研修会を通して、吉林省では100人あまりの教師が研修を受け、その後、日本語教育の現場で活躍している。研修会は研修生の日本語レベルを高めただけでなく、視野を広げ、彼らの意識に新しい変化をもたらした。私はこれがもっとも大きな収穫の一つであったと考えている。

研修生たちは現在、各学校の日本語指導の中心的存在であり、他の教師の手本となっている。多くの研修生が研修会のことを思い起こすたびに感慨を新たに、担当講師に傾倒している。私はたびたび教師たちから「いつまた同じような研修会が開催されるのですか」という質問を受ける。まだ研修会に参加したことのない教師の願いはもっと強い。

研修会が中国中高校日本語教育に及ぼした影響は、その多面性からいっても、またその深さからいっても極めて大きい。これは決して言い過ぎではない。我々は国際文化フォーラムおよび関係機関に心から感謝している。そして、今後も何らかの形で協力が得られることを期待するものである。



■日本人に教わって、日本語力が向上

❖ 陳弘法 (元内蒙古自治区教育厅外国語教員)

2000年夏と2001年夏に、それぞれフフホト(内蒙古教育基金会中日友好日語研修センター)と通遼(カンチカ第二中学)で中高校日本語教師研修会が開催され、計46名が参加した。日本人講師が教鞭を執り、研修期間は約2週間。1999年までの研修会参加者をあわせると、自治区内の日本語教師ほぼ全員が研修を受けた。これらの研修会は自治区の中高校日本語教師に大変役立った。それまで大部分の教師は日本人に会う機会もなく、直接教わる機会はなおさらなかった。研修を通して、教師たちは聴解、発音、特に会話能力の面で大きな進歩を遂げた。日本文化の理解や日本語教授法の面でも大きくレベルアップした。

カンチカ第二中学の劉海峰先生の会話能力が驚くほどの勢いで高まったのも(今ではカンチカを離れて別の都市で活躍しているが)、数回の研修会に参加したことによる。同じ学校で教えているもうひとりの最年少教師、張敬岩先生も研修会に参加したお陰で、今全国の日本語教師の中でちょっとした有名人になっている。2004年、人民教育出版社が中学『日語』を使った4コマの模擬授業が収められたCDを制作した。そのうち1コマが張敬岩先生によるものである。張敬岩先生が将来どの学校で教えようと、彼女の進歩は研修会に始まり、研修会が彼女を大きくしたことは間違いない。

TJF スタッフが経験したこと・考えたこと

次世代への外国語教育にかける夢

本プロジェクトの基礎を築いたのは、日本側ではTJF事務局長(当時)の牛島通彦氏だった。持ち前のエネルギーあふれる行動力と熱意で中国側の信頼を得ていった。第3回以降、本プロジェクトの定着と発展期に事務局長だったのは高崎孝氏だった。大学で中国語を専攻し中国事情に通じていた強みを存分に発揮した。ご両人ともお酒が減法強かったことは、中国で仕事をするのに大いに役立った。私は両局長の下で全7回の研修会の企画・運営にあたった。

今でも忘れられないのは、1995年に牛島氏とともに研修会の事前調査のため北京に赴いた時のことである。後に研修会の共催相手となった中国側の日本語教育関係者と熱い議論を交わした。日本側は調査にばかり来て中高校のために何もしないではないかと言われた。胸に響いた。たとえ小さな研修会であっても必ずやると約束した。それから7年後、研修会の幕を下ろす任を負ってハルビン入りした。どこまで使命を果たすことができたかわからないが、北京での約束は何とか守れたと思う。

この大プロジェクトをやり通すことができたのは、紛れもなく最前線で細かい調整や手間隙かかる作業を、黙々と、あるいは紅潮した面持ちでこなしてくれたスタッフのお陰である。毎年研修会の舞台裏では涙ぐましい奮闘劇が繰り広げられたが、それだからこそ研修会は各人の脳裏に深く刻まれ、大きな仕事を成し遂げた後の充実感が味わえたともいえる。毎回研修会最終日の夜に行われた歓送宴では、研修生全員とともに歌い踊り別れの涙を流すのが常だった。

7年間、私が日中の日本語教育関係者とともに共有したかったのは、日本語教育を豊かなものにする事だった。「日本語を教える」という日本語教育から、「教育としての外国語(日本語)」の可能性を追求すること、すなわち未知の外国語を学ぶことで、人生で出会える人の輪が広がり、自他を含む人間理解が深まることの素晴らしさを共感したいと思ってきた。そして、その仕事は日中で今も続いている。 中野佳代子

「中国」のなかの「朝鮮」

「環日本海諸国図」という地図がある。私たちが見慣れている地図は、南北に長い日本列島の西に朝鮮半島があり、さらに西に中国大陸がある。天気予報でおなじみの地図とは違って、「環日本海諸国図」は方位が逆転している。日本列島弧が上にあって、朝鮮半島が下から突き出ているように見える。

日本で「日本海」と呼ばれている海が、韓国や北朝鮮で「東海(トンヘ)」になることを知ったのは、高校3年のときだった。そのときの衝撃が、TJFで韓国朝鮮語(以下、韓国語)教育の事業を展開する原動力になっていると思う。

1996年後半から1997年8月まで、私はTJFで中国の日本語教師研修事業を担当した。併行して、日本の高等学校の韓国語教育の調査事業に着手していた。第2回研修会を半年後に控えた1996年12月、極寒の中国東北部に出張した。北京を皮切りに、大連、瀋陽、延吉を回り、北京に戻った。北京以外は初めての訪問である。

中国東北部は歴史的に日本と関係の深い渤海(698～926年)の故地であり、旧満州の地である。そこで日本語を教えている教師の研修事業を軌道に乗せるための出張であり、日本語教育の現状調査を東北三省の教研員に委託する準備作業を兼ねていた。

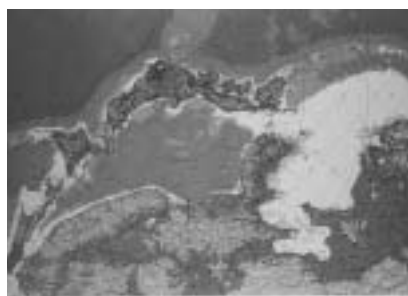
北京から張国強さんと一緒に大連に向かった。吉林省、遼寧省、黒龍江省の日本語教研員4名が、長春、瀋陽、ハルビンから大連に集まった。大連市教育学院で第2回研修会の打ち合わせと現状調査事業について協議するためだった。大連の日本語教研員を加えて5名の教研員のうち3名が漢族、2名が朝鮮族だった。中国語がほとんどできない私は、朝鮮族の人とは韓国語で会話をした。20年以上も使う機会がなく、さび付いてしまった言葉の感覚を、彼らと話しながら少しずつ取り戻していった。

■韓国という「中国語」

「中国語」は広い意味では、ポルトンファ(共通語)、広東語、上海語などの「漢語」のほか、韓国語やチベット語、モンゴル語を含む言葉である。その意味で私は韓国語という「中国語」を話したことになる。朝鮮族の日本語教師たちは「中国語」の漢語と韓国語のほかに日本語を話す。

瀋陽から延吉には飛行機で行った。瀋陽空港のカウンターからは、漢語より韓国語の方が耳に入るようになった。飛行機の機内放送も韓国語と漢語だったと思う。乗客の多くは朝鮮族の人たちだったようだ。延吉空港は闇夜に沈んでいた。その暗さが北朝鮮を思わせた。

空港から延吉の市街まで、車窓の光景は暗く沈んでいた。電力事情が悪かったのだ。赤や黄色のネオンがぼんやり浮かぶ町並みは、1973年12月に私が初めて訪ねたソウルにどこか似ていた。ここは「朝鮮」なのだと思った。実際、朝鮮族には咸鏡北道(ハムギョンブクト、北朝鮮東北部の中朝国境と日本海に挟まれた地域)出身者が多い。



環日本海諸国図(富山県企画、日本地図センター作製、1994年)

延吉の人たちにも韓国語が通じた。私の韓国語は南朝鮮訛りだと言われ、あなたたちのは北朝鮮訛りだと言いつつ笑い合った。そのやり取りのなかで、韓国語の生命力の強さを確

TJF スタッフが経験したこと・考えたこと

認していたのだ。

日本語教師研修会の参加者の約半数が朝鮮族である。それを踏まえて、1997年から研修生の母語別に発音教材を作るようになった。画期的なことだった。

「環日本海諸国図」は朝鮮半島から見た日本列島の地図であるとともに、中国の東北部から列島弧を見た地図でもある。それはまた朝鮮族の人々が日本を見る視点でもある。

小栗章

研修会で築いたネットワーク

1998年の第3回研修会を除いて、1996年から2002年まで、6回の研修会に事務局として関わった。どれにも思い出があるが、中でも1999年に吉林省の延辺教育学院で行われた第4回研修会がもっとも印象に残っている。1999年は、三省合同開催だった研修会が省別開催になったこと、それまで研修会の期間中に行われていた、日本からのゲストが担当する文化体験講座や特別講演などのイベントがなくなり、講師、研修生、日中事務局が2週間合宿生活をするという、極めてシンプルな研修会がスタートした年だった。それまで2回の研修会で、一通りの異文化衝突を経験し、中国側とのコミュニケーションもある程度とれるようになってはいたものの、事務局に常駐するTJFスタッフが一会場にひとりとなり、少々不安を抱えながら日本を離れたことを覚えている。

■最高のチームワーク

北京空港で中国在住の講師3人と合流するはずが、離陸時間になってもひとりが現れず、そのまま北京空港を飛び立った。延吉の空港に着くと、直前に降った大雨で街のあちこちが冠水、おまけに落雷による停電で、講師を歓迎するために開かれた夕食会は、キャンドルディナーとなった。その最中に、遅れた講師がやっと到着。さんざんなスタートに、この先どんなことがあるのだろうという不安が募った。しかし、そんな不安を吹き飛ばし、研修会を乗り切るものにしてくれたのは、講師のチームワークと機動力だった。

研修会の講師陣は、そのためにつくられた即席チームであるため、会場で初めて顔を合わせる人たちもいた。それ

ぞれ専門家として日本語教育に携わっているものの、教師を対象にするのは初めて、しかも短期間で成果をあげなければならないという重い責任を担っている。自分の担当する授業をこなしていくだけでも大変である上に、講師間に意見の食い違いがあれば、主任講師と事務局には、その調整という大きな仕事が入りかかってくる。ところが延吉会場の6人の講師たちは、そのとき初めて一緒に仕事をするとはいえないくらいのチームワークで、次から次へと研修内容を充実させるための提案を出し、実行に移していった。

コミュニケーション表現の授業では、自然な日本語をわかってもらうためには会話例を録音したテープがあったほうが良いと誰かが言い出せば、事務局の部屋やホテルの一室が録音スタジオになり、講師たちがひとり何役もこなすにわか劇団が結成された。ロールプレイにリアリティを出すために、手作りの映画チケットやスケジュール表も作った。また、教師と学生という関係でなく、対等なコミュニケーションをとることが必要だろうということで提案されたのが「茶話会」だった。お菓子をつまみながらのおしゃべりは、講師と研修生の距離感を一気に縮めた。延吉会場でのこうした工夫は、いずれもその後の研修会で取り入れられるようになった。

「チームワークは力なり」。延吉の研修会では、身をもってそのことを体験できたし、そのチームの一員として仕事ができることを幸せに思う。

■教職員や研修生たちとのネットワークを活用して

また、研修会で築いた教職員や研修生たちとのネットワークは、私にとって大きな財産となった。私は今、日本の高校における中国語教育事業を担当している。研修会でも、日本の高校の中国語教師と中国の高校の日本語教師を校にした友好クラス交流の橋渡しをしてきたが、そのほかにも中国語の授業に役立つ素材や教材の提供、中国語を話す人々との交流の機会をつくることにも取り組んでいる。このときに、頼りになるのが教職員や研修生だ。

TJFは2004年、ホームページに中国の高校生の生活を紹介するTJF Photo Databank中国編を立ち上げ、現在1500枚の写真に掲載している。写真を増やすために、現在、5校に撮影協力を依頼しているが、そのうち3校は、研修生がいる学校だ。教職員が校長に協力を依頼してくれ、研修生が実際の撮影を担当してくれている。



第1回研修会で事務局の仕事を手伝ってくれた長春外国語学校の生徒たちと



第2回研修会準備のための事前出張で中国側関係者と打ち合わせ



第3回研修会会期中の休息日に松花江下りをした船上で教職員、研修生たちと

TJF スタッフが経験したこと・考えたこと

また、TJFは複数の高校生訪中プログラムに関わっているが、プログラムで重要な位置を占めるのが、現地の高校生との交流だ。つい最近も、新しい交流校を探すため、長春の二つの学校を訪問した。いずれも研修生がいる学校だ。

7回の研修会に参加した523人も研修生が各地にいる。今後日本の高校中国語教育事業を進めていく上で、こんなに心強いことはない。 水口景子

「ぶつかりあい」を経て

1回目から4回目まで、研修会に関わった4年間は、自分とは違う社会の仕組みのなかで生きる人たちと、文字通りがっぷり四つに組んで研修会をつくりあげていった濃密な日々だった。中国側のスタッフはとても頼りになる存在で、物心ともに支えられ助けられたことは数えきれないほどあり、一人ひとりの顔を、感謝の気持ちとともに思い出す。とはいえ、きれいごとだけではすまなかった。2週間という限られた研修期間のなかで毎日の研修を円滑に進めていくために、「使用予定の機材が教室にない!」「予定していた研修生や発表者が来ない!」「教材が届かない!」「食中毒がおきた!」「洪水が起きた!」など、退屈している暇がないくらいにおそいかかってくる突発事項に待たなして対応しなければならなかったのである。日本側と中国側、事務局と講師、主催者と研修参加者のあいだで意見や要望の食い違いがあっても、「ま、ま、とりあえず少し冷却期間をおいて客観的に考えてみましょう!」などと優雅なことを言っている時間はなく、「わいのわいの、ぎゃあぎゃあ」言いながらも何とか折り合いをつけ前進していく日々だった。当然、常に冷静さをよそおい、クールに仕事をこなすなんてカッコいいことをやっている余裕はなく、みな自分の豊かな人間性(?)を大いに発揮しながら仕事をしていた。もちろん遠慮もあったが、基本的にはお互いに言いたいことを腹にためず、口(や態度)に出しながら仕事をするという、なかなか得がたい経験をさせてもらったと思う。

■衝突と歩み寄り

今思うと、とくに初期の頃は、「とにかく実務に徹したい」日本側事務局スタッフと「日本からのお客様をきちんともて

なしたい」中国側事務局スタッフが考え方の違いでぶつかることがよくあった。「お客様」とは、講師や私たち日本側スタッフのことである。

その一つが、「宴会問題」。講師やスタッフが途中で合流するたびに、全講師、全スタッフが参加して歓迎の宴会が開かれた。しかも、今日は中国側事務局、明日は教育委員会などと、ホストを替えて毎晩のように宴会が繰り返されるのである。これには、講師からクレームが続出。「日々の授業の準備もあるし、長丁場なので体調管理も大切。もっと宴会をセーブしてくれ!」という切実な要望だった。私たちも、「研修会の主役は研修生。かれらが充実した研修を受けられるようにするのがいちばん大事!」という気持ちから、「講師も私たち事務局スタッフも、夜は明日の準備をしたいので、宴会には出たくない」とはっきり言ってしまい、少し険悪な雰囲気になってしまったこともある。しかし、中国側にしてみれば、せっかく日本から来てくれた人たちに快適に過ごしてほしいし、自分たちだって疲れているけれど最大限のもてなしの気持ちを表したいという思いがあったのだ。それを否定したのだから、せっかくの好意や誠意を受けとめてもらえないという気持ちになったのも当然だろう。この問題は何度かおこったが、そのたびに多少険悪なムードに陥りつつもやり取りを重ね、宴会の数をセーブしていった。私たちも、中国側の配慮や立場を理解し、設定される宴会にはなるべく気持ちよく参加するよう心がけた。

宴会に限らず、こちらのやり方を一方的に押しつけてしまったのではないかと思うことはいくつかある。教室に必要な備品がそろっているかどうかを常に事前にチェックするとか、到着する講師などの車の手配を事前に表にしておいてきちんと管理するとか、とにかく細部にわたって、事前にきっちり準備することを求めた。もちろん、内容を充実させるためには周到な準備が必要だと今でも思う。だが、中国側事務局にしてみれば、「日本側はあまりにも細かいことばかり指示する。教室に備品がなければ、隣の教室からもってくればいけないじゃないか。車だってそのときに融通をきかして手配すればいい」と思っていたことだろう。このように、どちらかが完全に正しいといえないようなことは細かいレベルでもたくさんある。相手が大切だと思っていることを理解し、ときにはぶつかりながら折り合いをつけていくしかないのだろう。



第3回研修会の事務局運営を手伝ってくれたハルビン市内の日本語教師と



第3回研修会でTJFから教研員に感謝状を贈る



第4回研修会の吉林省会場(延吉)の講師たちと

TJF スタッフが経験したこと・考えたこと

■「お客様」から「仲間」へ

また、私たちが「お客様」から脱却し、同じ「事務局スタッフ」という関係をつくるのにも時間がかかった。最初の3回は、日本側事務局には中国側事務局とは違う部屋が用意され、きれいな部屋には常に水や果物などがおかれていた。また、市内の移動などには、中国側がほぼいつも車を用意してくれた。私たちも、「同じ事務局スタッフなんだから」と口では言いながらも、そうした中国側の好意に甘えていた部分があったと思う。回を重ねていくうちにお互いに折り合いをつけ、少しずつ車の手配を頼むことも減り、事務局の部屋もいっしょになってコミュニケーションがとりやすくなっていった。そこまでいくのに、お互いを知る時間が必要だったのだと思う。

私にとって、研修会は、「異文化衝突」や「異文化間調整」を単に頭のなかで理解するのではなく、とてもわかりやすい形で実践できた貴重な経験として、一生忘れられないものとなった。

室中直美

日中の狭間で

TJFの仕事に関わったのは、青年海外協力隊日本語教師隊員として中国に赴任した1994年、南京で開催された第3回日本語弁論大会で講演したのが最初である。1997年TJFに入った時には、対中事業はすでに教師研修に切り替わり、第2回研修会の開催を控えていた。その対中事業のカウンターパートである各省の教員や学院関係者とはじめて面識をもったのは、第3回研修会を準備するために中国に出張したときであった。以来その方たちとは8年越しの付き合いとなり、共同プロジェクトの仲間として、友人として、果ては「娘」や「妹」として、可愛がられ、また助けられてきた。その中で仕事の大変さを知り、楽しさを覚え、人の温かさを身に沁みて感じた。こうした経験は、この仕事を続けていく原動力となり、一生の財産となっている。

プロジェクトの主担当となったのは、省別開催が始まった年からである。1会場から3会場になったからといって、予算が3倍に増えたわけではなかった。従来に近い予算の中でこれを実現させなければならなかった。私としては、「これは、中国で開催する中国人教師のための研修会だから、中国の現状に合った条件で実施することは不可能ではない」と思った。今でも私は、ぎりぎりの運営予算内でのやりくりを中国側に強いた張本人として、教員に恨み言を言われている。「中国を知りすぎたせいだ」と。同じ理由で信頼されてもいるのだが。

■両方理解できることで感じるやりがい

教員と付き合うなかでよく、「これはあなたの上司に言わないでください」という前置きや念押しをされてから相談されることがある。「なぜ？」と訊ねると、「日本人と中国人はどうし

たって完全には分かり合えない。下手に話すと要らぬ誤解を招くのが落ちだから」とか、「中国人の面子に関わるから」などという答えが返ってくる。それも道理だ、と思う自分がいる。でも、話さなければ分かり合えない、とも思う。完全に分かり合えないが、分かり合える部分を多くしていくための努力が必要だと思っている。とかく「支援する側」と「支援される側」という構図は、中国側の「遠慮」と「自尊心」という二つの感情を刺激することは確かであり、逆に日本側に「感謝されて当然」という好ましくない感情を派生させやすくもする。これは青年海外協力隊時代から考えていたことである。だからこそ、この研修会を「文化交流事業」と位置づけることの意味は大きいと思う。TJFのスタンスを端的に表している言葉であるが、それ自体、日本側の自戒と中国側との対話を促す効果もあるように思うからである。結局、教員には申し訳ないが、「上司に言わないでください」と言われても、プロジェクトに関することは、ちゃんと上司に伝える。なぜなら、教員の言葉からは、状況を改善したい、問題を解決したい、日本側にもっと理解してほしい、という気持ちが汲み取れるからだ。もちろん、「遠慮」と「自尊心」を念頭におきつつ、「要らぬ誤解」がないように、「尾ひれ」をいっぴいつけて伝えるのである。これがきっかけになって日本側の中国理解が深まれば、という願いを込めて伝える。それが、中国と日本の両方で育った自分が担うべき役割だと思うからである。

■両方理解できるからこそその辛さ

とは言え、日中の狭間で困惑することもよくある。その端的な例が宴会。昼夜なく働く講師やスタッフに何とか感謝の気持ちを表したい、慰労したい、昼食は研修生と同じもの、夕食はほったらかしでは、はるばる日本から来た友人たちに対して、ホストとしての礼を欠く、ということで招待してくれる。しかし、講師は心身ともに余裕のない方が多く、負担でしかない。「またか」という顔をされる。中国は宴会が好きなんだから、という空気も流れる。こちらは学院側の苦心や好意も分かるし、講師の心身の負担も研修第一主義も分かる。でも断ってばかりもいられない。3回に1回は受けないと、ホスト側の面子がつぶれる。両方に申し訳ない気持ちで、ホスト側には「ご馳走はありがたいが、酒はほどほどに」とあらかじめ申し上げておく。それでも酒を勧めることが最上のもてなしとするのが東北の文化。素気なく断られて座が白けそうなのを見れば、たまには助け舟も出さなければならない。代わりに杯を受け、返杯して感謝の意を述べ、場を盛り上げてみる。でも、そこで感謝され、慰労される主役はあくまでも講師たちであって私であってはならない、と自分に言い聞かせる。文字どおり体を張り、気を遣いまくる宴会は正直疲れる。なのに、宴会が終わってある講師から一言、「私たちはあなたみたいにお酒に強くないから」と。「ああ 酒好きと 思われる身の 辛さかな トホホ」という気分になる。だからこそ、私の役割はまだまだ終わらない。

長江春子

2. 研修会後の状況と展望

中国中高校日本語教師研修会は、中国の初中等レベルの日本語教師に対する支援がほとんどない状況の下でスタートしたプロジェクトである。しかし、本研修会を継続して実施した6年の間に、当初は助成あるいは協力団体であった国際交流基金と国際協力機構(JICA)は、初中等レベルに対する支援体制を強化し恒常的な支援活動を展開するようになったこともあって、本事業に対してもより積極的に関わってくれるようになった。井戸掘り役を担った民間として、研修会が一定の成果を上げ現地側にも素地ができ、かつその後の恒常的な支援が必要な段階に移ったところで、資金力、組織力ともにすぐれた国際交流基金と国際協力機構に支援の中心をシフトできたことは幸運だった。

ここでは、研修会後の各省の取り組みやそれに対する支援を概観しつつ、今後の課題についても触れる。

(1) 初中等日本語教育への支援の強化

国際交流基金は、北京日本学研究中心(前身は大平学校)と東北師範大学中国赴日本国留学生予備学校の両機関だけに派遣していた日本語教育専門家を、1999年にはじめて北京事務所にも1名派遣し、事務所付き日本語教育アドバイザーとして、初中等レベルをも含めて日本語教育支援を展開するようになった。日本語教育アドバイザーは、中国中高校日本語教師研修会の第4回から第7回に講師として参加する一方、2000年からは年に数回、小中高校の日本語教師を対象とするセミナー^{※3}を中心になって実施している。また手紙や電話による日本語教育相談に日常的に対応しつつ、「215教師メーリングリスト」や「215教師ウェブサイト」を立ち上げ、中国で教えている日本語教師(日本語ネイティブ、ノンネイティブを問わず)との情報交換に努めている。その後、国際交流基金は、2001年から東北三省の教育学院に対しジュニア専門家(当時、青年日本語教師)の派遣を開始した。青年日本語教師は日本語教育アドバイザーに協力して上記セミナーを実施するとともに、配属先である教育学院の日本語教員

※3：国際交流基金北京事務所、中国課程教材研究所、各地の教育学院・教師進修学校などの共催、会期は3～4日間程度。事務所がある北京市内や東北地域以外の地域も対象としている。

2001年、黒龍江省研修会の研修生受付日、山東省の高校で日本語を教えている教師が突如会場に現れた。賈俊格さんである。「そんな遠いところからどうしてわざわざ」と尋ねると、国際交流基金が北京で開催した日本語教育セミナーに参加したとき、東北三省で本格的な中高校日本語教師研修会が毎年開かれていることを知り、自費でも聴講でもかまわないからなんとしても参加させてほしいと思って押しかけた、と言う。どの会場も参加者枠が決まっており、運営費もきっちり計算されていたが、黒龍江省会場の運営実務を担当する張石煥教員は、賈さ

んの熱意に動かされて、日本側主催者の了承を得たうえでその参加を認めた。

遼寧省の教員のところにも、全国会議などでたまたま研修会のことを知った山東省や福建省の中高校日本語教師から「東北地域の教師が羨ましい。南の地方でも研修会を開催してほしい」「東北の研修会に南の教師も参加させてもらいたい」という要望が寄せられていたという。東北地域に限らず、現場の教師はこのように研修の機会を待ち望んでいる。

(TJF)

と協力してその地域独自の教師研修や教研活動を行っている。

JICAは、もともと大学を中心に派遣していた日本語教師隊員を、1990年代初めから中等教育機関にも派遣するようになったが、派遣人数は1990年代後半まで年間1～5名程度にとどまっていた。しかし、2000年以降、派遣人数を倍増させ、2005年2月現在で、中等教育機関に派遣中の日本語教師隊員は15名(その他高等教育機関配属20名、社会人教育機関配属2名)になっている。隊員の活動は、配属先のカウンターパートをはじめ配属先の周辺地域も含む中国人日本語教師の育成や、配属先の生徒を含む日中の青少年間の相互理解の促進も視野に入れている。複数の隊員が配属された地域においては、隊員たちは連携し、地域単位での支援(ミニ教師研修会の実施、スピーチコンテストや日本祭りの開催など)も積極的に行っている。一方で、国際交流基金派遣の日本語教育アドバイザーやジュニア専門家が中心になって実施するセミナーや研修会にも協力している。

この二つの動きは、中高校日本語教師研修会後の初中等日本語教育支援において、大きな役割を果たしているといえる。2002年以降、TJFはこの動きを見守りつつ、上記2機関ではカバーしきれない部分に対し、中国側の要請に応じて引き続きフォローを行っている。具体的には、遼寧省および吉林省の教研員が企画し、ジュニア専門家の活動資金が導入できない活動、および現在、ジュニア専門家が配属されていない黒龍江省と内蒙古自治区の教研員が企画した資金的に当てのなない活動に対して、中高校日本語教師研修に関するものを中心に助成を行っている。

このように、日中の関係機関が協力し合い、また自然発生的に役割分担を行った結果、中高校日本語教師研修会の実施当初からめざしてきた教師研修の「現地化」が実現したのである。

(2) 中等教育レベルにおける日本語教育の状況変化

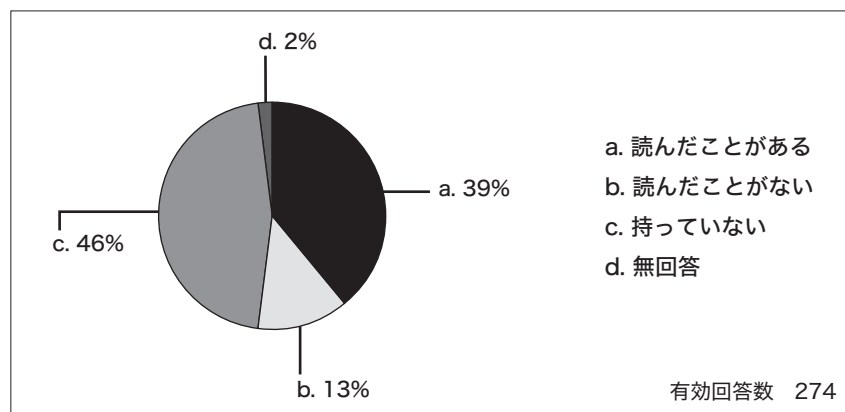
① 飛躍的变化を見せた中国の教育理念

研修会を実施した間に、中国の日本語教育事情は大きく変わった。「教学大綱」の改訂、そして「課程標準」への移行、それに伴って教科書も新しくなった。

理念のレベルにおいては、外国語教育は読み書き・文法中心からコミュニケーション志向へ、さらには素質教育重視へと大きく変わった。そうした流れのなか、大学入試は4技能のバランスを考慮するようになり、現場教師たちの意識と実践においてもコミュニケーション志向が少しずつ浸透するようになった。

しかし、まだ「課程標準」を手にしたこともなく、読んだこともない教師が多いようで(次頁の表参照)、今後は、「課程標準」の中心理念である「素質教育」をめざした日本語教育の現場レベルでの実現に向けて、啓発活動や研修活動を行っていくことが求められるであろう。

表：「『課程標準』を読んだことがありますか」



②中等教育段階における日本語教育の衰退と新たなニーズ

しかし、中等課程の日本語教育が理念のレベル、教科書のレベル、実践のレベルにおいて確実に大きな進歩を遂げたものの、中高校における日本語教育の規模は急激な勢いで縮小している。第Ⅱ章のアンケート結果がその一端を物語っているように、研修を受けた教師の中にも、やむを得ず日本語教育から離れた人や教師という仕事から離れた人すらいる。端的な事例としては、研修会のスタート当初は、黒龍江省ではハルビン市を中心に複数の漢族の中高校で日本語が実施されていたが、1999年あたりから新たな生徒を募集しなくなり、2001年になると全滅状態になった。かつてすべての中高校において日本語が実施されていた吉林省延边朝鮮族自治州においても、地方教育行政の政策が2000年あたりから日本語廃止に傾き、現在まで生き残った学校はわずかである。

国際交流基金が2004年に発表した「日本語教育機関調査・2003年」によると、中国における日本語学習者の総数は1998年の24万人から2003年には38万人に増えているものの、中等教育機関における学習者数は、1998年には12万人だったのが2003年には8万人に激減し、アメリカに抜かれて世界第3位から第4位に落ちている。実施機関数においても1998年には422機関だったのが2003年には302機関に減少し、教師の数も1588名から1106名に減っている。こうした背景には、受験資格を「英語既習者」に限定する大学や専攻が増えたこと、大学院の進学に英語が必須であること、コンピュータの時代には英語学習者が有利であること、欧米への留学機会が増えたことなどによる英語教育の隆盛が挙げられる。

新たなニーズに対応

研修会を開催している期間に、こうした中等教育における日本語教育の衰退が進んでいった。将来の展望がないものをなぜ支援するのか、と関係者から何度となく問われた。日本語が第一外国語として位置づけられている以上、英語に取って代わられることは時代の趨勢であり、実施校の数の減少はやむを得ないと認識していた。しかし、ある一定数の日本語教育

実施校を残したいとする教育行政の方針がある限り、また校長裁量で日本語教育を学校の特色として掲げたいとする学校がある限り、その拠点となる学校の灯を絶やすことなく日本語教育の質を維持する手助けをしたいと考えていた。また、競争の激しい英語よりも、日本語と文法的に似ている朝鮮語やモンゴル語を母語とする有利性を生かして高得点をとりやすい日本語を選択した方がいいとする朝鮮族や蒙古族教育関係者の主張もあった(100頁参照)。さらに、これからは英語ができて当たり前、プラスアルファの外国語を身につけてこそ付加価値が出るといった考え方もあり、第二外国語教育としての日本語教育が新たに芽生えてくるとも視野に入れていた。それまで何とか日本語教師を応援していきたいと思っている。

一方、日本企業の中国進出の勢いは衰えず、沿海地域を中心に日中間における経済交流や文化交流がますます盛んになり、観光者数も増えている。そうした地域の職業中学や職業中専における日本語学習者数はむしろ増加傾向にあり、教師不足と教師の質が問題になっている。今後は第二外国語としての日本語教育と職業中学や職業中専における日本語教育を視野に入れた支援や教師研修プログラムの実施が必要となってくるだろう。

(3) 研修会に代わる支援事業

① 中高校の教師とのネットワーキングと情報提供

TJFは研修会以外に中国の中高校日本語教師を恒常的にサポートする事業として、1999年に情報誌『ひだまり』(季刊)を創刊し、連絡先を把握している1200名の日本語教師に送付している。『ひだまり』は創刊当初から新教科書に出てくる文法や表現に関するQ & A、日本語の言語習慣や言語知識に関するコラム、コミュニケーション力を伸ばす教授法を扱うとともに、日本語学習と文化理解を統合した日本語の授業について提案してきた。2003年度からは「課程標準」が提唱する「素質教育」に照準を合わせ、日本の中高校生の生活や現代の文化事情を素材にしつつ、「素質教育」をめざした授業づくりを提案してきた。今の入試体制と学校体制では、『ひだまり』に掲載されている教室活動や教え方はすぐには取り入れられないという教師もいる。しかし、「ヒントを得た」「自分でも工夫してやってみた」「公開授業で『ひだまり』のアイデアを借りて成功した」という声も少しずつ聞かれるようになってきた。また、なかなか授業には生かさないでいるが、素材そのものを毎回興味深く読んでいる、という教師も多い。中高校教師の声や中高校教師の置かれている状況、日本語教育の環境などを念頭に置きながら、「素質教育」および文化理解や相互理解につながる日本語教育の一助となるよう、理念だけでなく実践に役立つ誌面づくりを地道に丁寧につづけていきたい。

また、インターネットやコピーがまだまだ普及していない中高校の現場に対し、現段階では紙媒体での情報や素材の提供は依然として重要であ



『ひだまり』本誌



すぐに授業で使えるようにワークシート例なども提供



現在の日本文化事情を写真と文章で紹介したカラー頁。授業の素材として活用

ると考え、2005年度からは誌面を一新してフルカラーにし、写真素材などによる効果向上を図る予定である。しかし、農村地域を含む中高校現場へのパソコンの普及は時間の問題だろうと予測される。したがって、「ひだまり」ウェブページの作成やメールによる「ひだまり便り」の配信も継続して行っていく予定である。

なお、国際交流基金北京事務所日本語教育アドバイザーによるインターネットやメールを活用した日本語教師支援が展開されている(93頁参照)。初中等教育機関と高等教育機関、日本語ネイティブとノンネイティブを含めているが、コンピュータの普及とともに、初中等のノンネイティブ日本語教師の参加が増えることを期待したい。

②小学校日本語教育支援の開始

東北三省では、中高校での日本語教育の生き残りをかけて、小学校での日本語教育の開拓と定着を図る努力がなされている。

黒龍江省では、2000年より、中高校で日本語教育が盛んな朝鮮族集住地域を拠点にして試験的に3校の小学校において日本語教育をスタートさせた。そして、これらの小学校の日本語を担当する教師を、2001年の黒龍江省で開催した中高校日本語教師研修会に参加させた。その後実験校の数を増やし、2002年研修会には9校の小学校から各1名の日本語教師を参加させている。中高校日本語教師研修会への小学校教師の参加は、カリキュラム、クラス運営、中高校日本語教師との日本語レベルの差などさまざまな問題があったが、黒龍江省側からの要望が強く、日中間で話し合った結果、これを認めた。

また、遼寧省では、1980年代後半から大連の漢族の小学校を中心に日本語教育が盛んになり、ピーク時は1万7000人の学習者数に達していたが、1990年代半ばからは英語におされて衰退していった。一方、遼寧省の日本語教員が中心になって、国際交流基金、三菱銀行国際財団、TJFからの資金的援助を受け、小学校用として初めて本格的な教科書(101頁参照)が出版されるのに伴い、阜新県(正式には、阜新蒙古族自治县)という小学校日本語教育の新しい拠点の開拓に成功している。

こうした動きを受けて、TJFは中高校日本語教師研修会が一段落したことから、2003年度より、遼寧省基礎教育研究教師研修センター(前遼寧教育学院)との共催で、全中国を対象とした小学校日本語教師研修会のプロジェクトをスタートさせた。実際はSARSの影響により、写真教材(次頁コラム参照)の制作・寄贈と副教材パック(次頁コラム参照)の選定・寄贈を先行させ、第1回研修会は2004年度に開催、50名が参加した。100名いるといわれる小学校日本語教師が全員研修の機会が得られるよう、向こう2年間は継続して研修会を実施する予定である。また、研修会と併行して、日中の小学生の交流促進事業を開始した。TJFが橋渡しをした佛寺小学校と東京の大久保小学校では、手紙や生徒の作品を交換するなどの交流が始まっている。こちらの支援も継続して行っていきたい。



TJFが制作・寄贈した写真教材「日本の小学生生活」の写真シートを熱心に見る研修生



講師と研修生がひまわりの種を食べながらの茶話会。中高校日本語教師研修会での経験が生かされた



テーマに基づいたワークショップ型の授業を楽しむ研修生

写真教材：写真シート（カラーA3判35枚）、冊子（A4判108頁）、音声テープ（30分）

写真シートは、TJFが1995年に制作した小学校3年生の「けんたろうくんの一日」の写真の一部(13シーン)と、2003年秋に新たに撮影した東京都内の区立小学校の「6年1組の一日」の写真(31シーン)で構成されている。「けんたろうくんの一日」は、石川県金沢市に住む高峰憲太郎くんの起きてから寝るまでの一日を、学校での生活も含めて記録している。「6年1組の一日」は、6年1組の子どもたちの学校での一日(授業、休み時間や放課後の遊び、給食、委員会や係の仕事など)を記録している。

冊子には、写真シートの各シーンについての説明と、日本の小学生の生活に関する補足情報を日中2カ国語で掲載している。また、テープには、憲太郎さんと6年1組の子どもたちによる海外の子どもたちに向けたメッセージ

を収録している。日本語を勉強する海外の小学生に、実在する日本の小学生や学校という生きた素材を通して、日本の小学生のことや学校生活について理解を深めながら日本語を学んでもらうことを目的に制作した。



副教材パック

遼寧省基礎教育研究教師研修センターでは2001年度から2003年度にかけて、国際交流基金、三菱銀行国際財団、TJFの助成を受け、小学校向けの日本語教科書『小学日語教材』の制作に取り組んだ。2003年度の完成に合わせて、TJFは同研修センターと協議のうえで、教科書を補完するさまざまな視聴覚教材や教具などの副教材を、日本語教育を実施する中国の小学校や教育センターに寄贈するプロジェクトを企画、また副教材パックに含める副教材の選定を行った。

副教材パックには、年少者に対する日本語教育のために制作された教材・教具(「すごろくゲーム・にほんご探検」)のほか、日本の子どもたちがことばを学ぶために用いるひらがな・カタカナ表、くもん式のことば絵カードシリーズ、ことば絵事典、絵本、学習世界地図・日本地図などのほか、日本の子どもたちの生活や遊びの一端を体験し、遊びの中からことばが学べるように、ペーゴマやけん玉、お手玉、福笑い、竹とんぼ、テープ付き童謡集、教室活

動のための小道具として利用できるおもちゃのマイクやお金セットなどを入れた。さらに、これらの副教材を活用してもらえるよう、副教材の説明および使い方を記した手引き(日中語併記・日本語は振り仮名付き)と、日本語教育専門家3名の協力を得て、副教材を使った教室活動例やおもちゃの遊び方の実演を収録したビデオも制作した。

なお、これら副教材の購入と副教材パックの輸送については日本の外務省所管の「草の根無償資金協力」を受けた。



(4) 研修会後の各省の動向

中国中高校日本語教師研修会後、TJFは、各省の教員が中心になって企画・実施する日常的な日本語教育研究活動(研究会、研修会、発表会、シンポジウム、ワークショップ、学習奨励などを含む)に可能な限り支援しつつ、初中等教育レベルにおける日本語教育を取り巻く各省の状況を見守り、情報交換に努めている。各省の状況は異なっており、当然抱えている問題も一様ではない。初中等教育の現場を統括する立場にある教員の苦悩と課題は尽きることがない。TJFは中国の初中等教育レベルにおける日本語教育を、国や文化を超えた「次世代の教育」という共通課題の一環として捉え、今後も地道に取り組んでいきたい。

① 吉林省

吉林省では国際文化フォーラムの助成を受け、2003年度に「日本語教育と異文化理解」シンポジウム、2004年度に「吉林省第1回中高校生日本語スピーチコンテスト」の全省規模の大きな活動を行った。

シンポジウムには、省内の中高校の日本語教師約70名が参加し、想像以上の盛況ぶりだった。教師による模擬授業、論文発表のほか、「日本語教育と日本文化」「異文化理解のための個文化理解」「日本語教育の中でどう文化を捉えるか——ステレオタイプを利用してステレオタイプを乗り越えて——」といった講義が中日の専門家によって行われた。中高校の教師が集まってこうしたテーマについて発表し、学び合うシンポジウムは、中国国内においてこれが初めてではなかっただろうか。国際文化フォーラムは、中高校日本語教師研修会を通して、日本語教育に文化理解を浸透させていくべきだという新しい教育理念を提示してきた。と同時に、このテーマに関連する教材や資料、情報誌などを日本語教師たちに寄贈し、教師たちの実践を考え方や素材、経験の面で力強く支援した。こうして新しい教育理念と実践方法は教師たちに深く根付くようになった。この機運を捉えて、シンポジウムを開催したのである。

一方、スピーチコンテストは、コミュニケーション志向の授業を提唱するために開催したものである。中高校生、引率教師、地域の教研員、ジュニア専門家を含め約60名が参加し、出場した生徒と引率教師を大いに奮起させた。出場した生徒たちからは、コンテストへの参加は、日頃の実力を発揮できただけでなく、口頭表現力を鍛え、他校の生徒と交流を深めるまたとない機会となった、という感想が寄せられた。また、引率教師からは、今後もコンテストを継続してほしいという要望が出され、関係者一同、今後隔年で実施することを確認し合った。コンテストの実施に際しては、日本語を学習している中高校生のことを広く知ってもらうために、マスコミへの働きかけを積極的に行った。また、開催に先立って行われた地区予選も、各地区の中高校日本語教育の振興に寄与したと考えている。

吉林省では、日本語を開設する学校数、特にクラス数が減少している。つまり、現在抱えている最大の問題は学習者数の減少である。この減少傾向をいかにして抑制するかが今後の課題となろう。日本語は国家が規定する教育課程に組み込まれた科目の一つである。衰退に任せておくわけにはいかない。今後は、全省を対象とする調査を行い、日本語の開設状況に関する正確な数字を把握し、学習者減少の原因を突き止め、有効な対策を積極的に講じていきたい。対策の一つとしては、今後も教師研修に力を入れ、研究会などの実施を通して、教師たちの教授力を向上させ、それによってもっと多くの子どもを日本語学習にひきつけたいと考えている。

尹勝傑（吉林省教育学院日本語教研員）

（本書に掲載している尹勝傑氏の文章はTJFが翻訳、編集しました）

2 黒龍江省

中高校日本語教師研修会后、われわれは、国際文化フォーラムやジュニア専門家などの協力を得て、中高校の日本語教師に対し、地域とテーマを限定した小規模の研修会を定期的実施してきた。今後もこれを継続していきたいと考えている。主に経験交流、公開授業、論文発表などの形式を通して教師研修を行い、同時に情報交流を促進したい。必要に応じて中学と高校を別にして実施したいと考えている。

この数年、全国的に日本語教育が著しく衰退している。多くの中高校では日本語から英語に切り替えている。黒龍江省でも2000年あたりから、漢族の中高校の日本語教育は全滅状態になった。しかし、朝鮮族の中高校では、日本語開設の規模は縮小していない。これは、日本語教育が受験に不利な少数民族の進学率向上に貢献しているという事情があるからである。日本語は朝鮮語と語順が似ており、朝鮮族が学ぶのに大変都合がよい。日本語を学習したお陰で、朝鮮族の生徒たちは長年にわたり大学入試で漢民族と肩を並べており、清華大学や北京大学をはじめさまざまな名門大学に多数の生徒が進学できた。最近の大学入試の日本語と英語の成績を比べると平均20点の差がある。1点の差で合否が分かれる大学入試で、この数字は驚くべき数字だ。また、現在の就職状況を見ても、日本語ができることで、大学に進めなくとも活路を見出す生徒は多い。したがって、朝鮮族の生徒たちにとって日本語の学習は大学進学やその後の進路において非常に有利であるといえる。このような状況を見れば、日本語を選ばない手はない。

また、中高校と同様、小学校でもわれ先に英語を導入し始めている。しかし、一旦小学校で英語を勉強すれば、中高校や大学に進んでもみんな英語を選択するに違いない。そうなれば、中国の改革開放の国策に反する結果となる。というのは、全国で一つの外国語しか学ばないというのは、国の人材需要に応えることができないのは明らかだからだ。そこで、黒龍江省では2000年に小学校に日本語教育を実験的に導入した。当初3校だったのが、現在は15校に増えている。今後は実情に合わせて、段階的に拡大しつつ、定着を図っていきたい。国際文化フォーラムが2004年からスタートさせた全中国小学校日本語教師研修会は、わが省の小学校日本語教育を強力に支えることになるだろう。この研修会開催期間中、会場を訪れた国際文化フォーラムの事務局長と会合をもった時、事務局長はわが省の小学校日本語教育に対し大きな関心を示し、今後も教師研修の機会を提供していきたいと言われた。われわれも、省内の小学校日本語教育の継続的発展を維持するためには、小学校日本語教師全員を研修させる必要があると考えている。

張石煥（黒龍江省教育学院日本語教研員）

（本書に掲載している張石煥氏の文章はTJFが翻訳、編集しました）

3 遼寧省

遼寧省で日本語を開講している学校は168校あり、日本語教師は629名いる。この数字は漢族、朝鮮族、蒙古族の小学校、中高校を含む。7回の研修会に参加した中高校日本語教師は140名近くに上る。また、33名が2004年の第1回全中国小学校日本語教師研修会に参加した。そのほか、国際交流基金と国際文化フォーラムの援助のもと1996年から2004年にかけて省内で開催した13回のミニ研修会には延べ535人が参加した。ほぼ全員が研修会に一度は参加し、日本の専門家の授業を直接受けることができた。このことは他の教科では想像すらできないことである。

ミニ研修会では、中学と高校を分け、毎回日本人講師に関わってもらった。これは、7回の研修会を通じて、中学と高校の教師の研修会に望む内容が同じでないこと、日本人講師が果たす役割の大きさが分かっていたからである。その後、日常的な教研活動においても日本人講師に関わってもらえるように、ジュニア専門家の派遣を要請し、2002年に実現した。これらの経験と人的資源を基礎にして、遼寧省骨干教师^{※4}研修会を開くことができた。今後は、日本語の知識だけでなく、生徒に問題意識をもたせ、自力で探求することによって答えを見つけさせる方法について、教師とともに考えるような研修会が行われることが望ましいと考える。

一方、遼寧省では、1980年代後半から、大連市金州区の小学校（漢族）を中心に日本語教育が行われてきた。1990年代のピーク時には開設校47校、学習者1万7000名、日本語教師が約50名に上った。

2000年以降、国際交流基金をはじめ三菱銀行国際財団、国際文化フォーラムの支援を受けて、遼寧省ないし全国においても、初めての本格的な小学校用日本語教科書『小学日語教材』が完成した。これを機に、阜新県という小学校日本語教育の新たな拠点を得た。しかし一方で、大連市の漢族の学校では日本語を中止したり再開したりと、不安定さを孕んでいる。このような時期だからこそ、日本語教研員自身の絶え間ない努力と教育行政への積極的な働きかけ、日本側の継続した支援が望まれる。

曾麗雲（遼寧省基礎教育研究教師研修センター日本語教研員）

（本書に掲載している曾麗雲氏の文章はTJFが翻訳、編集しました）

※4：一定基準によって選ばれた候補者が、規定の研修と課題を修了し、審査に合格した人のみ骨干教師として省教育庁によって認定される。遼寧省では2001年に、向こう10年以内に、各教科の教師総数の1%を研修させる計画を発表した。毎年1000人に1人の割合である。そのため、総数が1000人に満たない日本語教師は、当初からこの計画に含まれていなかったが、曾麗雲氏をはじめとする日本語教研員が関係者と交渉した結果、特例として2003年度骨干教師研修計画に20名の小中高校日本語教師が組み込まれることになった。骨干教師は、教育理論、教授技能、コンピュータ技術（資料収集、教材作成、プレゼンテーションなど）を身につけることが必須である。教授技能については、過去7回の研修会への参加をもって、修了と見なされた。教育理論とコンピュータ技術一般については、他教科との共同研修がある。この骨干教師研修会は、日本語ソフトを使った研修を中心に行われた。

『小学日語教材』

聞く・話す能力の育成をめざしたコミュニケーション志向の教科書。また、日本語の語感を習得させ、文化理解を促進することをめざしている。小学生を主人公に設定し、学校や家庭での勉強場面、生活場面、遊びの場面を中心に、各課の内容が展開されている。「です」「ます」体の教科書ことばではなく、子どもの話しことばをベースに、先生や大人との会話場面では丁寧語を取り入れている。また、小学生が親しみやすいようにフルカラーで印刷されており、絵やイラスト、ゲーム、歌などを全面的に取り入れている。さ

らに、教科書の内容を収録した付属テープは、音声の正確さを表現するために大人の声で吹き込んだものと、子どものことばを表現するために日本の小学生の声で吹き込んだもの、2種類からなっている。



4 内蒙古自治区

2004年現在、自治区内で日本語を開設している中高校は約20校、教えている教師は約60名いる。これらの中高校は、一、二校を除き、高校から日本語課程を始めるケースがほとんどである。高校から日本語を開始する場合は、3年間で6年間の学習内容を消化しなければならない。しかし、高校から開始する学校でさえ近年は減少傾向をみせている。中学スタートの学校はすでに生徒募集を止めているので、これから日本語は廃止されるか、高校からの開始に改められるかであろう。

このような状況変化の原因はいくつか考えられる。まず、小中高校における英語科目の隆盛がある。特に、2001年教育部から小学校での英語開設に関する通達が公布され、今後小中高校の外国語教育科目は英語に限定されるだろうという印象を社会一般に与えた。二つめは、大学入試である。以前は日本語を履修した場合、大学入試の難易度の面で優遇が受けられた。日本語学習者の得点は英語学習者よりやや高かったため、大学に入りたい生徒は進んで日本語を選択した。しかし近年、日本語の試験問題の難易度が上がった。日本語を開設する学校にしてみれば、得るものより失うものが大きくなったわけで、これが日本語の大幅な減少または停止につながっている。三つめは、以前、日本語を開設していた学校には、質の高い英語教師が不足していて、逆に質の高い日本語教師がいた。しかし近年、各大学の英語本科および専科は募集枠が拡大し、大量の卒業生を社会に送り出している。これは日本語を止めて英語に切り替えたい学校にとって、教師の人材が用意されたことになる。そのため、一部の中高校は英語への切り替えに踏み切った。四つめの原因としては、以前日本語を開設していた学校には、日本語教育に熱心だった校長がいたが、彼らが離退職したことで、日本語教育が廃止されたことが挙げられる。

今後日本語教研活動を主催し、実施するにあたって困るのは、内蒙古の教育予算が少ないことである。毎回の実施には、国際文化フォーラムの助成はあるものの、他にも資金的援助を求めなければならない。次に困るのは、私の専門がロシア語であるため、日本語教研活動を行う場合、招集はできるが指導ができないことである。第三に困るのは、内蒙古では日本語を開設している学校数が少なく、しかも東西に散在してお互いに遠く離れているため、一カ所に集めることが難しいことである。したがって、東北三省と比較して日本語教研活動を行う際の困難はきわめて大きいといえる。

しかし、日本側の強いサポートを受け、教師たちの声に応えるべく多くの問題を克服して教研活動を実施してきた。厳しい状況ではあるが、今後も日本語教師と日本語教育のために微力ながら精一杯努めていきたいと思っている。

陳弘法（元内蒙古自治区教育厅外国語教研員）

（本書に掲載している陳弘法氏の文章はTJFが翻訳、編集しました）

カリキュラム：第1回(1996年)

時	8:30-10:00	10:15-11:45	14:15-15:30	15:45-17:15	17:15~	
曜日	1	2	3	4	課外	
1日目	受け付け					
2日目	開講式	情報交換ミーティング 外国語学校クラス/普通中学クラス	大学入試 合同クラス	外国語学校クラス/普通中学クラス	文字・語彙	
3日目	発音 8クラス	聴解・口頭 (含日本事情) 外国語学校クラス/普通中学クラス	文法 外国語学校クラス 読解 普通中学クラス	外国語学校クラス 教科書教授法 普通中学クラス	文字・語彙 教科書教授法 普通中学クラス	
4日目	文法 外国語学校クラス 読解 普通中学クラス	作文指導 合同クラス	聴解・口頭 (含日本事情) 合同クラス			質問・自由
5日目	発音 8クラス	聴解・口頭 (含日本事情) 外国語学校クラス/普通中学クラス	文字・語彙 外国語学校クラス 教科書教授法 普通中学クラス	個人面談		
6日目	文字・語彙 外国語学校クラス/普通中学クラス	聴解・口頭 (含日本事情) 外国語学校クラス/普通中学クラス	読解 外国語学校クラス 文法 普通中学クラス	教材・教具紹介 合同クラス		
7日目	教科書説明・意見交換				日中交流会	
8日目	ピクニック				自由	
9日目	教学大綱 合同クラス	教科書教授法 外国語学校クラス 文字・語彙 普通中学クラス	教科書教授法 外国語学校クラス 読解 普通中学クラス	個人面談	個人面談	
10日目	発音 8クラス	聴解・口頭 (含日本事情) 外国語学校クラス/普通中学クラス	個人面談	個人面談	個人面談	
11日目	文字・語彙 外国語学校クラス/普通中学クラス	読解 外国語学校クラス 文法 普通中学クラス	聴解・口頭 (含日本事情) 外国語学校クラス/普通中学クラス	文法：質疑応答 合同 個人面談	質問・自由	
12日目	発音 8クラス	聴解・口頭 (含日本事情) 外国語学校クラス/普通中学クラス	読解 外国語学校クラス 文法 普通中学クラス	情報交換ミーティング 外国語学校クラス/普通中学クラス	閉講式	
13日目	異文化理解講座 合同クラス	異文化理解講座 合同クラス	作文指導 合同クラス			
時	8:30-10:00	10:15-11:45	14:15-15:30	15:45-17:15	17:15~	
曜日	1	2	3	4	課外	
1日目	17:00-19:00 歓迎宴/13日目 17:00-19:00 歡送宴					

カリキュラム：第2回(1997年)

曜日	時	8:30-9:15	9:25-10:10	10:20-11:05	11:15-12:00	13:30-14:15	14:25-15:10	15:20-17:20	
1日目		1	2	3	4	5	6	課外	
		クラス分けテスト・採点・クラス分け							開講式
2日目		発音 母語別10クラス	交際用語 レベル別3クラス	文法・語彙 レベル別3クラス	文法・語彙 レベル別3クラス	教科書教授法 母語別2クラス		ビデオ鑑賞	
3日目		発音 母語別10クラス	聴解・口頭 レベル別3クラス	読解 中学高校別クラス	読解 中学高校別クラス	大学入試 合同クラス		個人面談	
4日目		交際用語 レベル別3クラス	交際用語 レベル別3クラス	文法・語彙 レベル別3クラス	文法・語彙 レベル別3クラス	教室活動 合同クラス		個人面談	
5日目		発音 母語別10クラス	聴解・口頭 レベル別3クラス	読解 中学高校別クラス	読解 中学高校別クラス	日本語の音声と音声指導 合同クラス			
6日目		日本語の音声と音声指導 合同クラス	文法・語彙 レベル別3クラス	文法・語彙 レベル別3クラス	文法・語彙 レベル別3クラス	日本語教育と文化理解 合同クラス			
7日目		市 内 観 光							
8日目		休 息 日							
9日目		日本語の丁寧な表現 合同クラス	発音 母語別10クラス	聴解・口頭 レベル別3クラス	聴解・口頭 レベル別3クラス	日本語音声の特色とその指導の方法について 合同クラス		個人面談 ビデオ鑑賞	
10日目		音声表現実習 合同クラス	交際用語 レベル別3クラス	文法・語彙 レベル別3クラス	文法・語彙 レベル別3クラス	聴解・口頭 レベル別3クラス		個人面談	
11日目		発音 母語別10クラス	聴解・口頭 レベル別3クラス	文法・語彙 レベル別3クラス	文法・語彙 レベル別3クラス	直接教授法における視覚的技法 合同クラス		個人面談 ビデオ鑑賞	
12日目		視覚表現実習 合同クラス	交際用語 レベル別3クラス	読解 中学高校別クラス	読解 中学高校別クラス	聴解・口頭 レベル別3クラス		個人面談	
13日目		模擬授業 合同クラス	情報交換ミーティング 文法・語彙クラス	直説教授法における視覚的技法 合同クラス	直説教授法における視覚的技法 合同クラス			閉講式	
曜日	時	1	2	3	4	5	6	課外	
		8:30-9:15	9:25-10:10	10:20-11:05	11:15-12:00	13:30-14:15	14:25-15:10	15:20-17:20	

1日目 17:00-19:00 歓迎宴/6日目 18:00-20:00 在中国日本人との交流会/7日目 18:30-20:00 日中教師交流会/13日目 17:00-19:00 歓送宴

カリキュラム：第3回(1998年)

時	8:30-9:15	9:25-10:10	10:20-11:05	11:15-12:00	13:30-14:15	14:25-15:10	15:20-17:20
曜日	1	2	3	4	5	6	課外
1日目		クラス分けテスト・採点・クラス分け			研修生説明会		開講式
2日目	発音 母語別8クラス	交際用語 レベル別3クラス	文法・語彙 レベル別3クラス	文法・語彙 レベル別3クラス	教科書教授法 中学高校別2クラス		ビデオ鑑賞
3日目	発音 母語別8クラス	文法・語彙 レベル別3クラス	聴解・口頭 レベル別3クラス	聴解・口頭 レベル別3クラス	読解 レベル別3クラス		ビデオ鑑賞
4日目	発音 母語別8クラス	聴解・口頭 レベル別3クラス	読解 レベル別3クラス	読解 レベル別3クラス	誤用例について 合同クラス		個人面談 ビデオ鑑賞
5日目	中学模擬授業 合同クラス	高校模擬授業 合同クラス	模擬授業総括・意見交換 合同クラス	模擬授業 合同クラス	交際用語 レベル別3クラス		個人面談 ビデオ鑑賞
6日目	発音 母語別8クラス	文化を取り入れた日本語の授業 講義	文化を取り入れた日本語の授業 講義	文化を取り入れた日本語の授業 模擬授業	文法・語彙 レベル別3クラス		個人面談 ビデオ鑑賞
7日目		市内観光		市内観光	休息		友好クラス交流
8日目				休息			
9日目	発音 母語別8クラス	聴解・口頭 レベル別3クラス	文法・語彙 レベル別3クラス	文法・語彙 レベル別3クラス	対照言語 朝鮮語母語クラス/漢語その他母語クラス		個人面談 ビデオ鑑賞
10日目	日本語の文法を支える考え方 合同クラス	読解 レベル別3クラス	読解 レベル別3クラス	読解 レベル別3クラス	日中言語・文化比較-翻訳を事例として 合同クラス		講師・研修生懇親会
11日目	話し言葉の授業のポイント 合同クラス	助詞の使いかたと教えかた 合同クラス	助詞の使いかたと教えかた 合同クラス	助詞の使いかたと教えかた 合同クラス	文化を理解するとは？ 合同クラス		ビデオ鑑賞
12日目	交際用語 レベル別3クラス	文法・語彙 レベル別3クラス	文法・語彙 レベル別3クラス	文法・語彙 レベル別3クラス	聴解・口頭 レベル別3クラス		
13日目	文法・語彙 レベル別3クラス	文化理解ワークショップ 合同クラス	文化理解ワークショップ 合同クラス	文化理解ワークショップ 合同クラス	意見交換 母語別2クラス		閉講式
時	8:30-9:15	9:25-10:10	10:20-11:05	11:15-12:00	13:30-14:15	14:25-15:10	15:20-17:20
曜日	1	2	3	4	5	6	課外
1日目	17:00-19:00 歓迎宴/7日目	18:30-20:30 日中交流会/13日目	17:00-19:00 歓送宴				

カリキュラム：第4回(1999年)

曜日	時	8:30-9:15	9:25-10:10	10:20-11:05	11:15-12:00	13:30-14:15	14:25-15:10	15:30-17:00	
1日目	古	1	2	3	4	5	6	課外	
	黒	クラス分けテスト・採点・クラス分け						研修生説明会	
	遼	クラス分けテスト・採点・クラス分け						研修生説明会	開講式
2日目	古	発音 母語別4クラス	類義表現 レベル別2クラス	コミュニケーション表現 レベル別2クラス	聴解・口頭 レベル別2クラス	日本語の対比 合同クラス	類義表現 レベル別2クラス		
	黒	コミュニケーション表現 レベル別2クラス	教科書教授法 合同クラス	文章表現 合同クラス	教材の使い方：『教科書を作ろう』 合同クラス	発音 母語別4クラス	コミュニケーション表現 レベル別2クラス	個人面談 ビデオ鑑賞	
	遼	読解 中学高校別クラス	コミュニケーション表現 レベル別2クラス	聴解・口頭 レベル別2クラス	日本語の対比 合同クラス	発音 母語別4クラス	コミュニケーション表現 レベル別2クラス		
3日目	古	発音 母語別4クラス	コミュニケーション表現 レベル別2クラス	コミュニケーション表現 レベル別2クラス	聴解・口頭 レベル別2クラス	日本語の対比 合同クラス			
	黒	聴解・口頭 レベル別2クラス	類義表現 レベル別2クラス	話しことばの指導 合同クラス	高校教科書読解指導 合同クラス	発音 母語別4クラス	文法 レベル別2クラス	個人面談 ビデオ鑑賞	
	遼	コミュニケーション表現 レベル別2クラス	コミュニケーション表現 レベル別2クラス	言語とその文化背景 合同クラス	朝鮮族が間違いやすい日本語表現 合同クラス	発音 母語別4クラス	文法 レベル別2クラス		
4日目	古	発音 母語別4クラス	類義表現 レベル別2クラス	コミュニケーション表現 レベル別2クラス	聴解・口頭 レベル別2クラス	日本語の対比 合同クラス			
	黒	コミュニケーション表現 レベル別2クラス	コミュニケーション表現 レベル別2クラス	高校教科書文化コラム 合同クラス	聴解・口頭 レベル別2クラス	日本語の対比 合同クラス			
	遼	文法 レベル別2クラス	聴解・口頭 レベル別2クラス	コミュニケーション表現 レベル別2クラス	座談会 発音クラス	聴解・口頭 中学クラス 作文指導 高校クラス	日本語の対比 合同クラス	個人面談 ビデオ鑑賞	
5日目	古	発音 母語別4クラス	類義表現 レベル別2クラス	コミュニケーション表現 レベル別2クラス	聴解・口頭 レベル別2クラス	コミュニケーション表現 レベル別2クラス			
	黒	聴解・口頭 レベル別2クラス	類義表現 レベル別2クラス	コミュニケーション表現 レベル別2クラス	日本語の誤用 合同クラス	発音 母語別4クラス	コミュニケーション表現 レベル別2クラス	個人面談 ビデオ鑑賞	
	遼	文法 レベル別2クラス	読解 中学高校別クラス	読解 合同クラス	コミュニケーション表現 レベル別2クラス	発音 母語別4クラス	コミュニケーション表現 レベル別2クラス		
6日目	古	模範授業総括・意見交換 合同クラス	模範授業総括・意見交換 合同クラス	模範授業 合同クラス	模範授業総括・意見交換 合同クラス	教授法：高校教科書 合同クラス		ビデオ鑑賞	
	黒	模範授業：高校 合同クラス	模範授業：討論 合同クラス	模範授業：討論 合同クラス	模範授業：討論 合同クラス	日本語 合同クラス		個人面談 ビデオ鑑賞	
	遼	模範授業：高校 合同クラス	模範授業：討論 合同クラス	模範授業：討論 合同クラス	模範授業：討論 合同クラス	日本語 合同クラス		個人面談 ビデオ鑑賞	

7日目	市 内 観 光		休 息 日		日中友好クラス交流
8日目	教授法：会話指導 合同クラス		文化を取り入れた日本語の授業 合同クラス		教材の使い方：『教科書を作ろう』 合同クラス
9日目	発音 母語別4クラス	聴解・口頭 レベル別2クラス	類義表現 レベル別2クラス	発音 母語別4クラス	読解作文指導法 合同クラス
遼	文法 レベル別2クラス		大学入試 合同クラス	聴解・口頭 レベル別2クラス	ビデオ鑑賞
吉	発音 母語別4クラス	聴解・口頭 レベル別2クラス	高校教科書読解指導 合同クラス	コミュニケーション表現 レベル別2クラス	個人面談 ビデオ鑑賞
黒			コミュニケーション表現 レベル別2クラス	日中対訳 合同クラス	ビデオ鑑賞
10日目			読解 中学高校別クラス		
遼	コミュニケーション表現 レベル別2クラス			聴解・口頭 中学クラス 作文指導 高校クラス	ビデオ鑑賞
吉	発音 母語別4クラス	類義表現 レベル別2クラス	コミュニケーション表現 レベル別2クラス	大学入試の受験指導 合同クラス	個人面談 茶話会
黒		聴解・口頭 レベル別2クラス	類義表現 レベル別2クラス	読解作文指導法 合同クラス	個人面談 ビデオ鑑賞
遼	教授法 合同クラス		高校教科書 合同クラス	発音 母語別4クラス	ビデオ鑑賞
吉		類義表現 レベル別2クラス	聴解・口頭 レベル別2クラス		
黒	発音 母語別4クラス	聴解・口頭 レベル別2クラス	コミュニケーション表現 レベル別2クラス	コミュニケーション表現 レベル別2クラス	ビデオ鑑賞
12日目			コミュニケーション表現 レベル別2クラス	中学と高校の授業の違い 合同クラス	個人面談 ビデオ鑑賞
遼	文法 レベル別2クラス		教授法 合同クラス	発音 母語別4クラス	ビデオ鑑賞
吉	発音 母語別4クラス	類義表現 レベル別2クラス	聴解・口頭 レベル別2クラス		
黒		聴解・口頭 レベル別2クラス	類義表現 レベル別2クラス	意見交換 合同クラス	
遼	文化を取り入れた日本語の授業 合同クラス		教授法 合同クラス	意見交換 レベル別2クラス	閉講式
時	8:30-9:15	9:25-10:10	10:20-11:05	11:15-12:00	13:30-14:15
曜日	1	2	3	4	5
					6
					14:25-15:10
					15:30-17:00
					課外

吉は吉林会場、黒は黒龍江会場、遼は遼寧会場を表す。
1日目 17:00-19:00 歓迎宴/7日目 18:30-20:30 日中交流会/13日目 17:00-19:00 歓送宴

カリキュラム：第5回(2000年)

曜日	8:30-9:15		9:25-10:10		10:20-11:05		11:15-12:00		13:30-14:15		14:25-15:10		15:30-17:00	
	1	2	3	4	5	6	課外							
1日目	クラス分けテスト													
2日目	古	文化を取り入れた日本語の授業 合同クラス												
	黒	発音 母語別4クラス												
	遼	発音 合同クラス												
3日目	古	聴解・口頭 レベル別2クラス												
	黒	発音 母語別4クラス												
	遼	聴解・口頭 レベル別2クラス												
4日目	古	コミュニケーション表現 レベル別2クラス												
	黒	発音 母語別4クラス												
	遼	聴解・口頭 レベル別2クラス												
5日目	古	コミュニケーション表現 レベル別2クラス												
	黒	発音 母語別4クラス												
	遼	聴解・口頭 レベル別2クラス												
6日目	古	模擬授業総括・意見交換 グループ別												
	黒	中学模擬授業 合同クラス												
	遼	高校模擬授業 合同クラス												

7日目		市内観光		休息		友好クラス交流		日中交流茶話会	
8日目		休息		休息		休息		休息	
9日目	古	発音 母語別4クラス	聴解・口頭 レベル別2クラス	コミュニケーション表現 レベル別2クラス	評価法 合同クラス	ビデオ鑑賞			
	黒	聴解・口頭 レベル別2クラス	聴解・口頭 レベル別2クラス	対照言語学：日漢・日朝比較 朝鮮語母語クラス/漢語その他母語クラス	合同クラス	茶話会			
	遼	発音 母語別4クラス	聴解・口頭 レベル別2クラス	教材の使い方：「写真パネルバンク」 合同クラス	レベル別2クラス	茶話会			
10日目	古	発音 母語別4クラス	聴解・口頭 レベル別2クラス	類義表現 レベル別2クラス	合同クラス	ビデオ鑑賞			
	黒	発音 母語別4クラス	聴解・口頭 レベル別2クラス	教材の使い方：『教科書を作ろう』 合同クラス	レベル別2クラス	茶話会			
	遼	発音 母語別4クラス	聴解・口頭 レベル別2クラス	教材の使い方：『写真パネルバンク』 合同クラス	レベル別2クラス	茶話会			
11日目	古	発音 母語別4クラス	聴解・口頭 レベル別2クラス	コミュニケーション表現 レベル別2クラス	合同クラス	茶話会			
	黒	発音 母語別4クラス	聴解・口頭 レベル別2クラス	類義表現 レベル別2クラス	レベル別2クラス	茶話会			
	遼	発音 母語別4クラス	聴解・口頭 レベル別2クラス	教材の使い方：『教科書を作ろう』 合同クラス	レベル別2クラス	茶話会			
12日目	古	発音 母語別4クラス	聴解・口頭 レベル別2クラス	類義表現 レベル別2クラス	合同クラス	朗読発表・録音			
	黒	発音 母語別4クラス	聴解・口頭 レベル別2クラス	教材の使い方：『教科書を作ろう』 合同クラス	レベル別2クラス	閉講式			
	遼	聴解・口頭 レベル別2クラス	コミュニケーション表現 レベル別2クラス	意見交換会 レベル別2クラス	レベル別2クラス				
13日目	古	朗読総評・発音個別指導 母語別4クラス	教授法：ゲーム 中学クラス 作文指導 高校クラス	合同クラス	合同クラス				
	黒	朗読総評・発音個別指導 母語別4クラス	教授法：ゲーム 中学クラス 作文指導 高校クラス	合同クラス	合同クラス				
	遼	朗読総評・発音個別指導 母語別4クラス	教授法：ゲーム 中学クラス 作文指導 高校クラス	合同クラス	合同クラス				
時	8:30-9:15	9:25-10:10	10:20-11:05	11:15-12:00	13:30-14:15	14:25-15:10	15:30-17:00		
曜日	1	2	3	4	5	6	課外		

吉は吉林会場、黒は黒龍江会場、遼は遼寧会場を表す。内蒙古会場カリキュラムは127頁参照。
1日目 17:00-19:00 歓迎宴/7日目 18:30-20:30 日中交流会/13日目 17:00-19:00 歓送宴

カリキュラム：第6回(2001年)

曜日	時	8:30-9:15	9:25-10:10	10:20-11:05	11:15-12:00	13:30-14:15	14:25-15:10	15:30-17:00	
1日目		1	2	3	4	5	6	課外	
	1日目	講師会合：顔合わせ・全体確認							開講式
2日目		講師会合：発音指導について							発音クリニック
	内	採点・クラス分け・講師スタッフ会合							
	吉	類義表現 レベル別2クラス							
	黒	聴解・口頭 レベル別2クラス							
3日目		発音 合同クラス							茶話会
	内	授業指導 中学クラス/高校クラス							
	吉	コミュニケーション表現 レベル別2クラス							
	黒	聴解・口頭 レベル別2クラス							
4日目		発音 母語別4クラス							発音クリニック
	内	授業指導 中学高校別クラス							
	吉	コミュニケーション表現 レベル別2クラス							
	黒	コミュニケーション表現 レベル別2クラス							
5日目		発音 母語別4クラス							茶話会
	内	類義表現 レベル別2クラス							
	吉	視覚教材と文化理解 合同クラス							
	黒	聴解・口頭 レベル別2クラス							
6日目		発音 母語別4クラス							発音クリニック
	内	視覚教材と文化理解 合同クラス							
	吉	コミュニケーション表現 レベル別2クラス							
	黒	コミュニケーション表現 レベル別2クラス							
7日目		発音 母語別4クラス							発音クリニック
	内	視覚教材と文化理解 合同クラス							
	吉	コミュニケーション表現 レベル別2クラス							
	黒	コミュニケーション表現 レベル別2クラス							

8日目		休 息 日				9日目		休 息 日				10日目		休 息 日				11日目		休 息 日				12日目		休 息 日				13日目									
内	吉	黒	遼	内	吉	黒	遼	内	吉	黒	遼	内	吉	黒	遼	内	吉	黒	遼	内	吉	黒	遼	内	吉	黒	遼	内	吉	黒	遼								
中学模擬授業 合同クラス				高校模擬授業 合同クラス				模擬授業総括・意見交換 グループ別				教科書と文化理解 合同クラス 聴解・口頭 レベル別2クラス 教室活動、教材・教具 合同クラス コミュニケーション表現 レベル別2クラス				直接教授法における視覚的技法 合同クラス 教室活動、教材・教具 合同クラス 類義表現 レベル別2クラス コミュニケーション表現 レベル別2クラス				類義表現 レベル別2クラス				コミュニケーション表現 レベル別2クラス				類義表現 レベル別2クラス				コミュニケーション表現 レベル別2クラス							
発音 母語別4クラス				聴解・口頭 レベル別2クラス				コミュニケーション表現 レベル別2クラス				直接教授法における視覚的技法 合同クラス				コミュニケーション表現 レベル別2クラス				類義表現 レベル別2クラス				コミュニケーション表現 レベル別2クラス				コミュニケーション表現 レベル別2クラス				類義表現 レベル別2クラス				コミュニケーション表現 レベル別2クラス			
発音 母語別4クラス				聴解・口頭 レベル別2クラス				教材の使い方：「写真パネルバンク」 合同クラス				類義表現 レベル別2クラス				コミュニケーション表現 レベル別2クラス				教材の使い方：「写真パネルバンク」 合同クラス				類義表現 レベル別2クラス				コミュニケーション表現 レベル別2クラス				教材の使い方：「写真パネルバンク」 合同クラス							
発音 母語別4クラス				聴解・口頭 レベル別2クラス				作文指導 中学高校別クラス				教材の使い方：「写真パネルバンク」 合同クラス				類義表現 レベル別2クラス				作文指導 中学高校別クラス				教材の使い方：「写真パネルバンク」 合同クラス				類義表現 レベル別2クラス				作文指導 中学高校別クラス				教材の使い方：「写真パネルバンク」 合同クラス			
朗読総評・発音個別指導 母語別4クラス				聴解・口頭 レベル別2クラス				作文指導 中学高校別クラス				教材の使い方：「写真パネルバンク」 合同クラス				類義表現 レベル別2クラス				作文指導 中学高校別クラス				教材の使い方：「写真パネルバンク」 合同クラス				類義表現 レベル別2クラス				作文指導 中学高校別クラス				教材の使い方：「写真パネルバンク」 合同クラス			
8:30-9:15				9:25-10:10				10:20-11:05				11:15-12:00				13:30-14:15				14:25-15:10				15:30-17:00															
1				2				3				4				5				6				課外															
曜日				曜日				曜日				曜日				曜日				曜日				曜日															

内は内蒙古会場、吉は吉林会場、黒は黒龍江会場、遼は遼寧会場を表す。
1日目 17:00-19:00 歓迎宴/ 13日目 17:00-19:00 歓送宴

カリキュラム：第7回(2002年)

時	8:30-9:15	9:25-10:10	10:20-11:05	11:15-12:00	14:00-14:45	14:55-15:40	16:00-17:00	
曜日	1	2	3	4	5	6	課外	
1日目	クラス分け聴解テスト		インタビュー・朗読録音		採点・クラス分け	研修生説明会	開講式	
2日目	発音 朝鮮語母語クラス/漢語ほか母語クラス	発音 聴解・口頭 レベル別4クラス	教材の使い方：「写真パネルバンク」 合同クラス		教科書教授法 中学レベル別2クラス/高校レベル別2クラス		発音クリニック	
3日目	発音 母語別中高校別10クラス	聴解・口頭 レベル別4クラス	作文指導 中学レベル別2クラス/高校レベル別2クラス		教案指導(基本) 中学レベル別2クラス/高校レベル別2クラス		発音クリニック	
4日目	発音 母語別中高校別10クラス	聴解・口頭 レベル別4クラス	コミュニケーション表現 レベル別4クラス		教案指導(発展/課題出し) 中学レベル別2クラス/高校レベル別2クラス		発音クリニック	
5日目	発音 母語別中高校別10クラス	聴解・口頭 レベル別4クラス	作文指導 中学レベル別2クラス/高校レベル別2クラス		文型・文法導入と練習法 中学レベル別2クラス/高校クラス		発音クリニック	
6日目	発音 母語別中高校別10クラス	聴解・口頭 レベル別4クラス	コミュニケーション表現 レベル別4クラス		文型・文法導入と練習法 中学レベル別2クラス/高校レベル別2クラス		日本の歌	
7日目	休 息 日							
8日目	発音 母語別中高校別10クラス	聴解・口頭 レベル別4クラス	コミュニケーション表現 レベル別4クラス		教材の使い方：『教科書を作ろう』 合同クラス		日中研修生交流会	
9日目	発音 母語別中高校別10クラス	聴解・口頭 レベル別4クラス	コミュニケーション表現 レベル別4クラス		教案指導(課題発表、討論) 中学レベル別2クラス/高校レベル別2クラス		ビデオ鑑賞	
10日目	発音 母語別中高校別10クラス	聴解・口頭 レベル別4クラス	コミュニケーション表現 レベル別4クラス		教案指導(「私の工夫」発表) 中学レベル別2クラス 課程標準 高校クラス		情報交流	
11日目	朗読発表/録音 母語別中高校別10クラス		作文指導 高校レベル別2クラス 文化理解ワークショップ 中学クラス		課程標準 中学クラス 教案指導(「私の工夫」発表) 高校クラス		茶話会	
12日目	朗読総評・発音個別指導 母語別中高校別10クラス		作文指導 中学レベル別2クラス 文化理解ワークショップ 高校クラス		意見交換 中学レベル別2クラス/高校レベル別2クラス		日中合同閉講式	
時	8:30-9:15	9:25-10:10	10:20-11:05	11:15-12:00	14:00-14:45	14:55-15:40	16:00-17:00	
曜日	1	2	3	4	5	6	課外	

1日目 17:30-19:30 歓迎宴 / 12日目 17:30-19:30 歡送宴

カリキュラム：第5回(2000年)内蒙古会場

時	8:30-9:15	9:25-10:10	10:20-11:05	11:15-12:00	13:30-14:15	14:25-15:10	15:30-17:00
曜日	1	2	3	4	5	6	課外
1日目	クラス分けテスト・朗読録音		採点・クラス分け		講師打合せ	研修生説明会	開講式
2日目	発音 合同クラス	発音 合同クラス	聴解・口頭 レベル別2クラス		会話指導法 合同クラス		個人面談 茶話会
3日目	発音 3クラス	聴解・口頭 レベル別2クラス	類義表現 合同クラス		コミュニケーション表現 合同クラス		個人面談 ビデオ鑑賞
4日目	発音 3クラス	聴解・口頭 レベル別2クラス	類義表現 合同クラス		コミュニケーション表現 合同クラス		個人面談 茶話会
5日目	発音 3クラス	聴解・口頭 レベル別2クラス	類義表現 合同クラス		コミュニケーション表現 合同クラス		個人面談 ビデオ鑑賞
6日目	自由行動						
7日目	聴解・口頭 2個班		類義表現 合同クラス		コミュニケーション表現 合同クラス		茶話会
8日目	発音 3クラス	聴解・口頭 レベル別2クラス	類義表現 合同クラス		コミュニケーション表現 合同クラス		ビデオ鑑賞
9日目		聴解・口頭 レベル別2クラス	類義表現 合同クラス		コミュニケーション表現 合同クラス		茶話会
10日目	発音 3クラス	聴解・口頭 レベル別2クラス	教材の使い方：「写真パネルバンク」 合同クラス		教室活動、教材・教具 合同クラス		朗読発表/録音
11日目	朗読総評・発音個別指導 3クラス		教材の使い方：『教科書を作ろう』 合同クラス		意見交換 3クラス		閉講式
時	8:30-9:15	9:25-10:10	10:20-11:05	11:15-12:00	13:30-14:15	14:25-15:10	15:30-17:00
曜日	1	2	3	4	5	6	課外

1日目 17:00-19:00 歓迎宴/11日目 17:00-19:00 歡送宴

研修会申請書(研修生推薦表)

所在 学校	校名:		电话: () -		照片 必须粘贴
	邮编:		传真: () -		
	地址:		E-mail:		
个人 情况	姓名:	民族:	() 年生	性别:	
	家庭电话: () -	E-mail:			
学历	本人()年毕业于()		所学专业: ()		
日语 学习 情况	学校名		学习时间		有无日本人教师
	1	() 年 () 个月			
	2	() 年 () 个月			
	3	() 年 () 个月			
	4 学校以外: a自学 b个人辅导 c其他 ()				
日语 教龄	共计: 年	初一: 年	初二: 年	初三: 年	其他: 年
		高一: 年	高二: 年	高三: 年	现担任: () 年级的课程
有无 访日 经验	访问城市	访问期间		访问目的	
	1				
	2				
	3				
日常有无与日本人说日语的机会: 1. 经常有 2. 偶尔有 3. 完全没有					
希望培训的项目或您在日语教学中遇到的疑难问题(要求具体/详细):					
1			5		
2			6		
3			7		
4			8		
校长推荐意见:			省教研员推荐意见:		
校长签名·盖章:			本学员日语能力: () 级		
			A级: 能够适应全日语授课且具备较好的日语交际能力		
			B级: 基本能适应全日语授课但日语交际能力有待提高		
			C级: 很难适应日语授课且非常缺乏日语交际能力		
			省教研员签名:		

「研修生推薦表」には、以下の項目が含まれる。

- ・所属校: 学校名、郵便番号、所在地、電話、FAX、E-mail
- ・個人状況: 氏名、民族、生年、性別、電話、E-mail
- ・最終学歴: 卒業年、卒業校、専攻
- ・日本語学習歴: 学校、期間
- ・日本語教師歴: 担当学年ごとの年数
- ・訪日経験の有無、訪問先や訪問目的
- ・日常的に日本人と話す機会の有無、頻度
- ・研修を受けたい分野、日本語を教える中で遭遇する疑問や質問
- ・所属校校長の推薦意見、署名、公印
- ・教研員の推薦意見(研修生本人の日本語力: レベルA~C)、署名

研修会申請書(日本語開設状況)

校名								校長姓名			
学	a. 初级中学		b. 高级中学		c. 完全中学						
校	a. 汉族学校		b. 民族学校()族()		语授课						
性	a. 非重点学校		b. ()级重点中学								
质	直接管辖本校的教育行政机构: a. 镇 b. 县 c. 区 d. 市 e. 省										
生 员 情 况	学 校 整 体 规 模										
	区 分	初 一	初 二	初 三	高 一	高 二	高 三	合 计			
	班 数	个 班	个 班	个 班	个 班	个 班	个 班	个 班			
	学 生 数	人	人	人	人	人	人	人			
	日 语 班 级 规 模										
	区 分	初 一	初 二	初 三	高 一	高 二	高 三	合 计			
	班 数	个 班	个 班	个 班	个 班	个 班	个 班	个 班			
	学 生 数	人	人	人	人	人	人	人			
	和前年度相比, 初高中日语学生增减情况: 初中 增·减()人 / 高中 增·减()人										
	本学校自()年起开设日语课程				日语组负责人:				日语教师人数:		
日语课性质: a. 第一外语 b. 第二外语				其他外语开设情况: a()语 b()语 c()语							
日 语 教 师 情 况	姓 名	性 别	年 龄	民 族	毕 业 年	毕 业 学 校		日 语 教 龄	公 办 或 民 办		
教 材 设 备	日语教学参考书/资料				现在所使用的日语教材						
	1. 辞典/参考书()册				1. ()						
	2. 录像带 ()盘				2. ()						
	3. 录音带 ()盘				3. ()						
	4. 图片教材 ()套				4. ()						
电子网页网址: ()				日语文字处理系统: ()							
友 好 交 流	1. 交流的学校或机构名:										
	2. 交流方式:										
	3. 开始交流的契机:										
	4. 其他交流设想:										

「日本語開設状況」には、以下の項目が含まれる。

- ・ 学校名、校長氏名
- ・ 学校属性: 初級中学、高級中学、完全中学(中高一貫校)のいずれか
漢族学校、民族学校のいずれか。民族学校の場合の民族、授業で使う言語は何か
重点学校、非重点学校のいずれか、重点学校の場合、市レベル、省レベルのいずれか
- ・ 直接管轄する教育行政機関はどこか(鎮、県、区、市、省のいずれか)
- ・ 生徒の状況: 各学年全体のクラス数と各クラスの生徒数、および各学年の日本語クラス数と各日本語クラスの生徒数。
前年度と比較して、日本語を履修する生徒数の増減状況
- ・ 日本語科目を開設した年度、日本語科目の責任者、日本語教師数
- ・ 日本語科目の位置づけ: 第一外国語、第二外国語のいずれか
- ・ その他の外国語科目の設置状況はどうか
- ・ 全日本語教師の状況: 氏名、性別、年齢、民族、卒業年、卒業校、日本語教師歴、正教員か否か
- ・ 教材設備: 日本語の参考図書、資料にどんなものがどのくらいあるか(辞書、ビデオテープ、カセットテープ、写真教材など)、現在使用している教科書は何か。ホームページのURL、日本語入力ソフト
- ・ 日本との交流: 交流先、交流方式、交流開始のきっかけ、その他交流計画

中国中学日语教师研修会(1996-2002)问卷调查

姓名 _____ 学校名 _____
 日语教龄 _____ 年 研修会参加年度 _____ 年
 参加研修会时所在学校的名称(仅限于和现在所在学校不同的人填写): _____

请回答以下1~15的问题,并在您选择的答案号码上画圈。

1. 您是在参加研修会时才第一次和日本人交流、听日本人讲课吗?

- a. 是第一次和日本人交流、听日本人讲课。
 b. 不是第一次。

2. 参加研修会时,您期待通过研修会得到哪些收获?

3. 您认为参加研修会有收获吗?请选择一个答案。

- a. 收获很大 b. 有些收获 c. 没有收获 d. 很难说有收获

4. 通过参加研修会有什么样的收获?答案可以选择两个以上。

a. 日语能力有所提高。请具体写出:

b. 学到了很多有关日语教学法方面的知识。请具体写出:

c. 从日本讲师的教学方式以及教学态度上受到了启发。请具体写出:

d. 对自己的日语能力以及作为一名日语教师今后的努力方向有所认识。

e. 认识到了在日语教学中引入文化的重要性。

f. 增强了说日语的信心。

g. 重新认识到从事教师行业的意义。

- h. 得到了与日本人交流的机会。
 i. 结交了他校的日语教师,并了解了他校的一些日语教学情况。
 j. 研修会后开始能经常和同事一起研究日语教学方法,相互交流意见。
 k. 其他: _____

5. 研修会有哪些令您失望或感到辛苦的地方?答案可以选择两个以上。

- a. 日语能力没能得到提高。
 b. 因自己的日语能力跟不上,上课感到吃力。
 c. 没有想听的课或想听的课太少。

您当时希望能听什么内容的课:

d. 对课程内容以及授课方式不满意。 _____

请具体写出您感到不满意的地方: _____

e. 每天的授课时间太长。

f. 作业太多。

g. 研修会期太长。

h. 研修会期太短。

i. 集体生活很辛苦。

j. 能和日本人交流的机会太少。

k. 其他: _____

6. 研修会上学到的知识是否在您的日常教学之中得到了应用?

- a. 得到了充分应用。→请回答问题7和8
 b. 有些知识得到了应用。→请回答问题7和8
 c. 尝试应用过,但效果不佳。→请回答问题9
 d. 很想尝试应用,但无法实现。→请回答问题10

7. 在问题6中选择“a. 得到了充分应用”“b. 有些知识得到了应用”的人请回答此问题。

您在教学中应用了哪些收获?答案可以选择两个以上。

- a. 和以前相比,更加积极地使用日语进行授课了。
 b. 和以前相比,增加了练习会话的时间安排。
 c. 和以前相比,在课堂上能安排多样的教学活动。

例如: _____

d. 和以前相比,授课时更注重促进文化理解。

e. 和以前相比,不再单方面地向学生灌输知识,而是积极地引导学生发言。

アンケート調査票(中)

f. 和以前相比，从一脸严肃变成能面带笑容进行授课。
g. 其他：_____

8. 学生们对您的新的教学尝试有什么反应？

9. 在问题6中选择“c. 尝试应用过，但效果不佳。”的人请回答此问题。
您在教学中尝试应用了哪些知识？为什么效果不佳？请具体写出来。

①您在教学中尝试应用了哪些知识：

②为什么效果不佳：

10. 在问题6中选择“d. 很想尝试应用，但无法实现。”的人请回答此问题。
您在教学中想尝试应用哪些知识？为什么无法实现？请具体写出来。

①您在教学中想尝试应用哪些知识：

②为什么无法实现：

11. 研修会上领到的教材以及参考书中，研修会后的教学中仍在利用的有哪些？

- 漢語話者のためのわかりやすい日本語シリーズ①《発音》
- 漢語話者のためのわかりやすい日本語シリーズ②《コミュニケーション表現》
- 漢語話者のためのわかりやすい日本語シリーズ③《類義表現の使い分け》
- 漢語話者のためのわかりやすい日本語シリーズ④《助詞の使い分け文例集》
- 漢語話者のためのわかりやすい日本語シリーズ⑤《発音指導の手引き》
- 听力教材（《毎日の聞き取り50日》、《楽しく聞こう》、日语能力测试听力教材等。）

g. 图片教材（《写真パネルバンク》）

h. 《教科書をつくらう》

i. 其他：_____

12. 您在研修会上结识的该校的同期学员相互联系吗？

- 相互联系。

① 和哪些地区的老师联系？（请用圆圈画上的）：

市（县）内 _____ 省内的外市（县） _____ 省外 _____

② 相互交换什么样的信息？ _____

b. 研修会刚刚结束的时候尚有联系，后来就中断了。中断的理由是什么？请具体写出来。

c. 从来没有联系。请具体写出没联系的理由： _____

13. 通过参加研修会，您在意识上、价值观上、教育观念上是否受到了启发，或有什么发现吗？请简明扼要地写出来。

14. 今后，如果我们向您提供一个可以与日本人日语教学专家用电子邮件的形式交流信息、交换意见、解决日语教学中的疑难问题的平台，您愿意参加吗？

a. 愿意参加。我的电子邮件地址是： _____

b. 不参加。

15. 您对研修会印象最深的是什么？

16. 中国教育部公布了《日语课程标准》，您读过此书吗？

a. 读过

b. 没有读过

c. 没有这本书

非常感谢您的合作！

アンケート調査票(日)

中国中高校日本語教師研修会（1996～2002）アンケート

氏名： _____

学校名： _____ 日本語教師歴： _____ 年

研修参加年： _____ 年

研修会参加時の学校名： _____ (上記と異なる場合のみ書いてください)

次の1～15の質問について、あてはまる番号に○を付けてください。

1. 研修会に参加して初めて、日本人と話したり、教わったりしましたか。
 - a. はい。初めて日本人と話したり、教わったりしました。
 - b. いいえ。初めてではありません。
2. 研修会に何を期待していましたか： _____
3. 研修会に参加してどうでしたか。一つ答えてください。
 - a. 大変良かった。
 - b. まあまあ良かった。
 - c. 良くなかった。
 - d. どちらとも言えない。
4. 研修会に参加して良かったことは何ですか。二つ以上答えてください。
 - a. 日本語力が向上した。具体的に書いてください： _____
 - b. いろいろな教授法を学ぶことができた。例えばどんなことか、具体的に書いてください： _____
 - c. 日本人講師の教え方や姿勢から学ぶことがあった。例えばどんなことか、具体的に書いてください： _____
 - d. 日本語力、または日本語教師としての課題がわかった。
 - e. 日本語教育のなかで、文化を扱う重要性がわかった。
 - f. 日本語で話す自信がついた。
 - g. 教師のやりがいや再発見できた。
 - h. 日本人と交流できた。
 - i. ほかの中高校の日本語教師と知り合い、他校の情報を得ることができた。
 - j. 研修会后、日本語の教え方について研究したり、同僚と意見交換したりするようになった。

実際には、中国語のアンケート調査票を送付した(130、131頁参照)。

- k. その他： _____
5. 研修会に参加してがっかりしたこと、また辛かったことは何ですか。二つ以上答えてください。
 - a. 日本語力が向上しなかった。
 - b. 自分の日本語力では、講義についていけず大変だった。
 - c. 希望していた講義がなかった。あるいは少なかった。どんな講義を希望していましたか： _____
 - d. 講義の内容ややり方に不満を感じた。どんなことか、具体的に書いてください： _____
 - e. 1日の授業時間が長かった。
 - f. 宿題が多かった。
 - g. 研修の期間が長かった。
 - h. 研修の期間が短かった。
 - i. 合宿生活が辛かった。
 - j. 日本人とあまり交流できなかった。
 - k. その他： _____
6. 研修会で学んだことを授業で生かしていますか。
 - a. 大いに生かしている。⇒7、8へ
 - b. 少し生かしている。⇒7、8へ
 - c. 生かそうと試みたが、うまくいかなかった。⇒9へ
 - d. 生かしたいと思っているが、できない。⇒10へ
7. 6で「a. 大いに生かしている」「b. 少し生かしている」と答えた人のお答えください。どういうことを授業で実践していますか。二つ以上答えてください。
 - a. 授業で積極的に日本語を使うようになった。
 - b. 会話の練習を多く取り入れるようになった。
 - c. 授業にいろいろな活動を取り入れてようになった。例えばどんなことですか： _____
 - d. 文化理解の視点を授業に取り入れるようになった。
 - e. 一方的な講義ではなく、生徒の発話を引き出すようになった。
 - f. 笑顔で授業をするようになった。
 - g. その他： _____

アンケート調査票(日)

8. 新しい試みをして、生徒の反応はどうでしたか。

9. 6で「c.最初は試みたが、うまくいかなかった」と答えた人のお答えください。
 どのようなことを実践しようとして、なぜうまくいかなかったのかを具体的に書いてください。

① どのようなことを実践しましたか：

② なぜうまくいかなかったのですか：

10. 6で「d.生かしたいと思っているが、できない」と答えた人のお答えください。
 どのようなことを生かしたいと思っっていますか。なぜできないのですか。具体的に書いてください。

① どのようなことを生かしたいと思っっていますか：

② なぜできないのですか：

11. 研修会でもらった教材、参考書の中で、研修会後も活用しているものは何ですか：

a. 「漢語話者のためのわかりやすい日本語シリーズ」①『発音』

b. 「漢語話者のためのわかりやすい日本語シリーズ」②『コミュニケーション表現』

c. 「漢語話者のためのわかりやすい日本語シリーズ」③『類義表現の使い分け』

d. 「漢語話者のためのわかりやすい日本語シリーズ」④『助詞の使い分け文例集』

e. 「漢語話者のためのわかりやすい日本語シリーズ」⑤『発音指導の手引き』

f. 聴解教材

g. 写真パネルバンク

h. 『教科書をつくらう』

i. その他の参考書： _____

12. 研修会で知り合った他校の教師と連絡を取り合っていますか。

a. 連絡を取り合っている。 _____

① どの地域の先生ですか(○で囲んでください)：市内、省内の市外、省外

② どんな情報をやり取りしていますか： _____

b. 研修会直後は連絡を取り合っていたが、途絶えた。途絶えた理由は何ですか：

c. 全然連絡を取り合っていない。連絡を取り合っていない理由は何ですか：

13. 研修会に参加したことで、意識面、価値観、教育観などで考えたり、発見したり、変わったことありますか。簡潔に書いてください。

14. 電子メールを使って、中国の日本語教師と日本人の日本語教育専門家が情報を共有したり、問題を解決したり、意見を交換したりする場があれば、参加したいですか。

a. 参加したい。メールアドレスを書いてください：

b. 参加しない。

15. 最後に、研修会で一番心に残っていることを聞かせてください。

16. 「課程標準」を読んだことがありますか。

a. 読んだことがある。

b. 読んだことがない。

c. 持っていない。

ご協力ありがとうございました。

「漢語話者のためのわかりやすい日本語シリーズ」制作メンバー

代表 監修	加納陸人 水谷修	文教大学助教授 名古屋外国語大学教授
①『発音』(1998年初版、毎年改訂、2002年改訂・完成・発行)		
執筆	〈漢語話者対象〉 石井誠 「横浜・児童生徒のための日本語教育を考える会」メンバー(1998～2000) 山口敏幸 国際交流基金日本語教育専門家(1998～2002) 〈朝鮮語話者対象〉 泉文明 龍谷大学助教授(1998～2002) 新川以智子 名古屋大学非常勤講師(1998～2000)	
校閲	塩原慎次郎	
②『コミュニケーション表現』(1997年初版：『交際用語』、<1999年改題>、毎年改訂、2001年改訂・完成、2002年発行)		
監修 執筆	阪田雪子 飯島ひとみ 杏林大学非常勤講師(1997、1998、2000) 石井誠 「横浜・児童生徒のための日本語教育を考える会」メンバー(1997) 伊藤宏美 群馬大学留学生センター非常勤講師(1997) 田中妙子 慶応義塾大学国際センター専任講師(1997、1998) 本田明子 立命館アジア太平洋大学常勤講師(1997) 本田弘之 杏林大学助教授(1997～2001) 松田みゆき 島根大学非常勤講師(1999～2001)	
③『類義表現の使い分け』(1997年初版、1998、1999年改訂、2001年改訂・完成、2002年発行)		
監修 執筆	姫野昌子 飯島ひとみ 杏林大学非常勤講師(1997、2001) 石井誠 「横浜・児童生徒のための日本語教育を考える会」メンバー(1997～1999、2001) 伊藤宏美 群馬大学留学生センター非常勤講師(1997) 高野浩子 学習院大学非常勤講師(1998) 田中妙子 慶応義塾大学国際センター専任講師(1997、1999、2001) 本田明子 立命館アジア太平洋大学常勤講師(1997) 本田弘之 杏林大学助教授(1997) 山口敏幸 国際交流基金日本語教育専門家(1998、1999、2001)	
④『助詞の使い分け文例集』(1997年初版：「動詞の整理」、2001年改訂・完成、2002年発行)		
監修 執筆	阪田雪子 飯島ひとみ 杏林大学非常勤講師(1997、2001) 石井誠 「横浜・児童生徒のための日本語教育を考える会」メンバー(1997) 伊藤宏美 群馬大学留学生センター非常勤講師(1997) 田中妙子 慶応義塾大学国際センター専任講師(1997) 本田明子 立命館アジア太平洋大学常勤講師(1997) 本田弘之 杏林大学助教授(1997、2001)	
⑤『発音指導の手引き』(2002年初版・完成・発行)		
執筆 翻訳・校閲	永保澄雄 龍谷大学非常勤講師 朱春躍 元北京外国語大学教授	

(敬称略、五十音順、下線はリーダー、括弧内は関わった版の発行年、肩書きは教材完成時のもの)

その他協力者		
校閲・校正 イラスト 表紙デザイン・ 基本フォーマット 組版 声出演	佐多一郎(①『発音』～④『助詞の使い分け文例集』)、(有)天山舎(⑤『発音指導の手引き』) 浅山友貴(②『コミュニケーション表現』) 向井裕一 (有)新疆 岩田まこ都、水野惇雄(付属テープ)	
協力機関		
助成 協賛	国際交流基金(講談社よりの寄付金を原資とした国際交流基金特定助成) / (社)東京倶楽部 キングレコード(株)	

(敬称略)

日本側関係機関負担経費一覧

	三菱銀行国際財団	国際交流基金	国際協力機構	東京倶楽部	TJF
第1回 (1996年)	・280万円(現地運営費に 充当) ・大連市教育学院にコピー 機1台を寄贈	日本から2名、北京から1名の講師の 派遣費用の一部を負担	・青年海外協力隊日本語 教師隊員1名の講 師としての参加を調整		約922万円
第2回 (1997年)	・280万円(現地運営費に 充当) ・黒龍江省教育学院と大連 市教育学院にそれぞれファ ックス機1台を寄贈	・約77万円(日本からの講師派遣費用 に充当) ・高校『日語』日本側編集員1名を講師 として派遣	・青年海外協力隊日本語 教師隊員5名の講 師としての参加を調整		約716万円
第3回 (1998年)	・290万円(現地運営費に 充当) ・黒龍江省教育学院と大連 市教育学院にそれぞれコピ ー機1台を寄贈	・約80万円(日本からの講師派遣費用 に充当) ・高校『日語』日本側編集員4名を講師 として派遣	・青年海外協力隊日本語 教師隊員1名の講 師としての参加を調整		約793万円
第4回 (1999年)	・300万円(現地運営費に 充当) ・遼寧教育学院にコピー機 1台、中国教育学会外語教 学研究会にコンピュータ1 台をそれぞれ寄贈	・約198万円(日本からの講師派遣費用 に充当) ・中国赴任中派遣専門家3名を講師と して派遣 ・『教科書を作ろう』を研修生に寄贈	・青年海外協力隊日本語 教師隊員7名の講 師としての参加を調整		約704万円
第5回 (2000年)	・300万円(現地運営費に 充当) ・吉林省教育学院にコピー 機1台、中国教育学会外語 教学研究会に日本語関連図 書をそれぞれ寄贈	・約314万円(日本からの講師派遣費用 に充当) ・中国赴任中の専門家3名を講師とし て派遣 ・『教科書を作ろう』を研修生に、「写真 パネルバンク」を研修生の所属校にそ れぞれ寄贈	・青年海外協力隊日本語 教師隊員6名の講 師としての参加を調整		約992万円
第6回 (2001年)	・300万円(現地運営費に 充当) ・内モンゴル省にコピー機 1台、遼寧教育学院にビデ オ教材、研修生に聴解教材 をそれぞれ寄贈	・約327万円(日本からの講師派遣費用 に充当) ・中国赴任中の専門家3名と青年日本 語教師2名を講師として派遣 ・『教科書を作ろう』を研修生に、「写真 パネルバンク」を研修生の所属校にそ れぞれ寄贈 ・中学『日語』日本側編集員3名を講師 として派遣 ・講談社よりの寄付金を原資とした特 定助成680万円(うち505万円は研修 会開催費用に、175万円は教材制作費 に充当)	・青年海外協力隊日本語 教師隊員6名の講 師としての参加を調整	125万円(教 材制作費に 充当)	約327万円
第7回 (2002年)	・200万円(現地運営費に 充当)	・約230万円(日本からの講師派遣費用 に充当) ・中国赴任中の専門家1名と青年日本 語教師3名を講師として派遣 ・『教科書を作ろう』を研修生に、「写真 パネルバンク」を研修生の所属校にそ れぞれ寄贈 ・中学『日語』日本側編集員4名を講師 として派遣 ・講談社よりの寄付金を原資とした特 定助成587万円(研修会開催費用に充当)	・青年海外協力隊シニ ア日本語教師隊員1名 の講師としての参加を 調整 ・青年海外協力隊日本語 教師隊員5名を講 師として派遣	175万円(教 材制作費に 充当)	約156万円

- ・第1～6回では、青年海外協力隊日本語教師隊員はボランティアとして個人参加した。宿泊費、食費、交通費は主催者が負担した。
- ・TJFの負担金は、開催時のスタッフ派遣費用と教材制作費用を含む。
- ・上表のほかに、多数の出版社など(9頁参照)に教材の寄贈あるいは割引価格での提供をしていただいた。
- ・全日本空輸には、毎年、約1トンに上る教材・資料を無償で空輸していただいた。

学びと交流の場づくり

中国中高校日本語教師研修会プロジェクト 1996-2002

2005年5月発行

編集人 中野佳代子

発行人 田所宏之

発行所 財団法人 国際文化フォーラム

〒163-0726

東京都新宿区西新宿 2-7-1

第一生命ビル 26階

Tel(03)5322-5211

Fax(03)5322-5215

E-mail forum@tjf.or.jp

<http://www.tjf.or.jp/>

デザイン・DTP 関口洋史

校閲・校正 (有)天山舎

印刷・製本 近代美術(株)

© 2005 by The Japan Forum, Printed in Japan